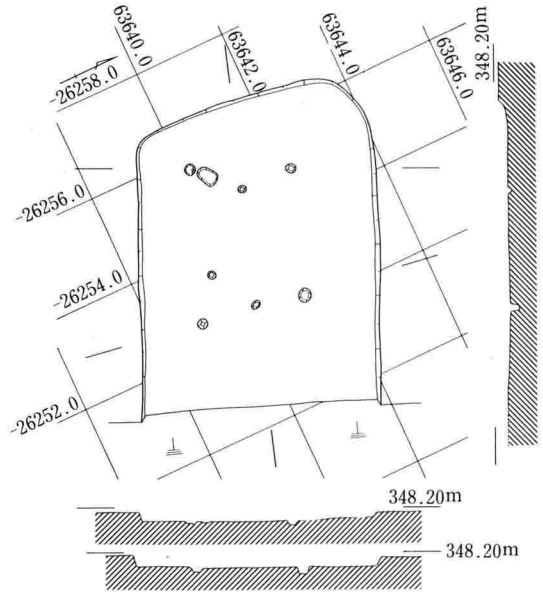


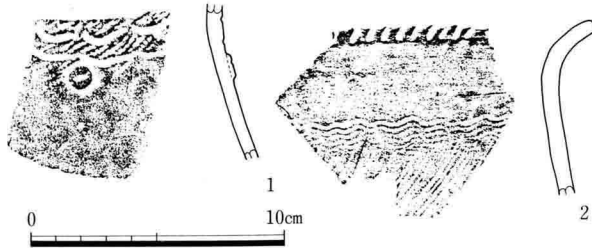
**SA148 (D区)**

住居東側は調査範囲外であるため検出できなかったが、南北方向では5.20mを測り、主軸方向は7.00m以上を測る大型の住居跡である。平面形はやや不整の長方形を呈するものと想定され、範囲内においては、柱穴と思われる掘り込み8本が確認でき、支柱穴は4本長方形配列になるものと想定される。また炉は検出されず、床面も不明瞭である。当住居跡は、検出時において比較的明瞭に確認はされたが、掘り込みが不鮮明で床面もはっきりしないため、住居跡と認識できるか否かは判然としない。

遺構の検出規模にしては出土量は少ない。出土土器[第131図]には壺(1)と甕(2)があり、壺は頸部、甕は口縁部破片で、いずれも小破片資料である。



第130図 SA148実測図 (S = 1 : 160)



第131図 SA148遺物実測図



写真136 SA148

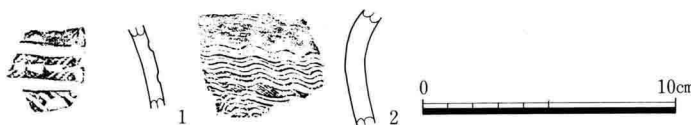
**SA149 (H区)**

調査区の南隅で検出された住居跡で、北壁のみ確認された。規模、平面形等は不明である。床面は全体に軟弱で、柱穴などの施設は検出されなかった。

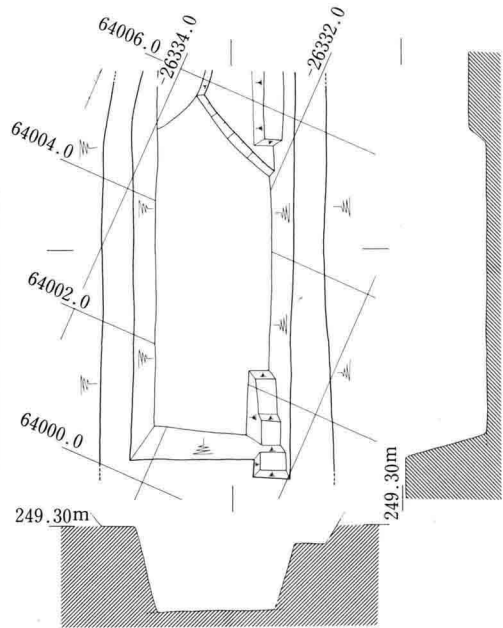
出土土器 [第133図] には壺 (1) と甕 (2) がある。壺は胴部破片で、1は沈線文間に刺突文が施される。2は波状文を施文する頸部破片である。



写真137 SA149



第133図 SA149遺物実測図

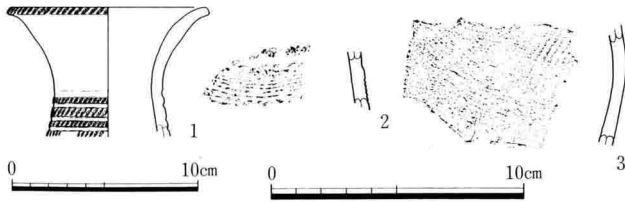


第132図 SA149実測図

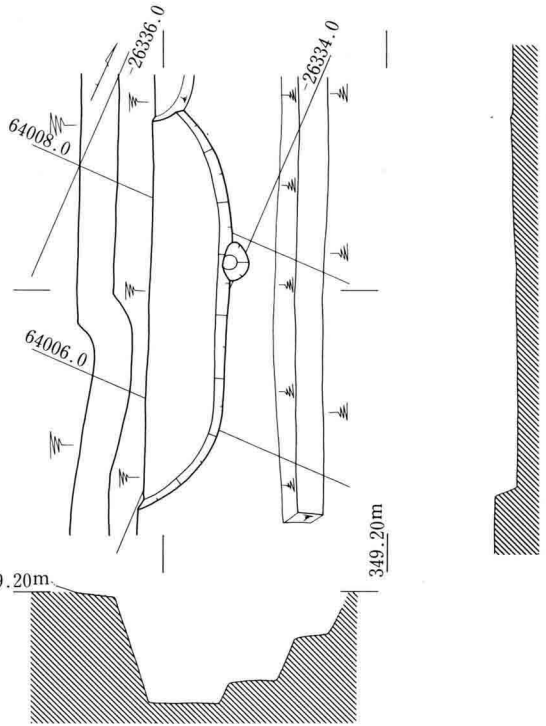
**S A 150 (H区)**

検出面幅が狭いため、住居東側の1/4程を検出したにすぎない。全体を確認できなかったため、規模などは不明であるが、隅丸方形住居を想定する。範囲内において、炉・柱穴等当住居跡にともなう施設は確認されていない。床面は住居中央付近に若干堅緻な床を確認できたものの、ほとんどは軟弱な床となる。

出土土器 [第135図] には、壺(1)と甕(2・3)がある。1は頸部に縄文を施したのち沈線文を施し、口縁端部にも縄文を施す。2は頸部破片で籐状文を施文する。3は羽状文を施文している胴部破片である。



第135図 S A 150遺物実測図



第134図 S A 150実測図

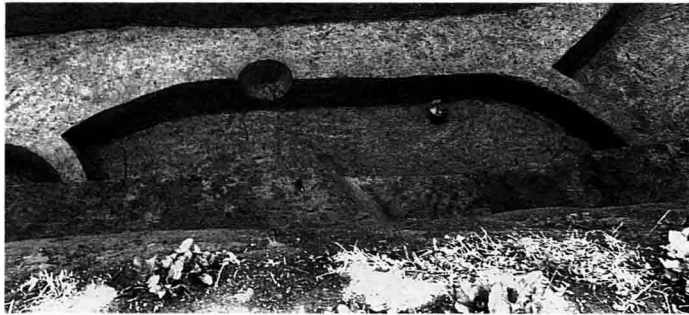
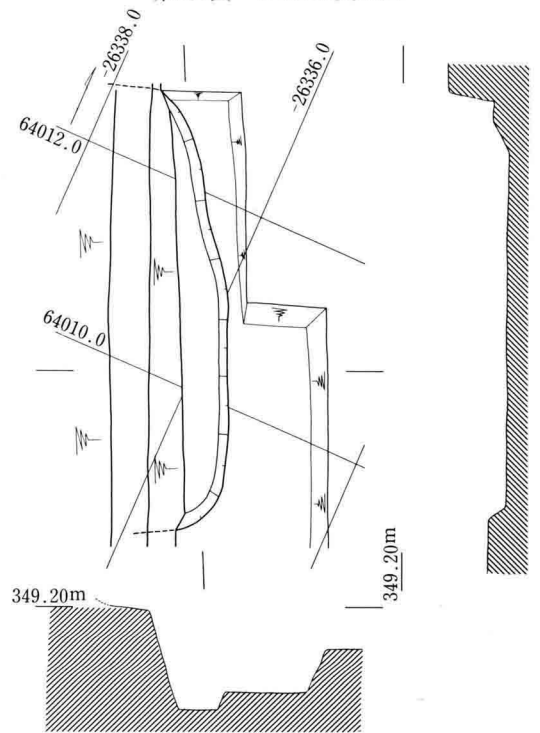


写真138 S A 150

**S A 151 (H区)**

当住居跡もS A 150同様、東側の掘り込みを検出したにすぎないため、規模に関しては不明である。住居平面形については、確認でき得た部分から隅丸方形を呈する住居跡を想定するが、断言はできない。床面は全体が軟弱ではあるが、比較的明瞭である。

住居内から出土した土器は小破片のものが多く、凶化し得るものはなかった。



第136図 S A 151実測図

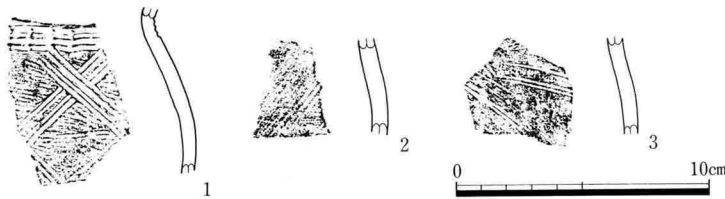


写真139 S A 151

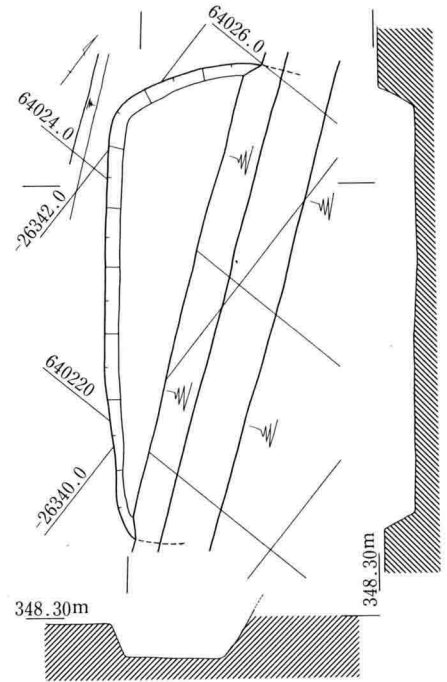
S A 152 (H区)

調査区の北隅で検出され、当住居跡より北では該期遺構が検出されていないため、遺跡の北限付近を想定する。検出範囲が狭いため、住居西側を確認しただけだが、検出した部分より主軸方向5.00m程の方形住居であると思われる。住居内において炉・柱穴などの施設は確認できなかったが、床面は住居中央付近で堅緻となり、ほかは軟弱である。

出土土器 [第138図] には甕(1~3)がある。1は頸部から胴部にかけての破片であるが、頸部には簾状文、胴部は斜状文を「X」字に交差させる文様となる。2・3はともに胴部破片である。やや不明瞭ではあるが、羽状文を施文しているものと思われる。



第138図 S A 152遺物実測図



第137図 S A 152実測図



写真140 S A 152



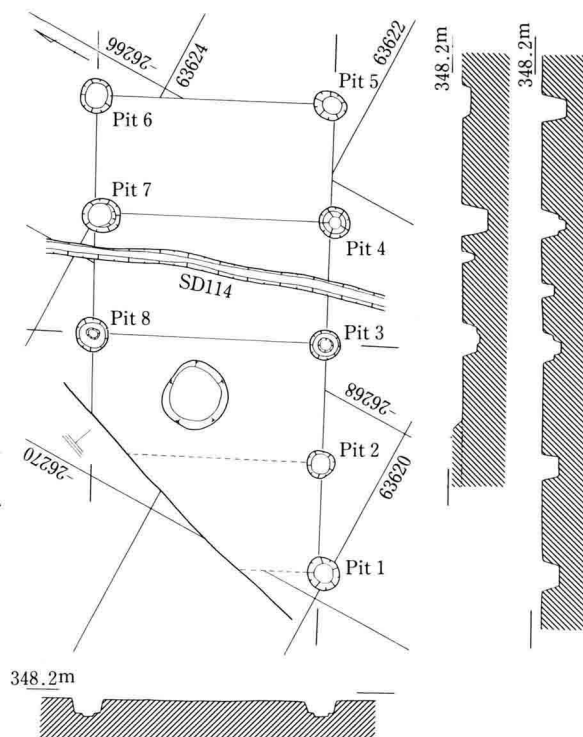
写真141 H地区 遺構分布状況

## (2) 掘立柱建物跡 (SB1～4)

今回の調査で確認された掘立柱建物跡は4棟がある。そのすべてが柱穴10本以上で構成される比較的大形の掘立柱建物跡でD・E調査区のみで検出されている。

### SB1 (D区)

D調査区の南隅で検出され、調査範囲内においてはすべてを確認するには至らなかったが、10本(以上)で構成される掘立柱建物跡である。長方形を呈し長辺5.00m短辺2.50mを測り、長辺のそれぞれの柱穴間は1.20m程である。主軸方向は北より63°東へ傾く。P3・4・8の底面には柱痕と思われる落ち込みが認められるが、いずれも浅いものである。遺物の出土は少量であり、細かな時期を把握することは難しいが弥生中期後半に位置するものであろう。



第139図 SB1実測図 (S=1:80)

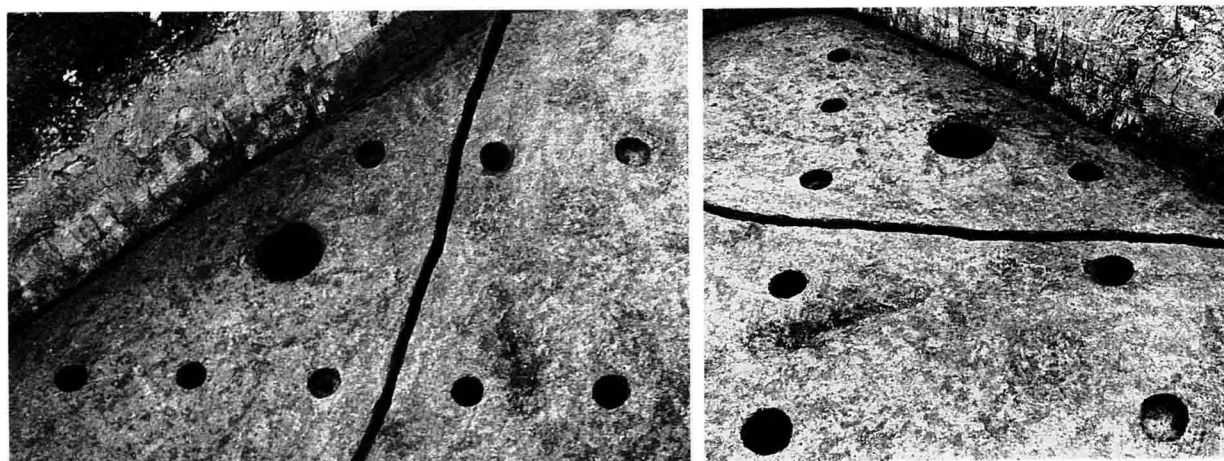
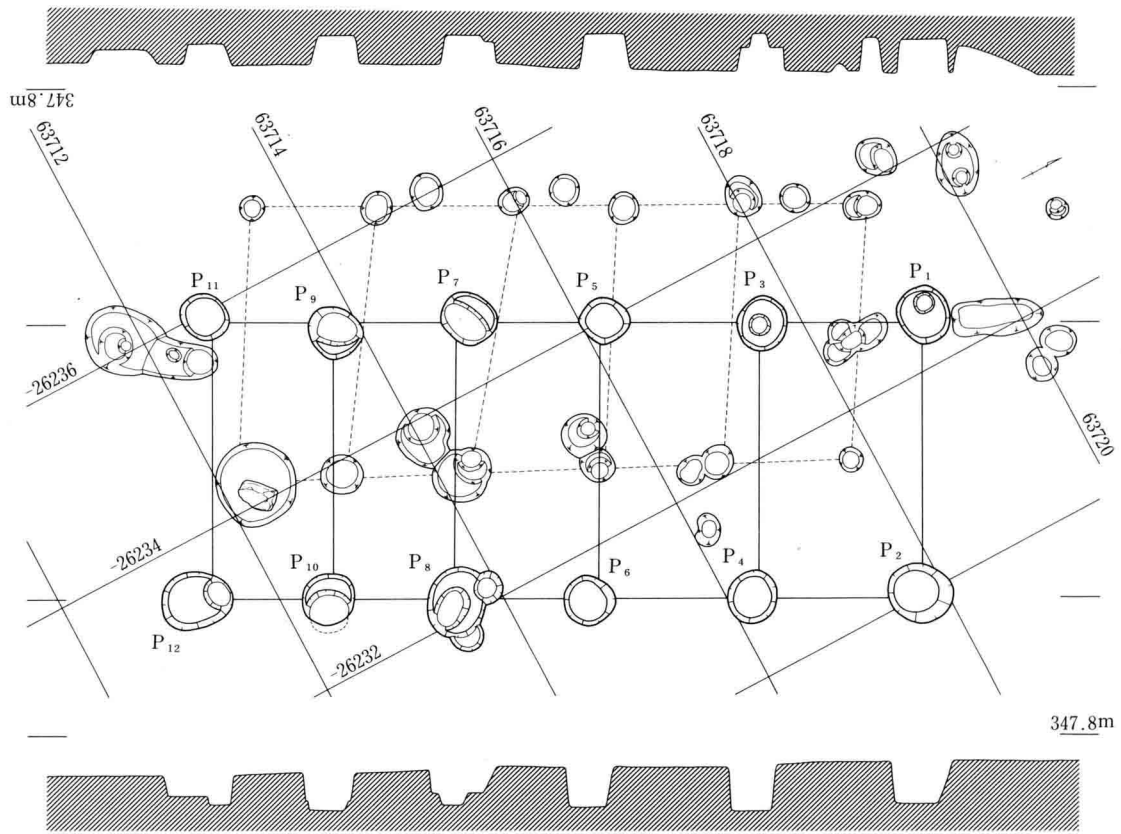


写真142・143 SB1

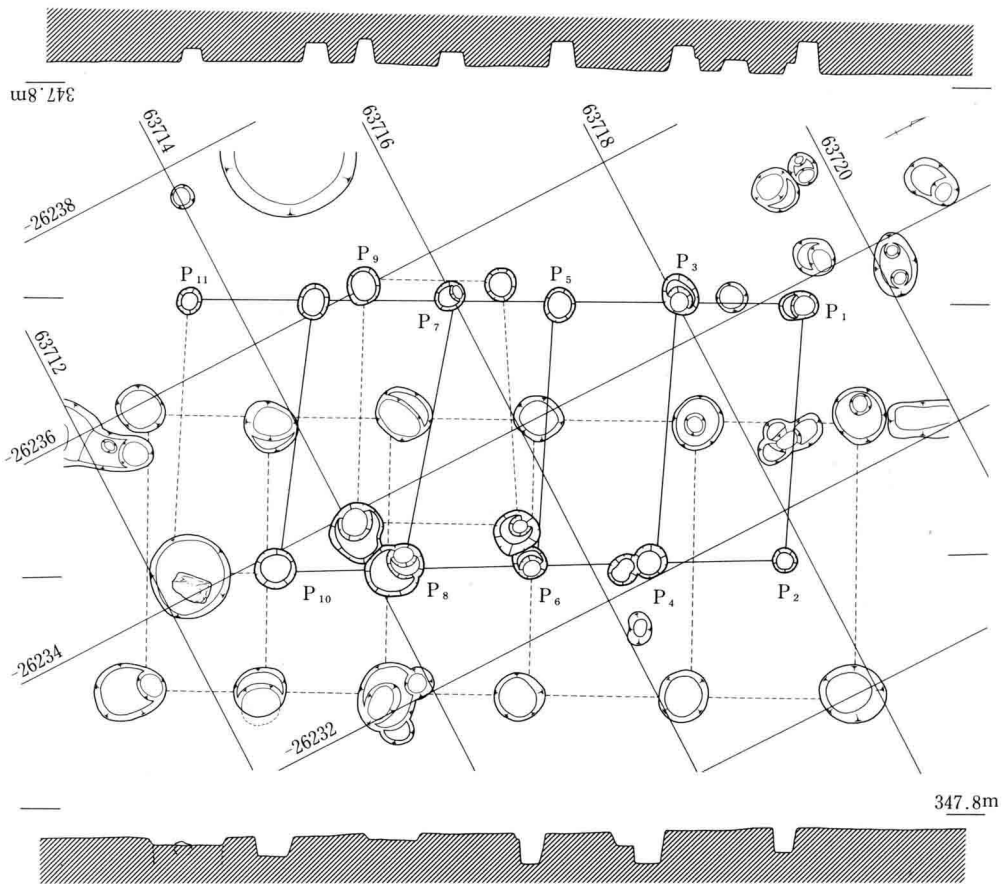


写真144 SB2～4

写真145 SB2・3



第140图 SB 2 实测图 (S = 1 : 80)



第141图 SB 3 实测图 (S = 1 : 80)

### SB 2・3 (E区)

調査区の北隅付近で、S A145の東側に柱穴群が検出された。そのうち12本の柱穴で構成される掘立柱建物跡が2棟確認されている。

SB 2は長辺7.20m短辺2.80mを測る12本柱で構成される長方形を呈する掘立柱建物跡で、主軸方向は北から28°東へ傾く。柱穴が遺構の中心となるため遺物の出土は少ないものの、弥生中期後半に位置付くものと想定される。

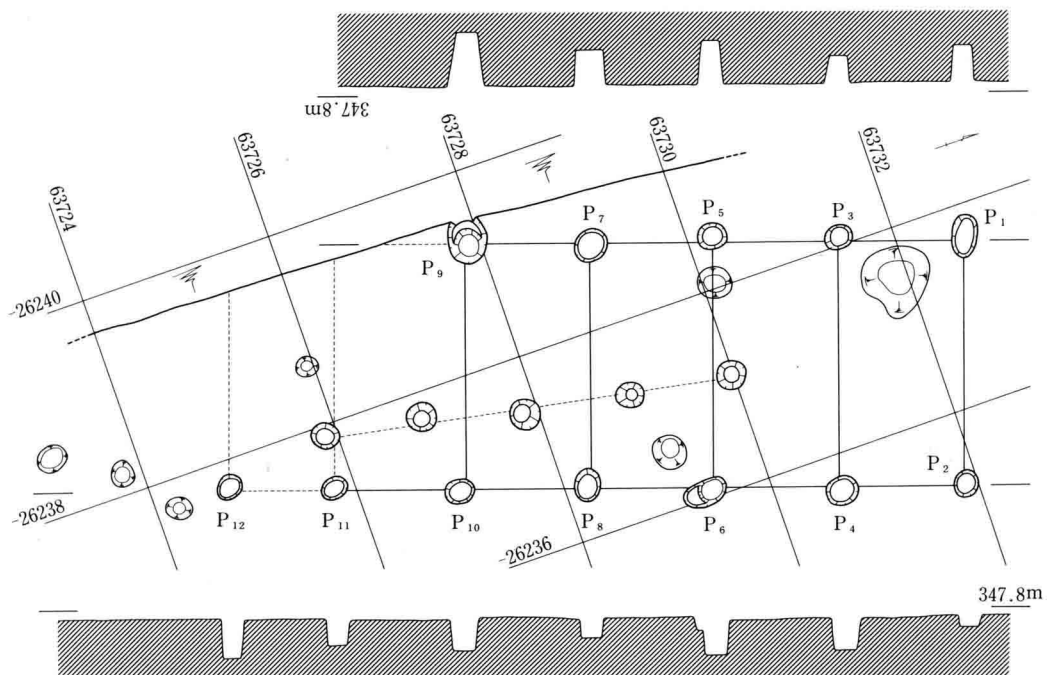
SB 3もSB 2よりやや小さく長辺6.30m短辺2.60mを測る。形態も長方形を呈し、主軸方向もSB 2と同様の方向をとる。この掘立柱建物跡も12本の柱穴で構成されるものと思われるが、南側の1本のみの中世の井戸跡による破壊を受ける。柱穴の重複関係からSB 2よりも古いとされるが、出土した土器から比較しても双方の時間的な差はさほどないものと思われる。弥生中期後半に位置付くものである。

### SB 4 (E区)

S A146の西側に柱穴群が検出され、そのうち12本の規則的に並列する掘立柱建物跡を確認した。遺構の西隅は調査区外により検出できず全体を把握することはできなかったが、恐らく14本の柱穴による長方形を呈する掘立柱建物跡であると思われる。主軸方向は北から19°東へ傾いて位置し、長辺7.50m短辺2.50mを測る。またその内部には柱穴5本からなる柱列が検出されているが、当遺構との関係は不明である。遺物の出土も非常に僅かではあるが、弥生中期後半に位置付くものと想定される。



写真146 SB 4

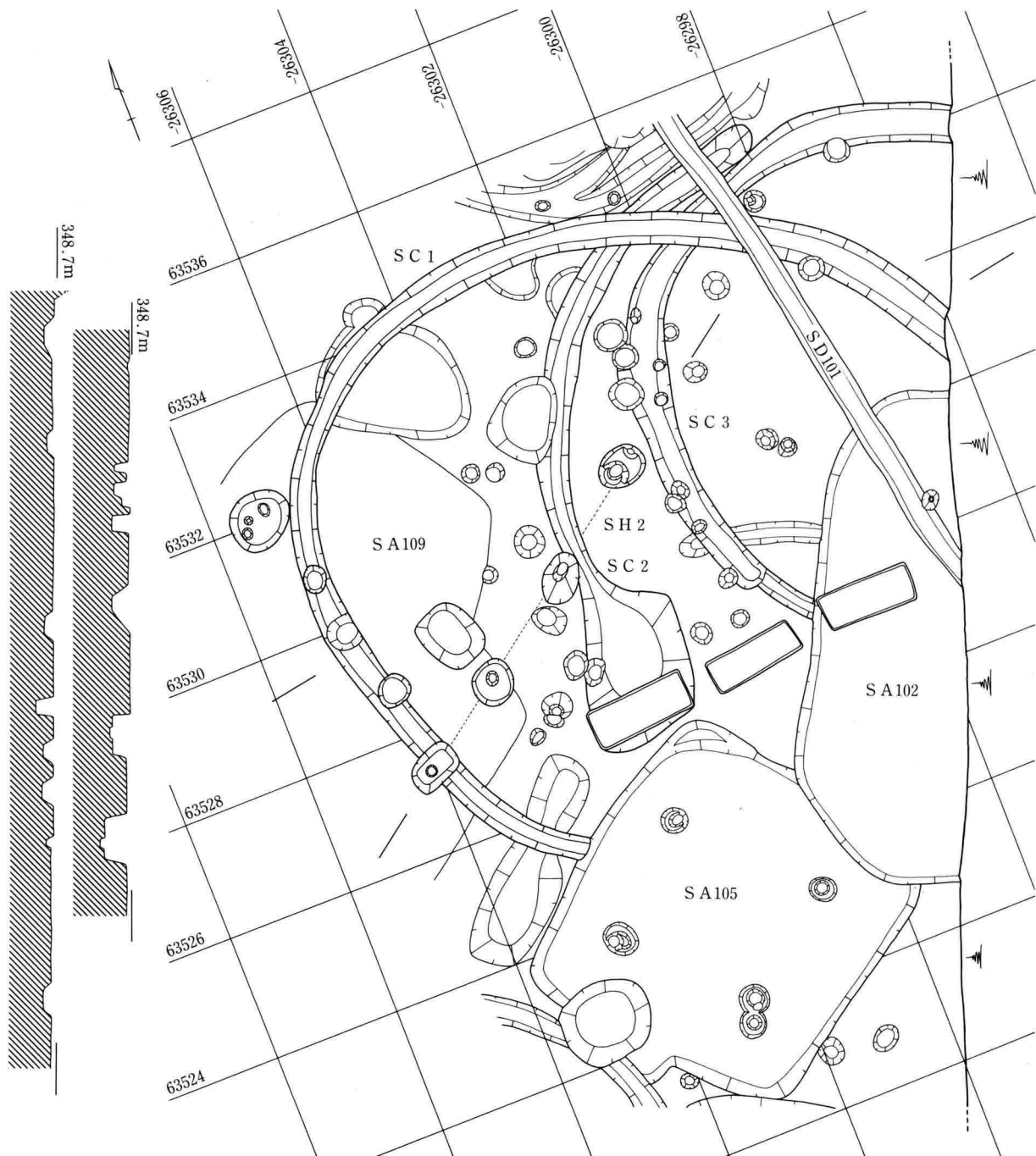


第142図 SB 4 実測図 (S = 1 : 80)

### (3) 環状溝跡 (SC 1~13)

#### SC 1 (B区)

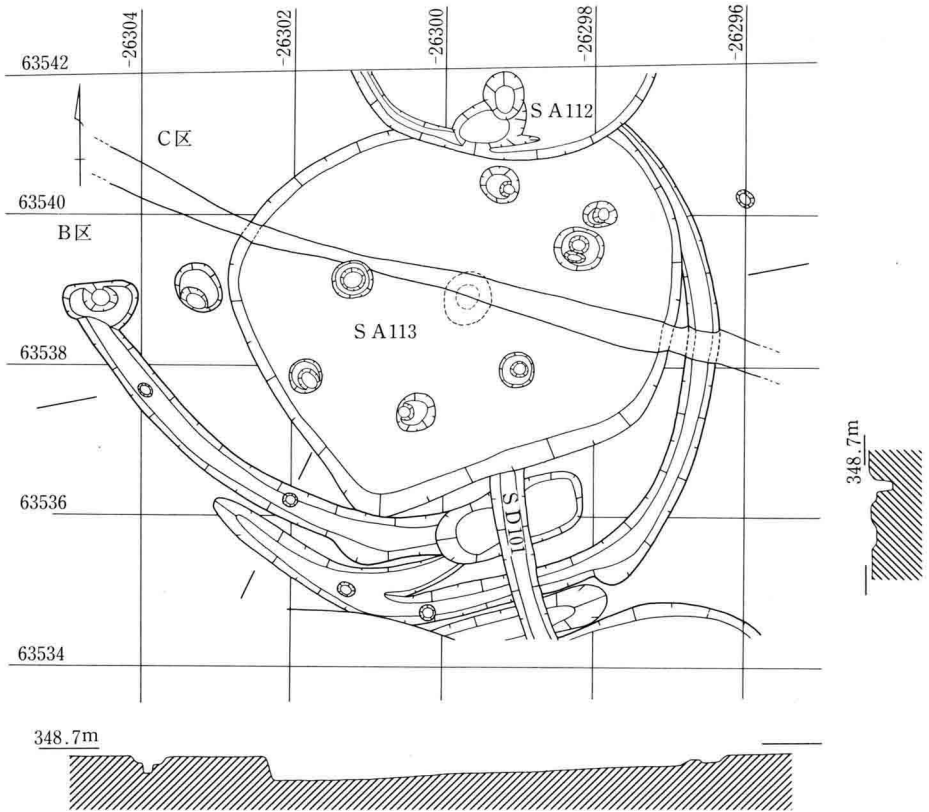
B調査区南端の遺構集中箇所検出され、遺構の重複も複雑なものとなっている。南側はSA105の破壊を受けるため全体を検出するには至らなかったが、東西方向12mほどの不整形円形を呈する。また溝に囲まれた範囲内には多くの柱穴と思しき掘り込み (SH 2等) や、土坑 (SK) が検出されているが、本遺構との関連については不明である。遺構そのものが溝であるため、遺物の出土も僅かな量となる。出土した土器から弥生中期後半に位置付くのは確実とされるが、その出土遺物から細かな時期を見いだすのは困難である。



第143図 SC 1・2・3実測図 (S = 1 : 100)

### SC 2 (B区)

この遺構も南端の遺構集中箇所において検出された。北側と南側に断絶部を持ち全周はせず、南側には土坑状の掘り込みが付属する。出土遺物もSC 1同様少量である。



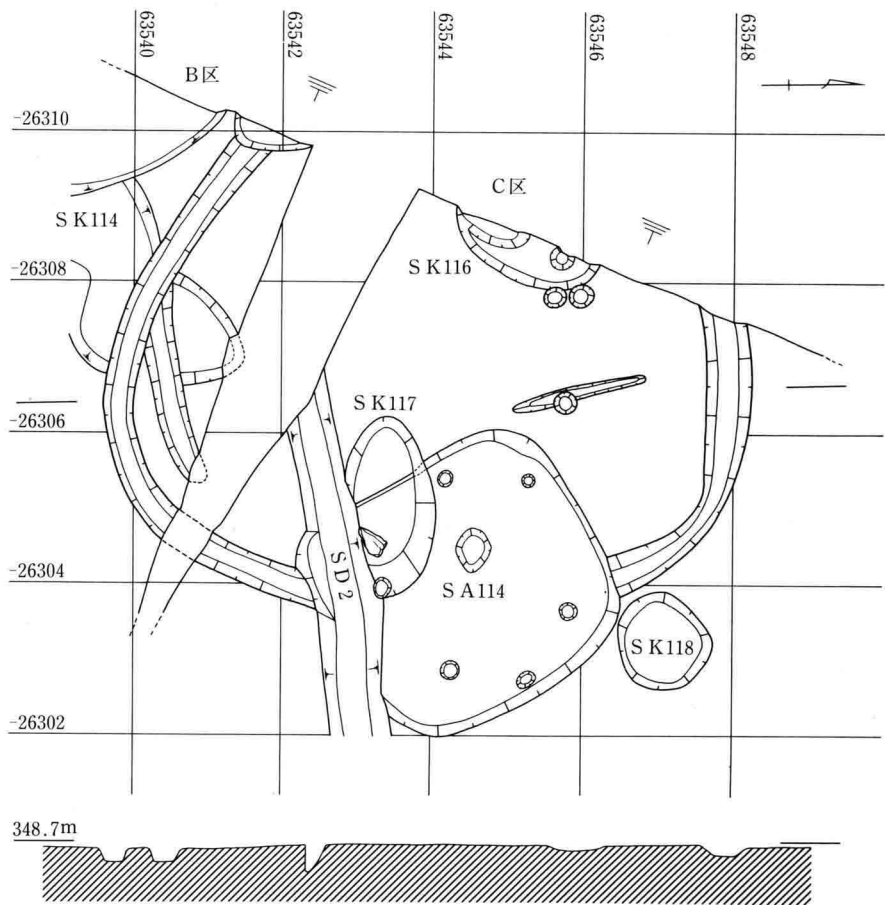
第144図 SC 4 実測図 (S = 1 : 100)

### SC 3 (B区)

南端の遺構集中箇所でも検出された環状溝跡の中でもっとも古いものと想定される。ほぼ半分を調査区域外による未検出と、SA 102の破壊により確認されていないが、形態は円形を呈するであろう。また遺物も僅かではあるものの出土しており、弥生中期後半に位置付くものである。

### SC 4 (B・C区)

B調査区とC調査区に跨がって検出され、SA 112・113と重複関係にある。形態は円形を呈すると思われるが北側は確認できなかった。半円形となるのであろうか。



第145図 SC 5 実測図 (S = 1 : 100)

### SC 5 (B・C区)

これも調査区に跨がって検出された環状溝跡で、東側をSA 114に破壊され、西側は調査区外となる。形態は不整形円形を呈し、南北方向8m程を測る。遺物の出土もあまりない。

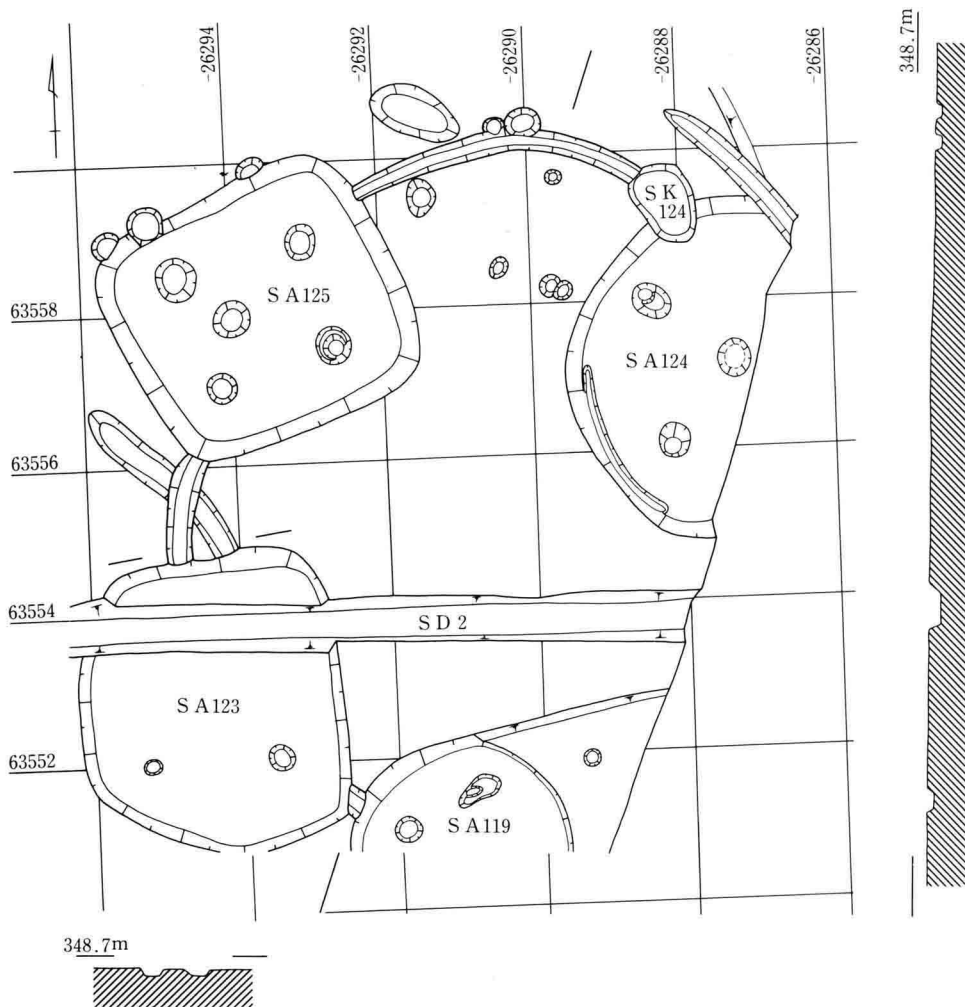




写真147 B区SC群全景

SC 6 (C区)

S A 119・123・124・125と重複関係にあり、S A 119・124・125よりは新しく、S A 123よりは古い遺構と考えられる。西側は調査区外となるが南北方向9 m前後の楕円形を呈し、北側には交差部分がある。範囲内においてこれにともなうと思われる施設は確認できなかった。



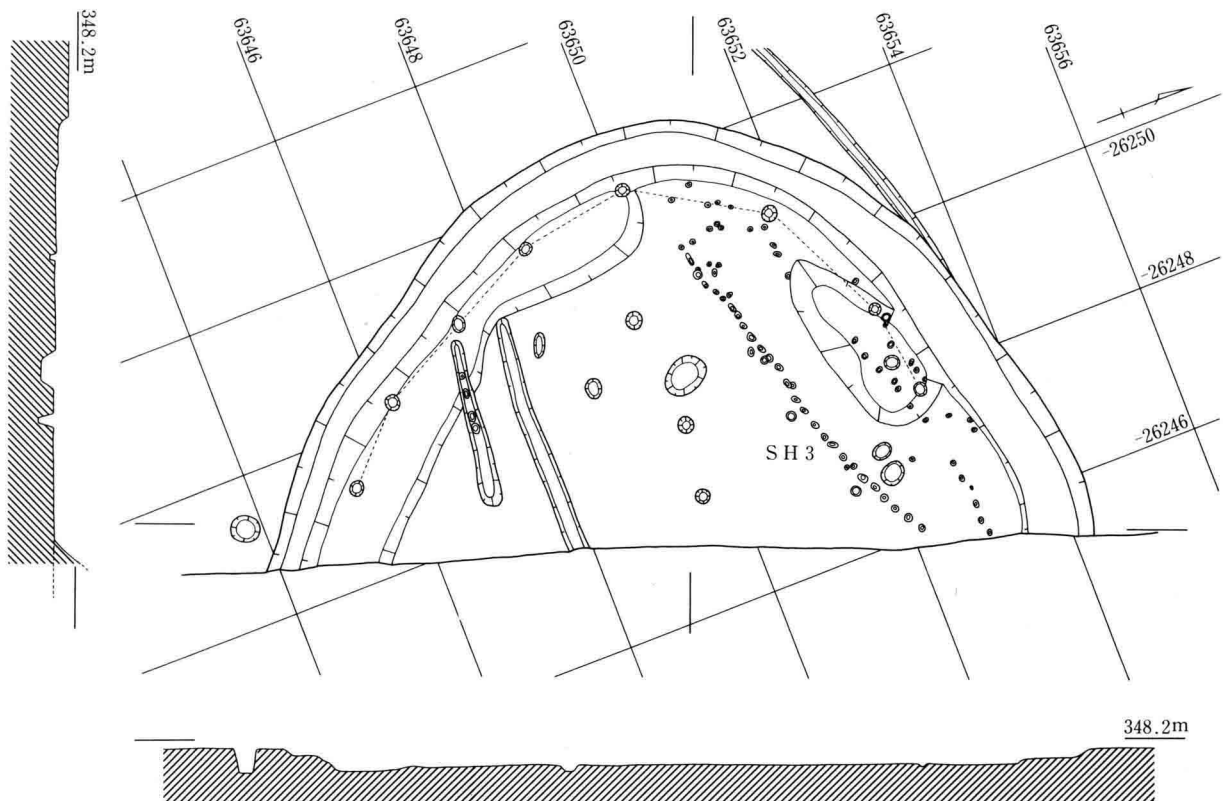
第146図 SC 6 実測図 (S = 1 : 100)

SC7 (D区)

D調査区で確認された遺構であるが、他で検出される環状溝跡とは様相が違っている。東半分ほどは調査区外により検出されていないが、隅丸方形を呈するものと想定される。遺構の掘り込みは溝状というよりも浅い竖穴状を呈し、またその下に段を持ち底面へと達する。底面には用途については不明であるが無数の小ピットからなるSH3や、溝状の掘り込みも2本検出されている。また壁際に沿うようなかたちで8本の柱穴も検出されている。遺物は南壁際の底面にかなり纏まって出土している。出土した土器の様相から中期後半に位置付くものである。



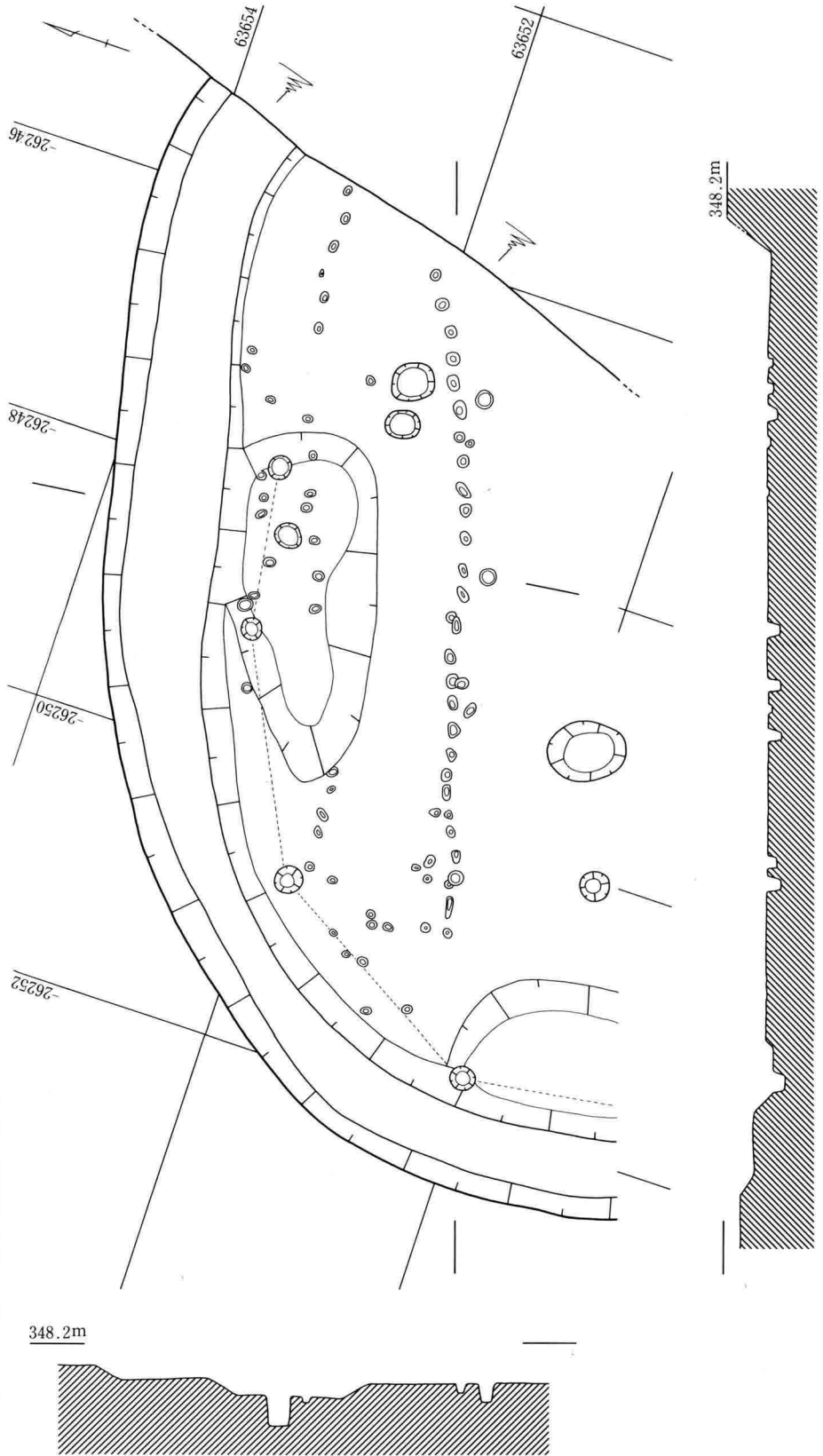
写真148 SC7



第147図 SC7実測図 (S = 1 : 100)



写真149 SH 3



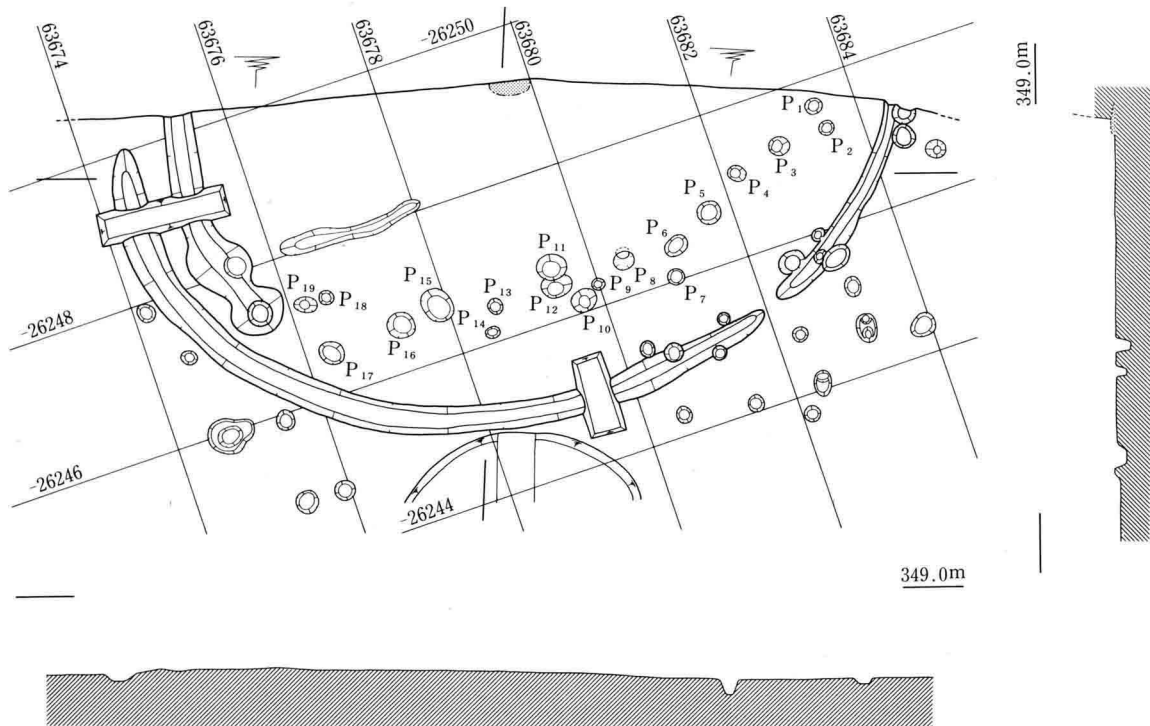
第148図 SC7SH3実測図 (S=1:50)

## SC 8 (E区)

西側は調査区外により未検出であるため全体の半分ほどが確認されただけである。形態は円形あるいは楕円形を呈するものと想定され、東側の一部に開口部を、南側には交差する部分を持つ。調査区壁際の遺構範囲のほぼ中央と推測される場所には炉跡と思われる焼土が検出されており、また東側の溝に沿うような形で柱穴が並び、開口部の周辺にも多くの小ピット検出されている。壁際に検出された焼土や巡る柱穴群がこの遺構に伴うとするならば、炉を中心としたいわゆる「平地住居跡」とも想定できる。出土遺物も非常に少なく、細かな時期の特定はできないものの、その様相から弥生中期後半に位置付くものであるが、他で検出される竪穴住居よりは新しい遺構であろうか。



写真150 E区SC群全景



第149図 SC 8実測図 (S = 1 : 100)



写真151 SC 8



写真152 SC 8・9

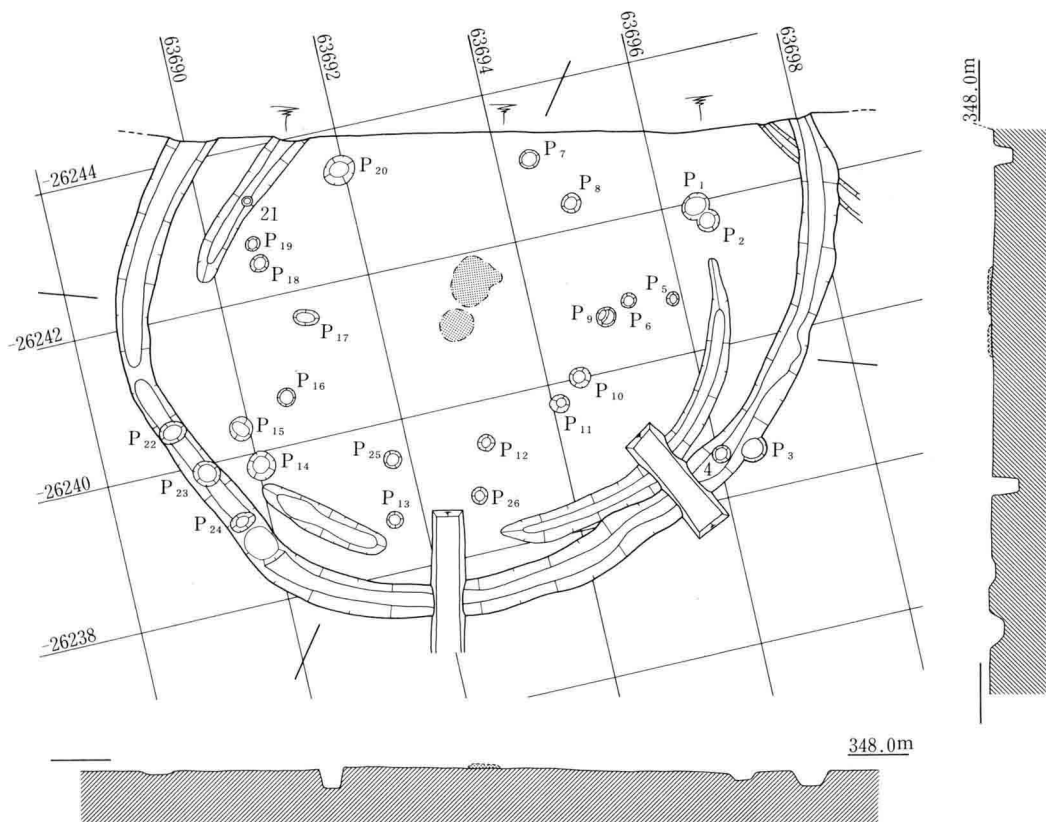


写真153 SC 9

### SC 9 (E区)

SC 8の北側にSA143を挟むかたちで検出され、南北方向9 mほどの楕円形を呈するものである。西側は調査区外により検出はできなかった。ここにおいてもほぼ中央に焼土2箇所が検出され、その周囲には柱穴が不整形ではあるものの方形に配置し、南側の溝の中には小ピット3本が並び出入口とも想定され、「平地住居跡」と考えられる根拠もより明確になってくるのではなかろうか。また溝の内側にもう一本の溝が検出され、炉跡も2箇所検出されたことから、住居の作り替えもしくは拡張が行われている可能性も指摘できよう。

今回検出された環状溝跡は主に溝が環状に巡り、その形態はほとんどが円形をなす。溝に囲まれた範囲内には小ピットが数多く確認され、またSC 8・9などは中央に炉跡とも思える焼土が確認されている。検出される遺構は溝が中心となるが故に遺物の出土は極僅かである。出土する僅かな遺物の様相から、すべての環状溝跡が弥生時代中期後半に比定し得ることは確実といえるが、細かな時期の特定をすることは困難といわざるを得ない。こういった形態の溝は今回の調査地の他、農協地点（長野市教育委員会1992）、市道松代東111号線地点（同1993）、それに（財）長野県埋蔵文化財センターによる上信越自動車道建設にともなう調査地点においても検出されており、松原遺跡のほぼ全域で確認がされている。区画される溝、焼土（炉）を伴う点、柱穴の存在などを考慮すると（平地）住居跡とも考えられ、その可能性が大きいといえよう。もしこの遺構が住居跡であるとするならば、本遺跡の住居形態の主体を占める竪穴住居跡との併存あるいは時間的な差異、季節の変化における住居の使い分け（例えば夏期には平地住居、冬季には竪穴住居というような）などその性格について様々な見解があるものに思う。北陸地方で頻繁に検出されている「溝を有する建物跡」とはやや様相が異なるものであるが、かなり類似性は含んでいるように思われる。北陸地方との関係、はたして住居跡と認識して良いものだろうか、今後検討が必要であろう。



第150図 SC 9実測図 (S = 1 : 100)

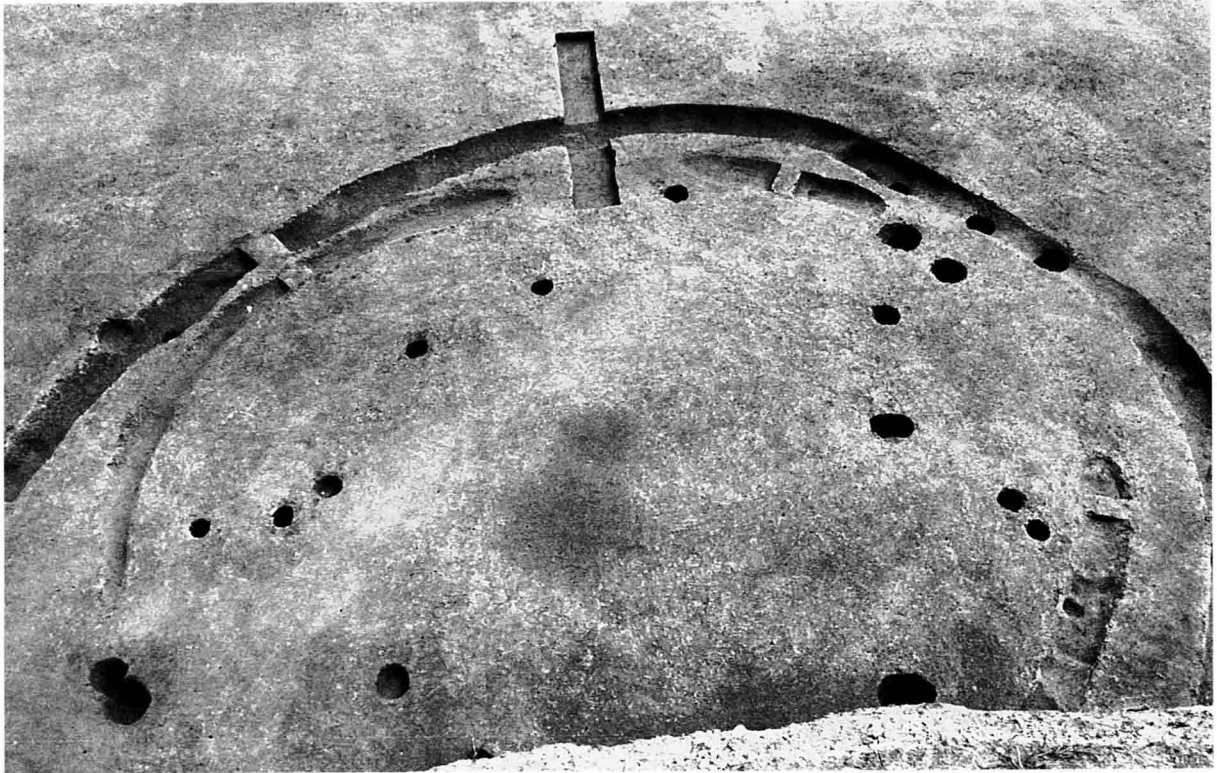
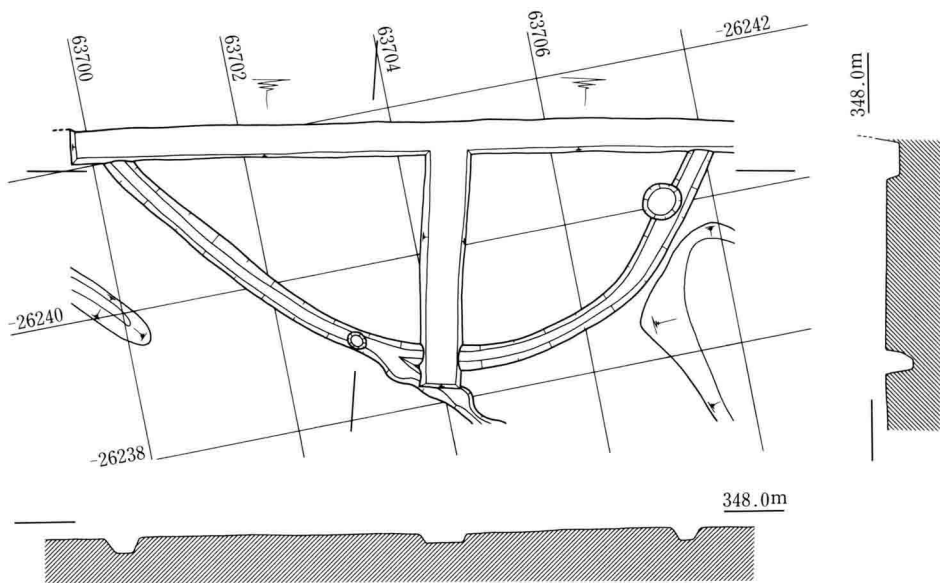


写真154 SC 9

SC10 (E区)

SC 9の北に検出されている。よって三つの環状溝跡が並ぶ形となる。東側は調査区外により未検出であるが、形態は楕円形を想定する。溝で区画された範囲内にはSC 8・9のような焼土も多くの柱穴も検出されなかった。遺物の出土も極めて少なく判然としないが、弥生中期後半に位置付くものである。



第151図 SC10実測図 (S = 1 : 100)

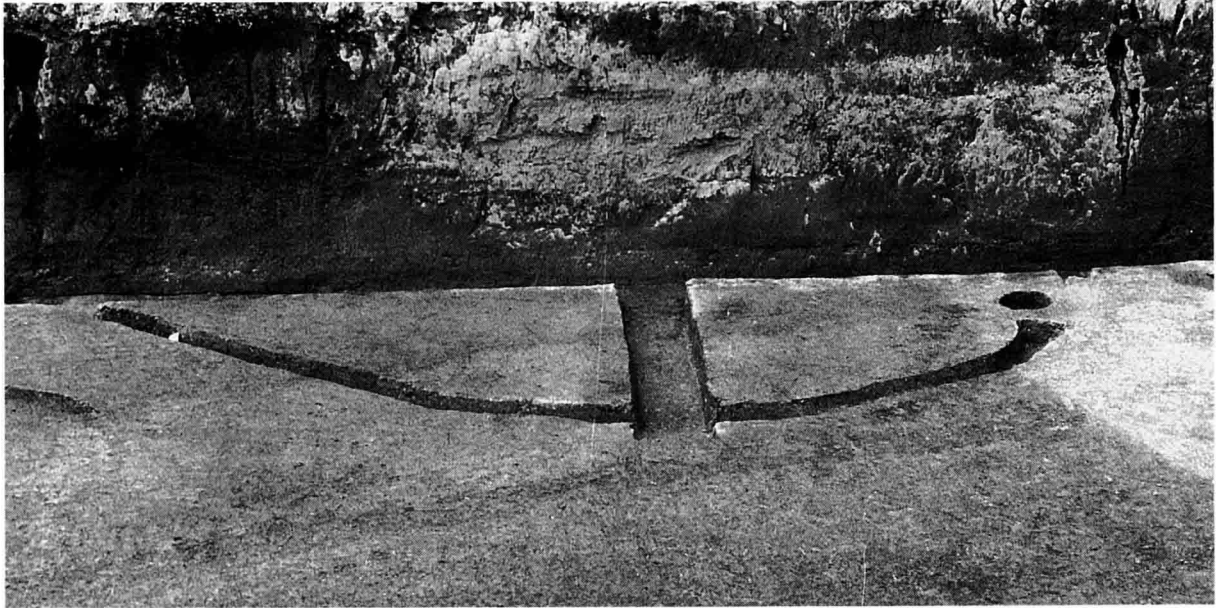


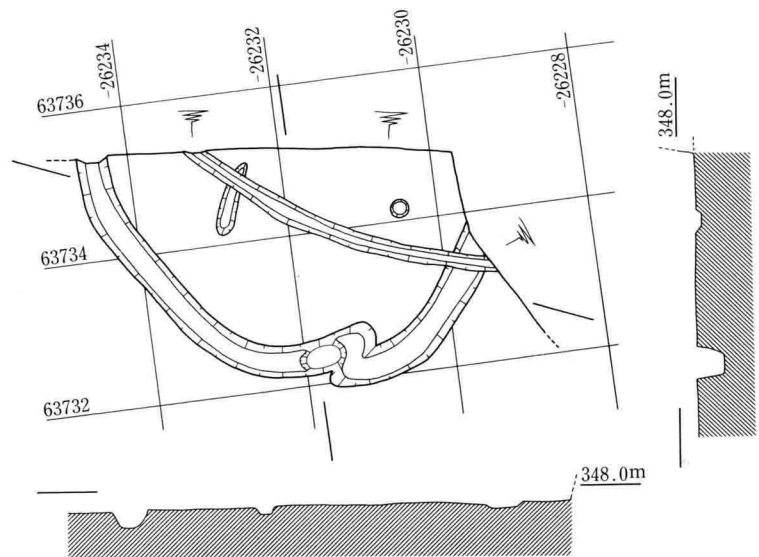
写真155 SC10



写真156 E区3次面全景（北から）

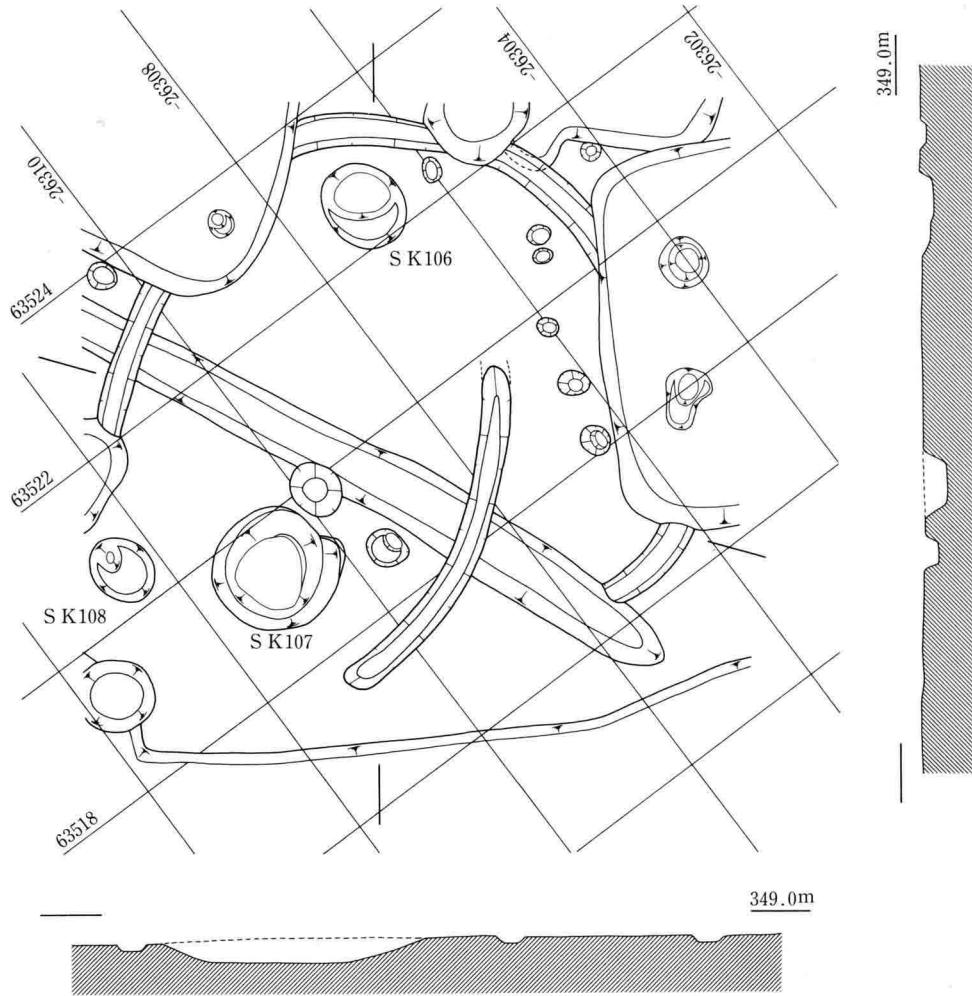
### SC11 (E区)

E調査区で検出され半分を調査区外になるが、6 m程の円形を呈するものと想定する。溝により区画された範囲内には柱穴と思われるピット1個と短い溝状遺構が1本検出されている。また南側には環状溝跡の断絶部が交差するような形で接触し、その部分には柱穴が1個検出されている。遺物の出土も僅かで細かな時期を特定するには至らないが、弥生中期後半に位置付くものと思われる。



第152図 SC11実測図 (S = 1 : 100)





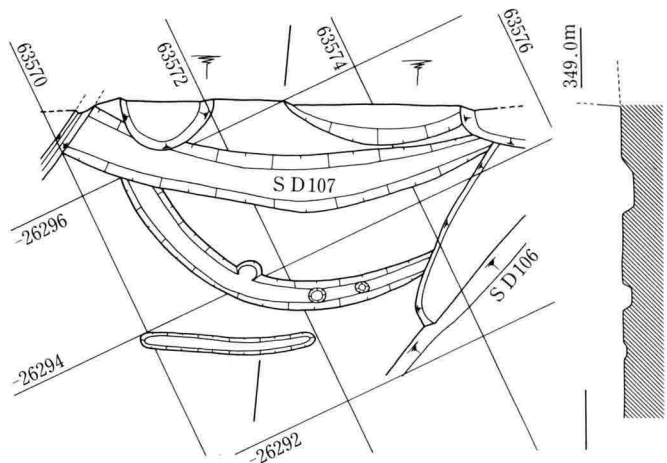
第153図 SC12実測図 (S = 1 : 100)

### SC12 (B区)

B調査区の南隅で検出され、SA101・103などと重複関係にある。東から南にかけては溝が検出されていないが、円形を想定する。溝で区画された範囲内には8個の柱穴が検出されている。そのうち6個は整っていないものの溝に沿うような形で巡り、他2個は中央付近にある。弥生中期後半に位置付くものであるが遺物の出土は僅かである。

### SC13 (B区)

B調査区の中央付近壁際に検出され、SA133・SD107と重複関係にある。半分程が調査区外であり、判然としないが円形を想定する。溝で囲まれた範囲内には他遺構による破壊をほとんどに受けているため、柱穴や焼土などこの遺構に伴うものと思われる施設は確認されていないが、溝のなかに柱穴と思しき堀り込みが検出されている。遺物の出土は少量であるが、弥生中期後半に位置付くものである。

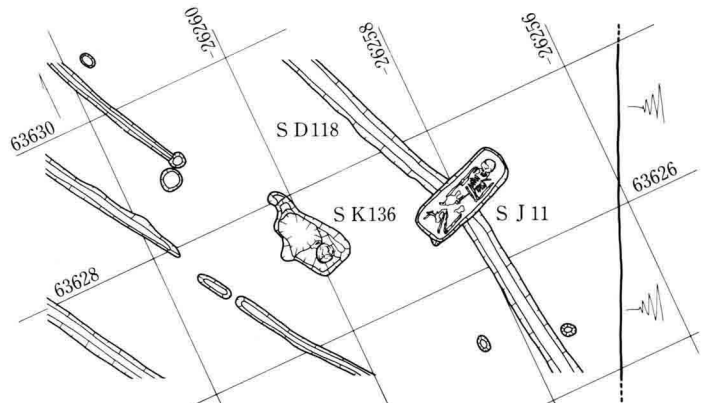


第154図 SC13実測図 (S = 1 : 100)

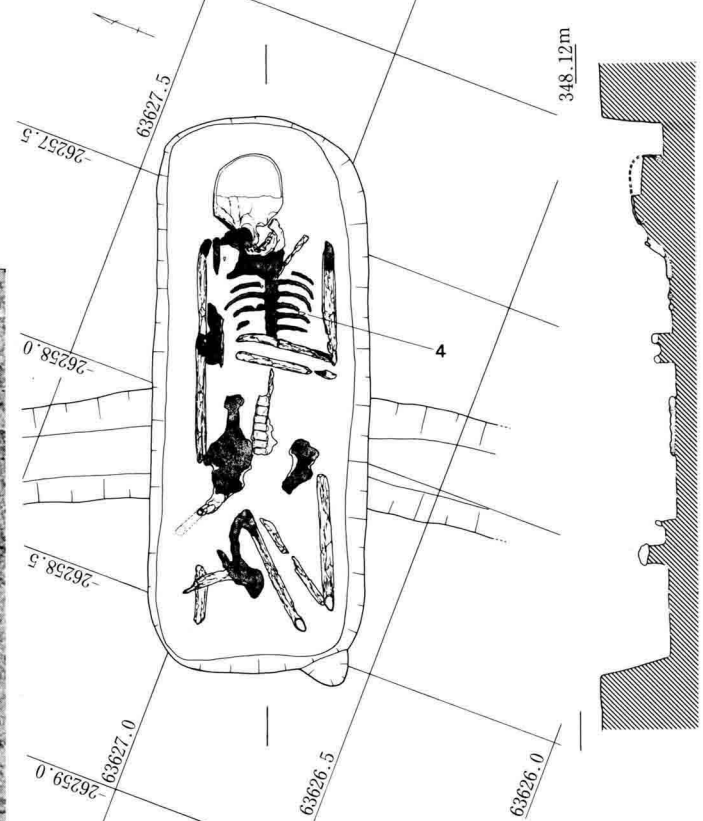
(4) 土 壙 墓

S J 11 (D区3次面)

土壙墓を11基検出したが、弥生時代に属するものはS J 11のみである。D区のS D 118を切っており、溝より新しいといえるが、溝からの出土遺物はない。したがって検出面から弥生時代中期後半と推定する他に時期的な根拠はない。東には土器を埋納したS K 136がある。一番近くの竪穴住居はC区S A 139かD区S A 140であるが、いずれにしても約30m離れている。D区S B 1が約8mの距離にあるが、検出面が東に向かって若干落ち込み気味になっていることから、集落の縁辺部に位置していると言えよう。



第155図 S J 11周辺遺構分布図 (S = 1 : 100)



第156図 S J 11人骨検出状況実測図 (S = 1 : 20)



写真157 S J 11全景



写真158 S J 11近景

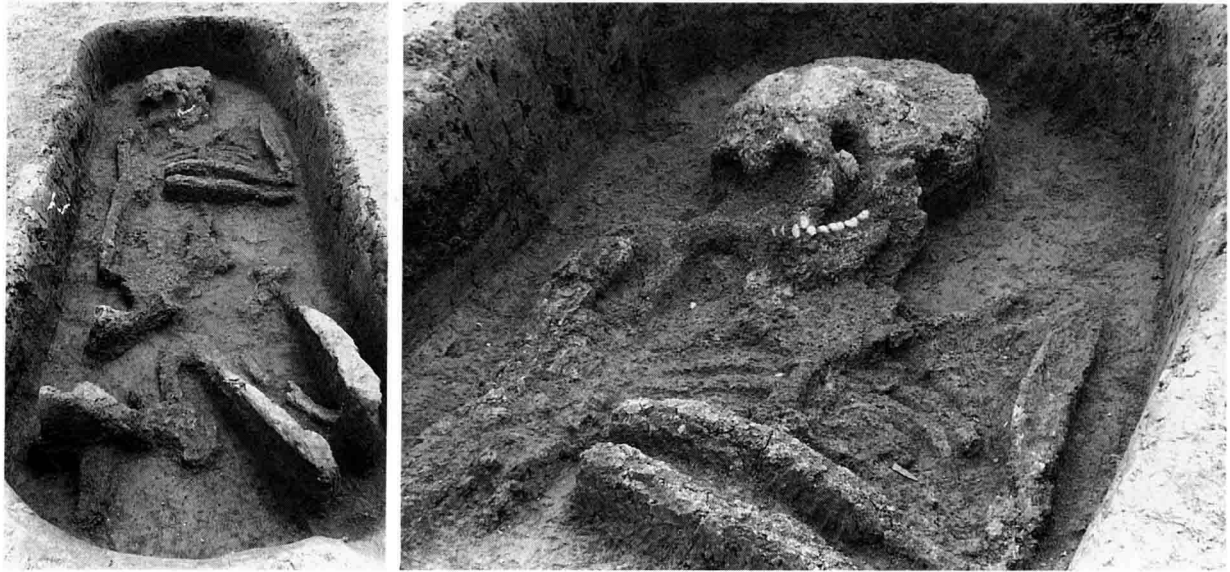


写真159・160 S J 11近景

墓壙の規模は全長143cm、幅55cm、検出面からの墓壙床面(人骨検出レベル)の深さ19cmを測る。埋葬人骨の頭位はN70° Eで、左腕を腹部に曲げた仰臥屈葬である。骨はスポンジの如く脆弱で、歯以外の部位の遺存状態はきわめて不良である。肋骨部分は特に脆弱で、その痕跡を残すにすぎない。この肋骨の左胸部分、いわゆる心臓の位置でかろうじて残存する肋骨に接して打製石鏃の先端部 [237頁、第281図・4] が出土した。肋骨に嵌入してはいなかったが、検出状況から人骨との同時性は否定されないであろう。ただこの石鏃が埋葬人骨の体内にあったものか、埋葬時に意図的に埋葬人体の上に置かれたものかは検出状況からは即断できない。埋葬時の混入ではないことだけは明言できよう。この他右肩部、鎖骨辺りに小石粒が出土した。石英系の小粒で、約5mm大である。人骨からは若干浮いていたため、埋葬人骨と関連のあるものかは疑わしい。

後節の西沢氏の鑑定によると、遺存状態不良で詳細を観察することができない状況ながらも、埋葬人骨からは、壮年男性の様相を看取できるという。



写真161 S J 11遺物写真

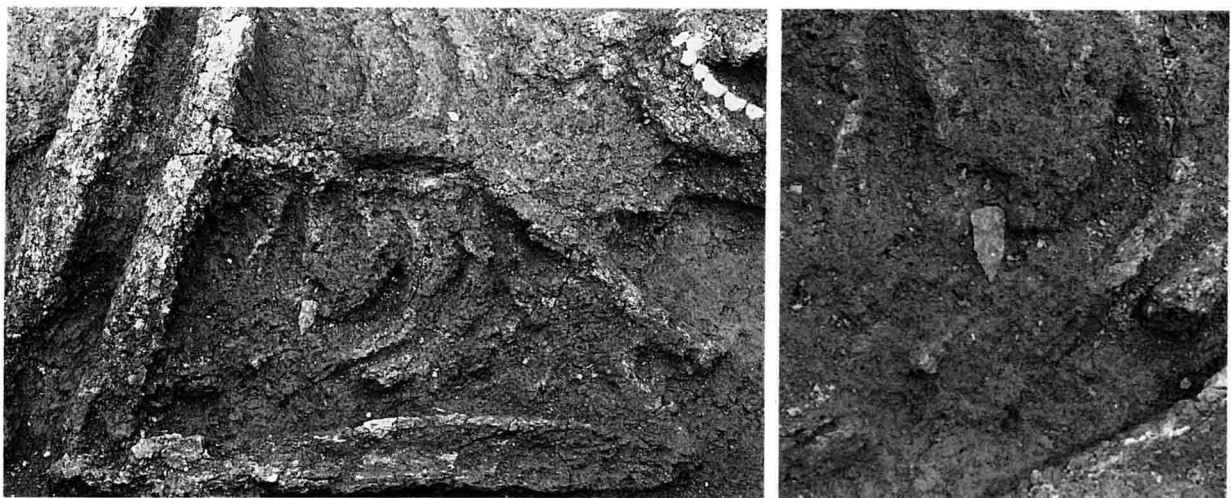


写真162・163 S J 11石鏃出土状況

## (5) 土 坑

今回検出された土坑は約200基を数えるが、他遺構による破壊もしくはその覆土中の重複関係となったため確認されなかった土坑もあることから、実数はこれを上回るであろう。土坑の多くは円形もしくは楕円形といった平面形態を呈するが、不整形なものも検出されている。他遺構(住居跡等)に付属する施設となる可能性もあるものの、明確な根拠もないためその多くは単独で存在する遺構として考えるのが妥当のように思われる。特に土壙墓(SJ11)の近くに検出されたSK136[第167図]は、土器を埋納しているかのようにも観察され、その性格について多角的な検討が必要となる点注意されよう。

すべての土坑を掲載するには至らなかったが、遺構出土遺物の内容も含めて概観してみたい。

**SK104**…径約1mを測る円形土坑である。出土遺物には甕(1)がある。口縁端部には縄文が、頸部には簾状文が施される。胴部は羽状文が施されたのち、縦方向に波状文が施される。胴部から底部に至る形態からやや大型の台付甕となる可能性もあろう。

**SK105**…楕円形を呈する土坑で、長辺1.50m程を測る。出土遺物には甕(2)がある。

**SK107**…ほぼ円形に近い。直径1.60mを測り、検出面からの深さは40cm前後を測るものの、東側にはテラス状の段をもつ。断面図[第158図]には分層を示したが、かなり複雑な埋没状況がうかがえる。焼土・炭化物といった層も確認され、人為的埋没が考えられよう。出土遺物には甕(3)と鉢(4)のほか、覆土中から石包丁(第294図-156)が1点出土している。

**SK109**…やや不整形な楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅いが、甑と思われる土器(5)が出土している。

**SK114**…掘り込みがやや不鮮明ではあるものの、ひょうたん形を呈する土坑である。出土遺物には甕(6)がある。口縁端部は縄文を施したのちユビオサエによる波状口縁となる。頸部には波状文、胴部には羽状文を施す比較的小型の甕である。

**SK115**…長辺1.80m程を測る楕円形土坑である。掘り込みは舟底型を呈し西南隅には小穴が付属する。土坑自体比較的小さなものであったが、土器が多量に出土している。出土土器には壺(7~10)、甕(11・12)、甑(13・14)、高杯(15)がある。10の胴部には直線文と波状文が施文されており、それに沿うような形で沈線文が1本ずつ施文されているものの、全周はしない。

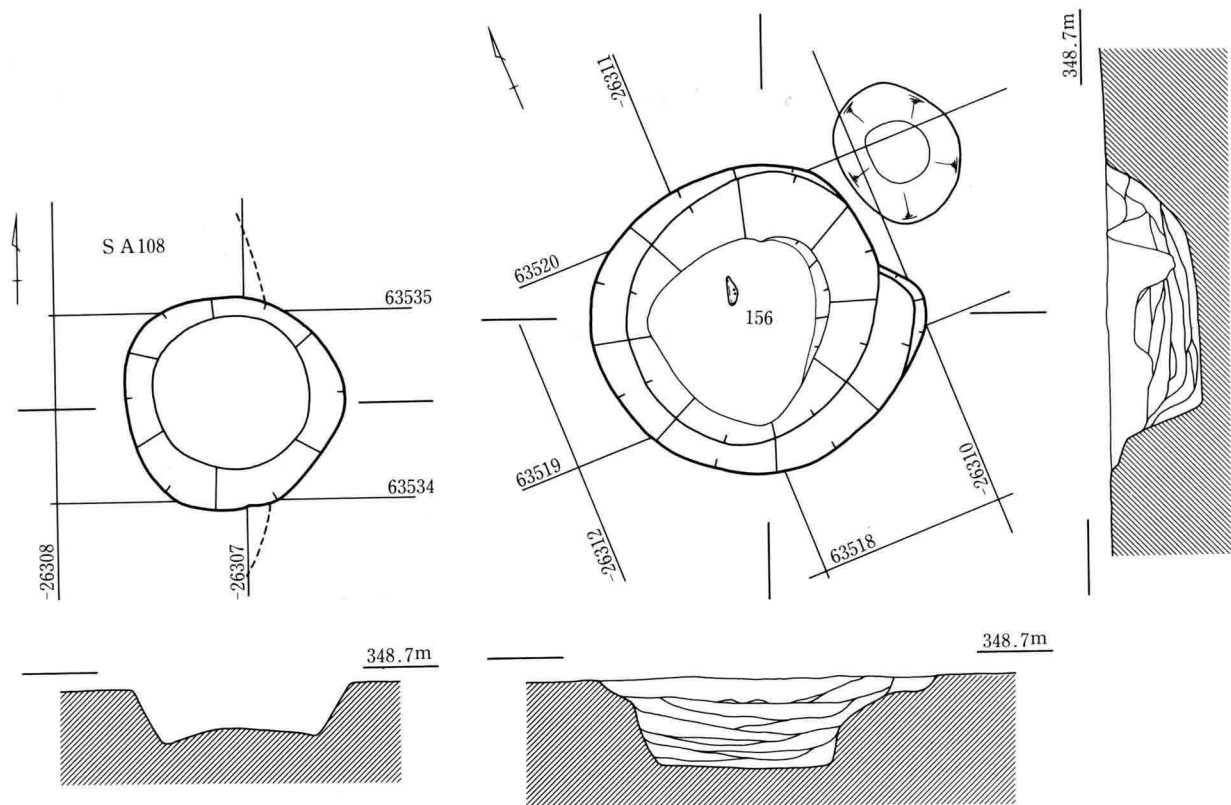
**SK122**…検出状況が不明瞭なため溝状遺構となる可能性もある。出土遺物には甕(16)がある。体部には文様をもたず、ハケ調整したのちミガギを施した小型甕である。

**SK131**…大半に破壊を受け形態は不明瞭であるが、楕円形を呈するものと想定される。掘り込みが浅いものの、底面から完形に近い壺(17)が出土している。頸部から胴下半部まで沈線文を中心とする横帯文で構成され、頸部と胴部には沈線間に櫛描直線文や単線文が施されている。

**SK132**…SK131のすぐ東側に検出された1m前後の円形土坑である。掘り込みは浅いものの、テラス状の段がある。覆土には炭化物・焼土が充満していた。図化し得る土器の出土はない。

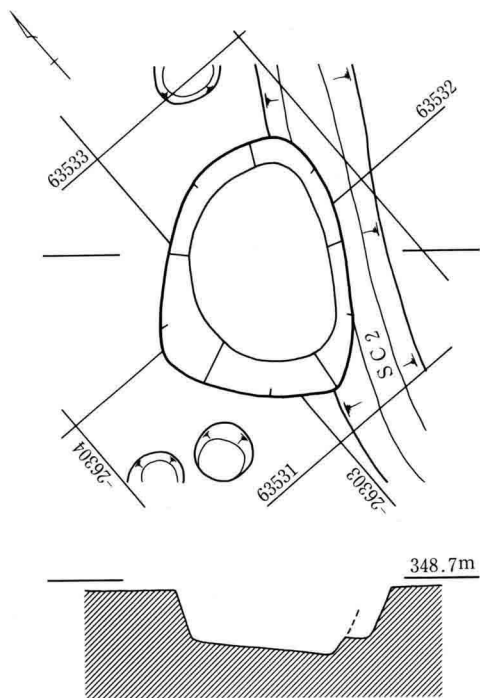
**SK133**…長辺2.00mの楕円形土坑である。出土土器には壺(18~20)がある。18は外面が赤彩された口縁の外反しない器形の壺となる。

**SK136**…土壙墓(SJ11)の近くに検出された土坑である。平面形態は不整長方形を呈し、底部の深さは一定ではない。出土遺物には壺(21・22)がある。21は口縁部の外反しない器形となる。22は胴部より上と底部を欠く壺である。この2個体の土器は意識的に埋納された可能性も考えられるものの、遺構の覆土および、土器の内部からは特殊遺構と断定する遺物は確認されていない。

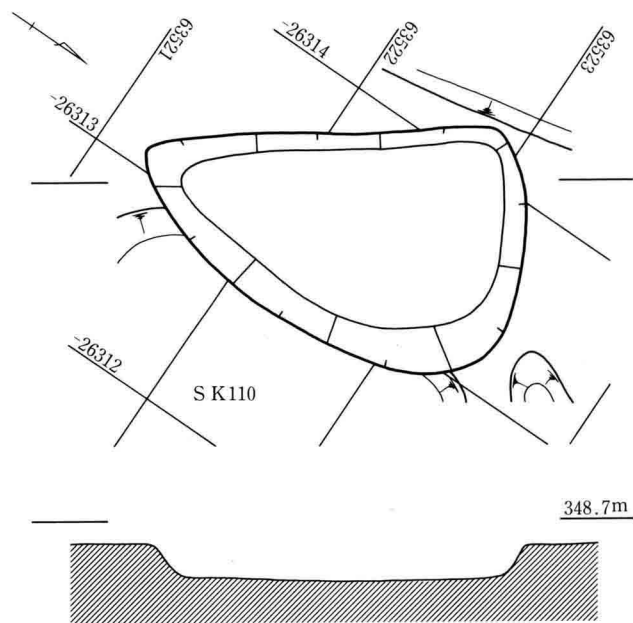


第157図 SK104 (S = 1 : 40)

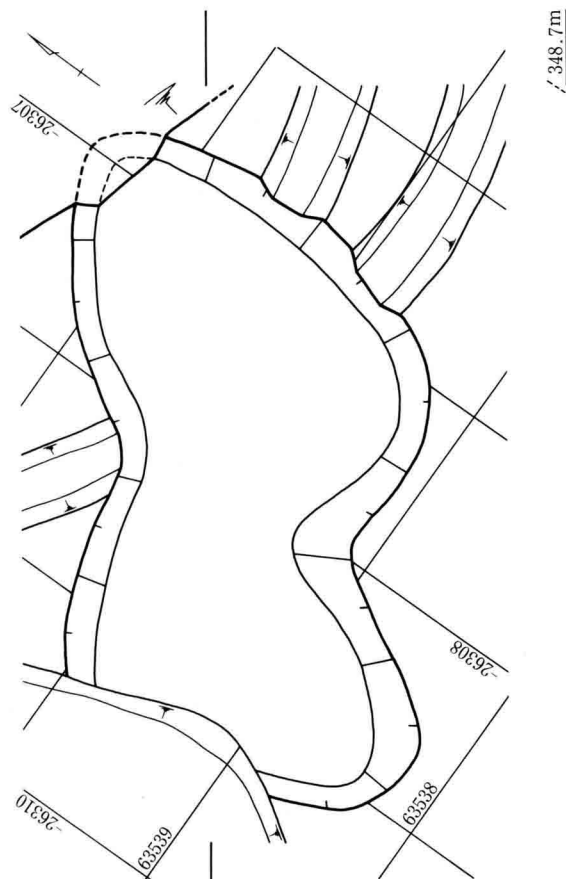
第158図 SK107 (S = 1 : 40)



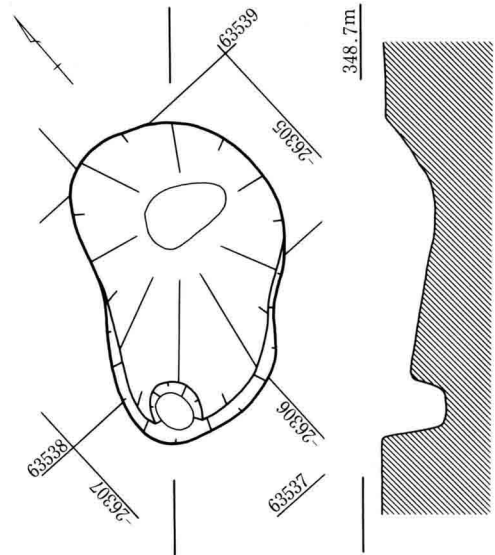
第159図 SK105 (S = 1 : 40)



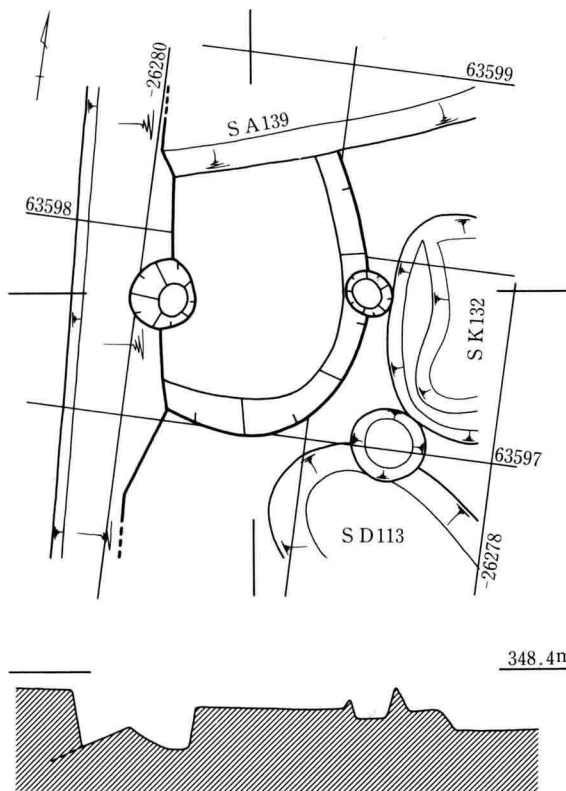
第160図 SK109 (S = 1 : 40)



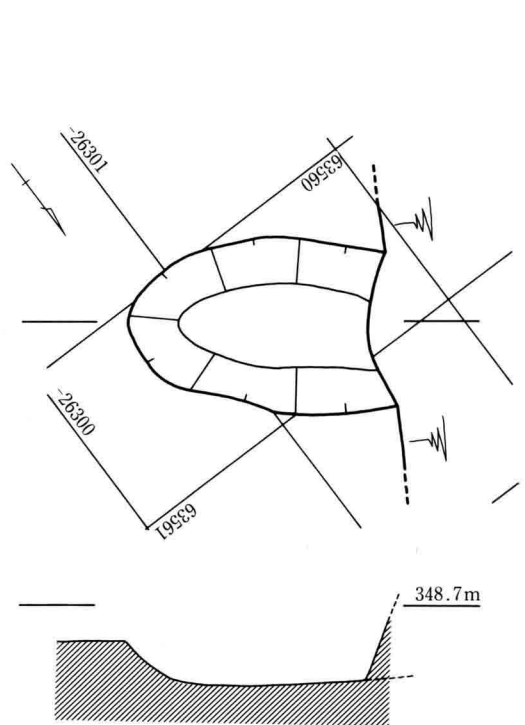
第161图 SK114 (S = 1 : 40)



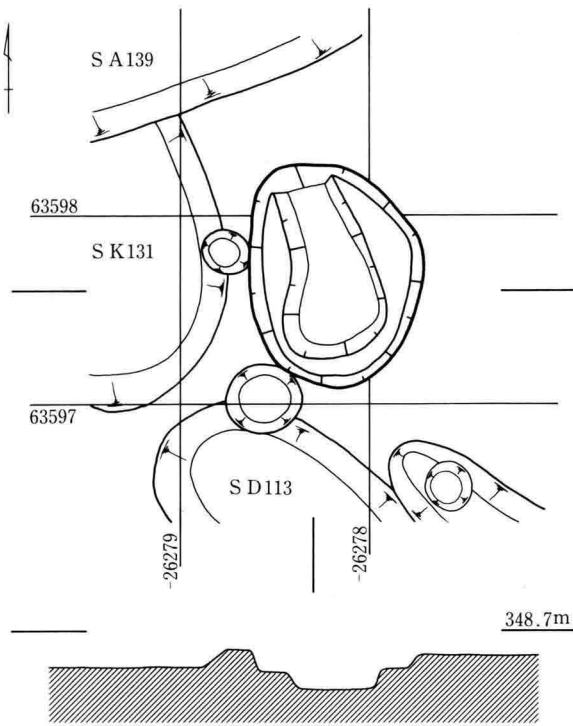
第162图 SK115 (S = 1 : 40)



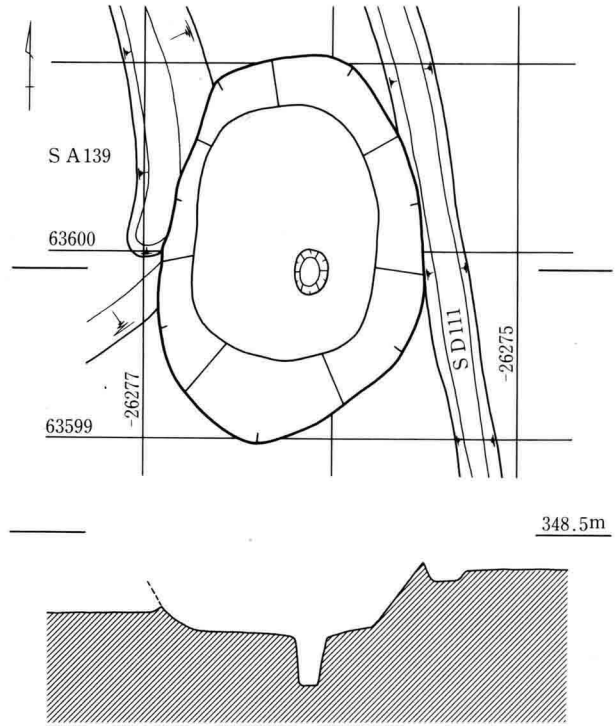
第163图 SK131 (S = 1 : 40)



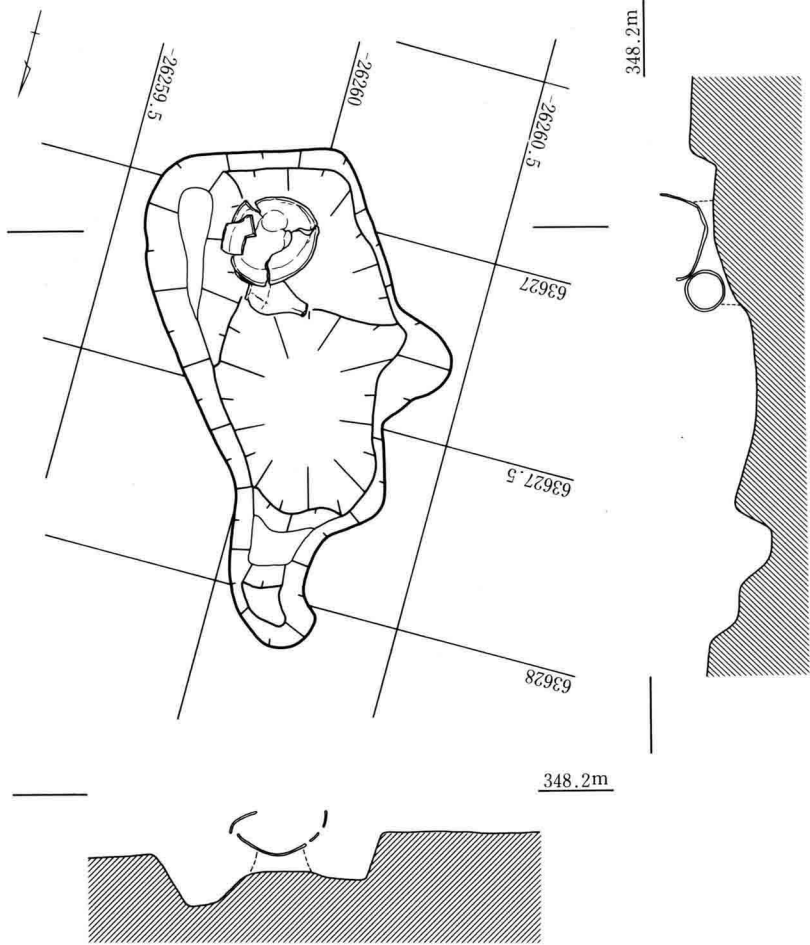
第164图 SK122 (S = 1 : 40)



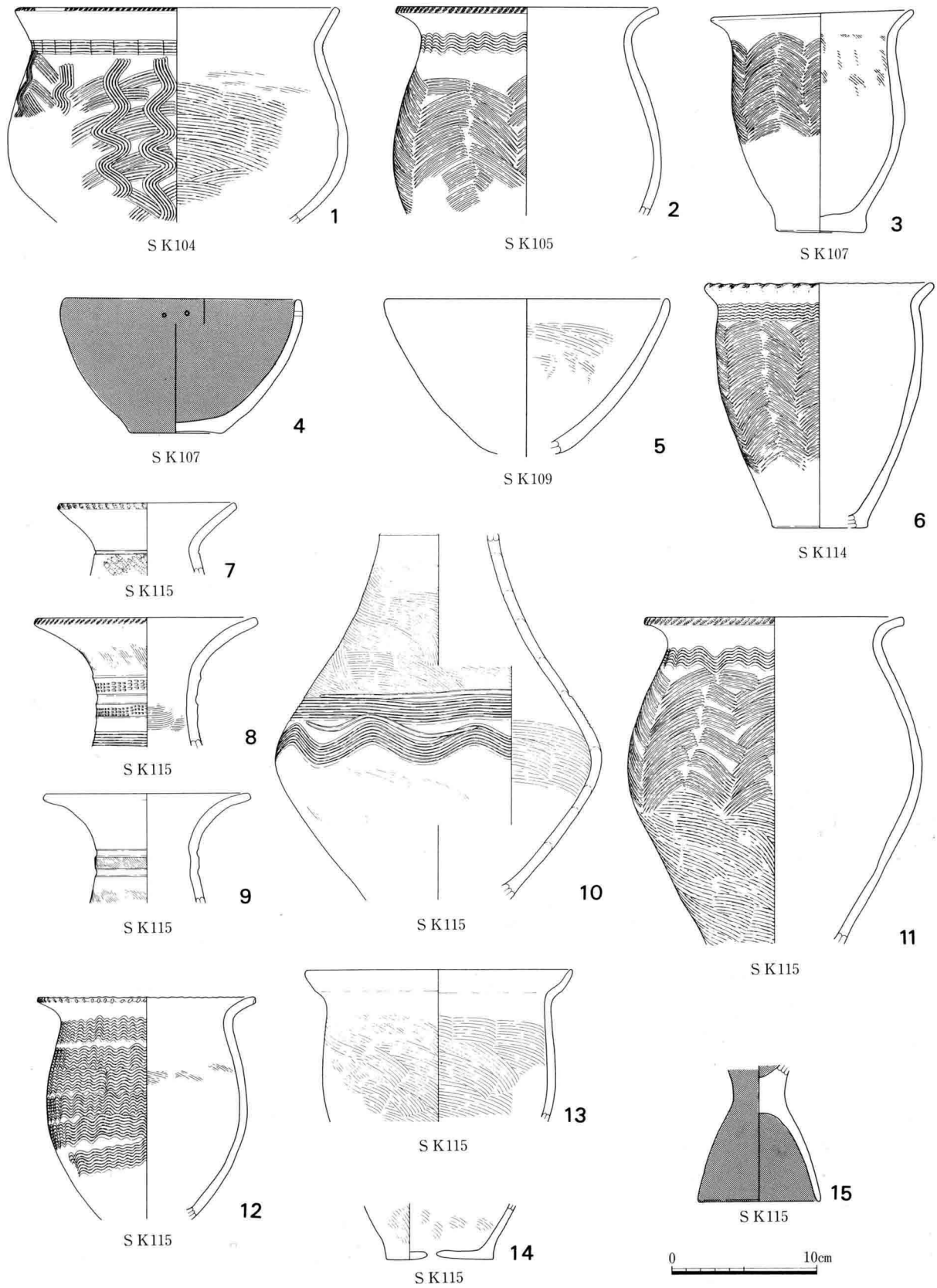
第165図 SK132 (S = 1 : 40)



第166図 SK133 (S = 1 : 40)

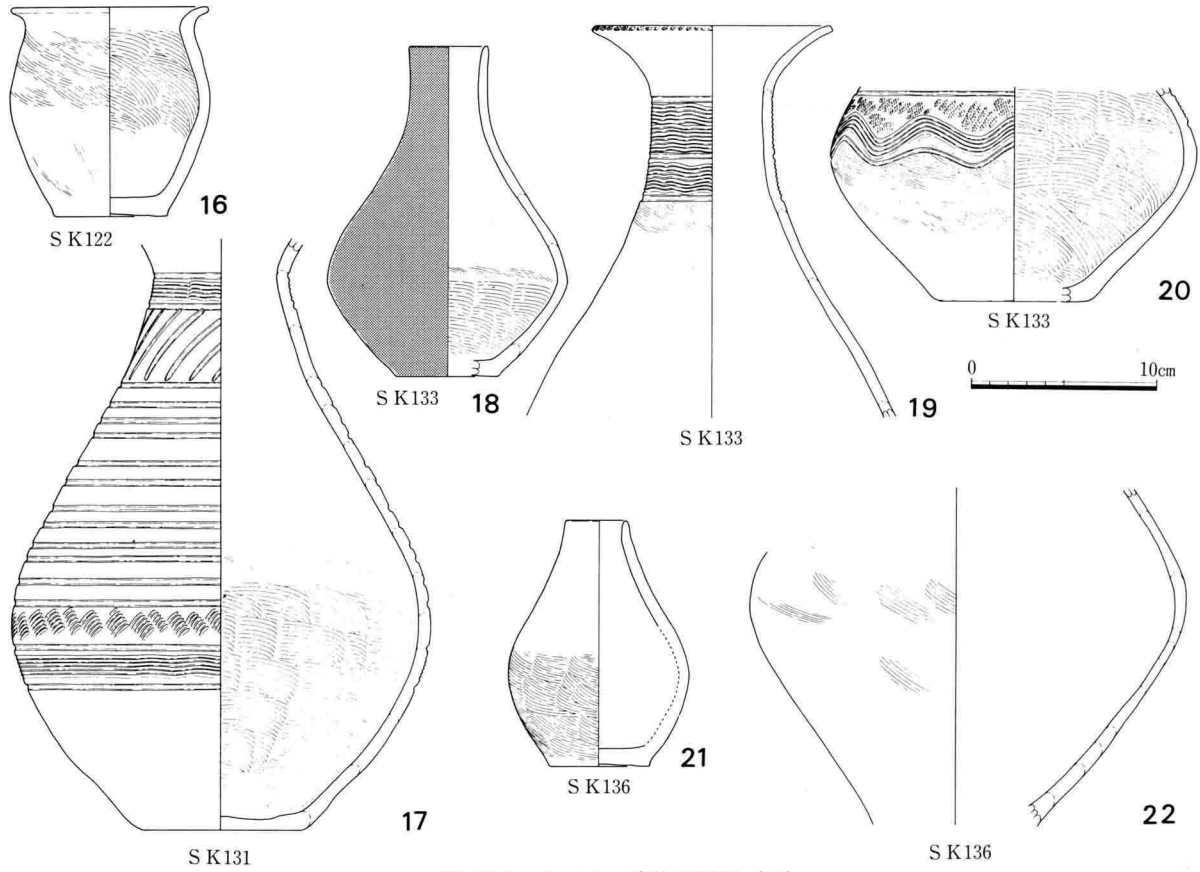


第167図 SK136 (S = 1 : 20)



第168图 土坑出土遗物实测图(1)





第169图 土坑出土遺物実測図(2)



写真164 SK107



写真165 SK107石庖丁出土状況



写真166 SK136



写真167 SK136遺物出土状況

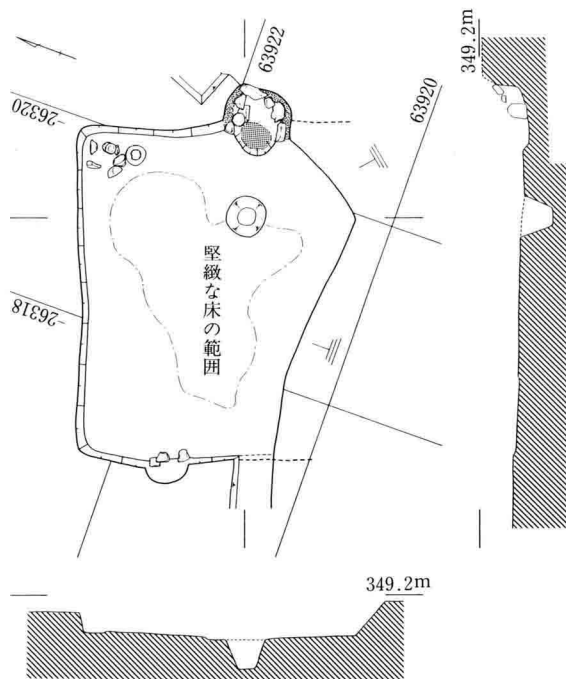
## 第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡 (S A 1 ~ 36)

#### S A 1 (D区1次面)

D区の南側で住居跡の半分を検出した。カマドは東に設置され、調査区の東側壁内にある。東西主軸3.60m、主軸方位はN71° E、検出面からの床面の深さは22cmを測る正方形と思われる住居である。中央部には堅緻な床が残っている。

カマドは遺存状態良好で、支脚石・石材・土器が残存している。支脚石は中央より北側に寄っているため、構築材の可能性もある。カマド内には完形の土師器杯(4)や甕(11・12)の破片があたかも使用状況を示すような状態で出土した。燃焼部床面は非常に硬化しており、かなり受熱した状況を示している。煙道部は調査区外となるため確認できなかった。



第170図 SA 1 実測図



写真168 SA 1

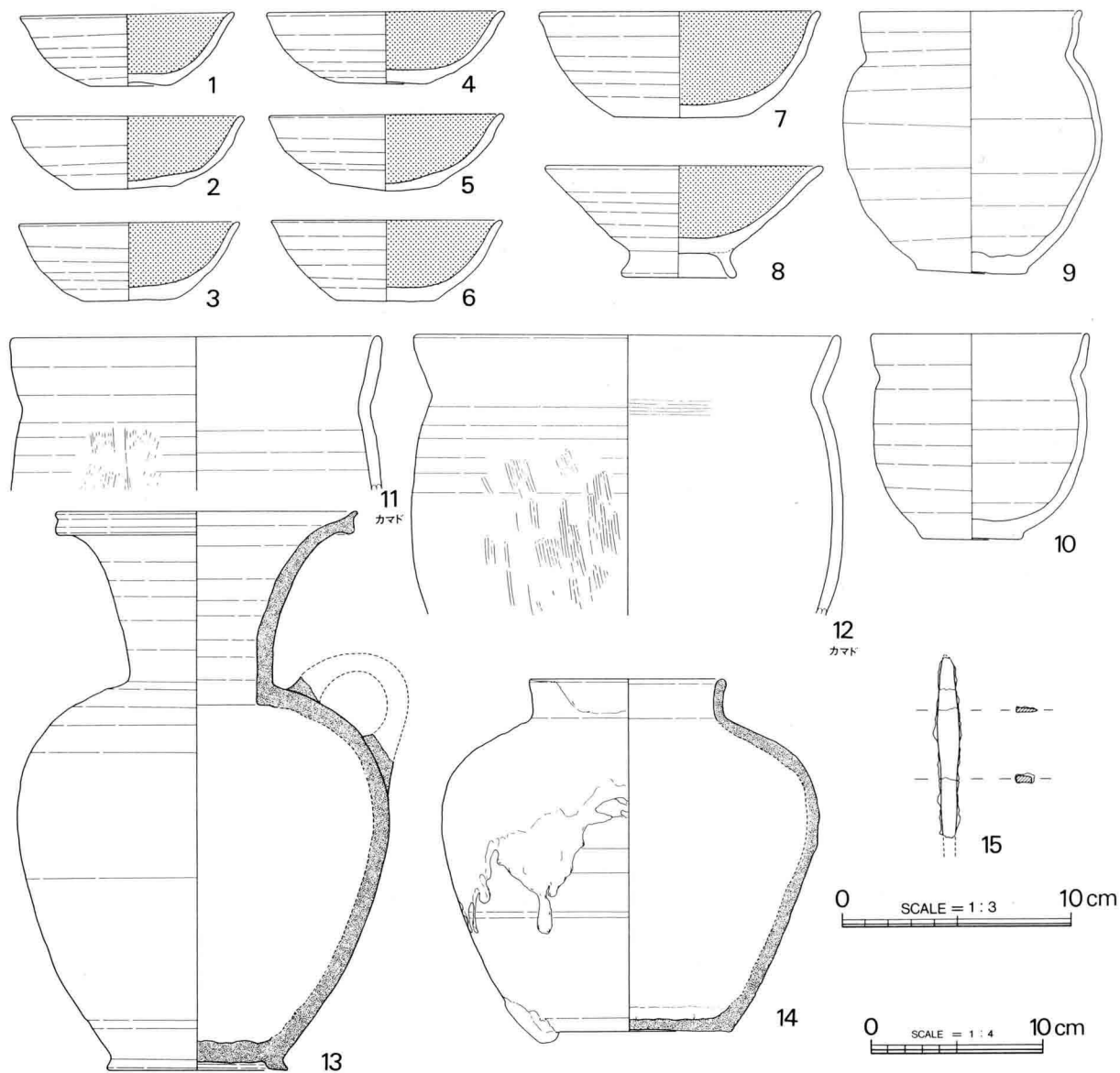
住居内の東北隅に土器集中箇所があった。土器はほとんど完形で、須恵器短頸壺(14)、内黒土師器杯(1・2・7)、高台付杯(8)がある。短頸壺は自然釉が多量に降着し、底部には焼き台が付着している。短頸壺が正置の状態出土していることから、住居内での使用状況の一例を示していると考えられる。この他カマド左側、調査区壁内に須恵器把手付壺(13)が、堅緻な床面から鉄製刀子(15)が出土している。これらの遺物は9世紀後半から10世紀代の様相を示すと考えられる。



写真169 SA 1 土器出土状況



写真170 SA 1 カマド近景



第171図 SA 1 遺物実測図 (15のみ S = 1 : 3)

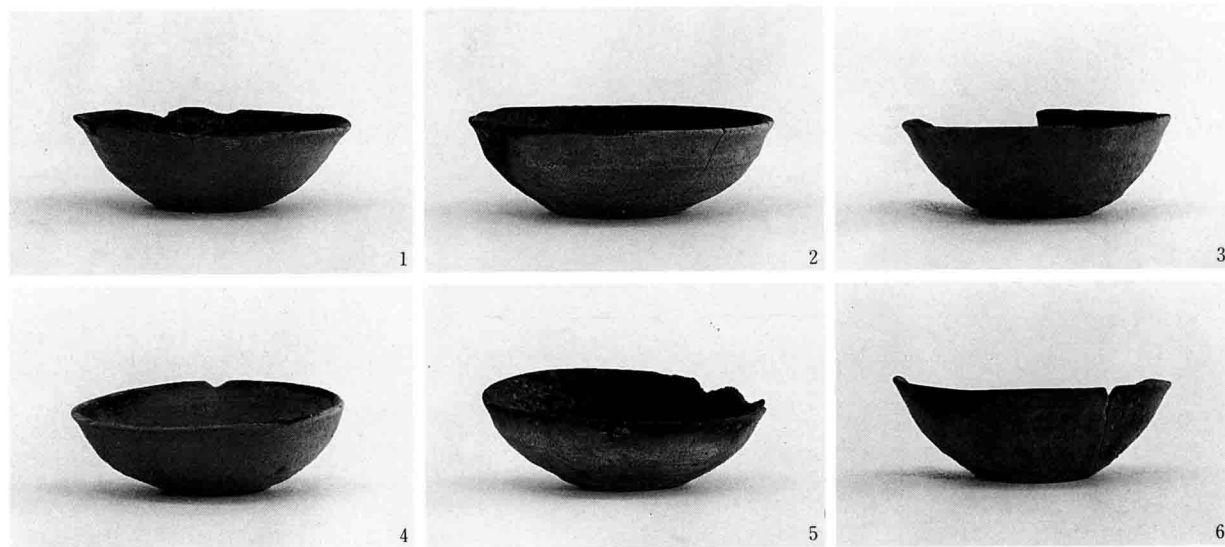


写真171 SA 1 遺物写真 (1)

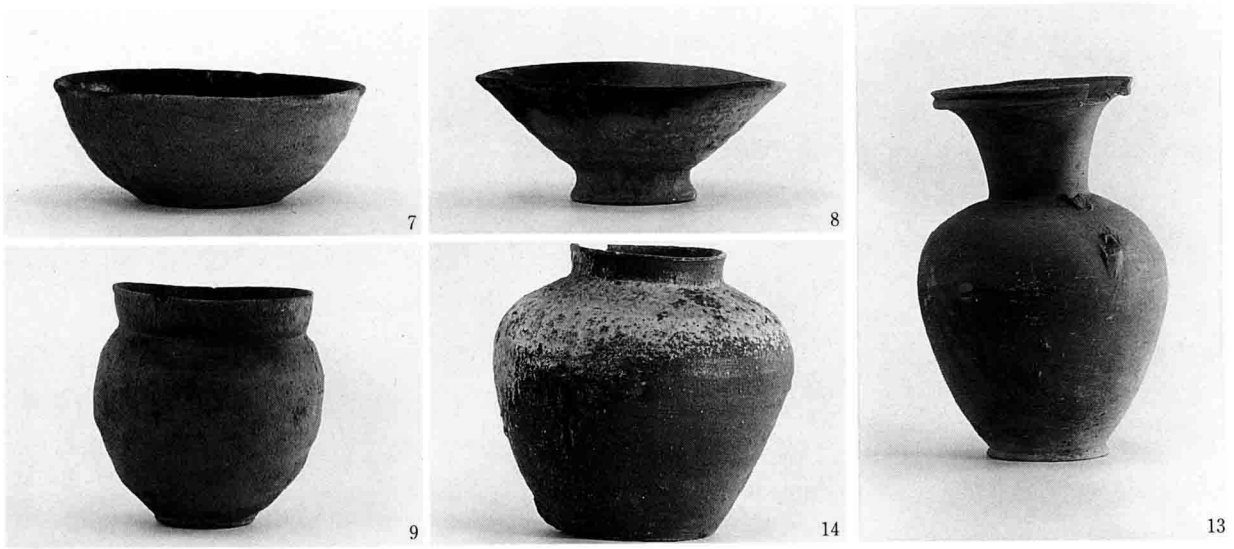
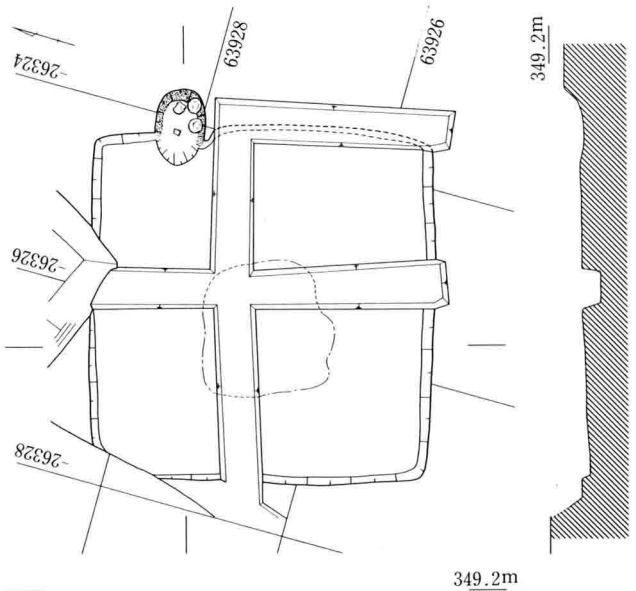


写真172 SA 1 遺物写真 (2)

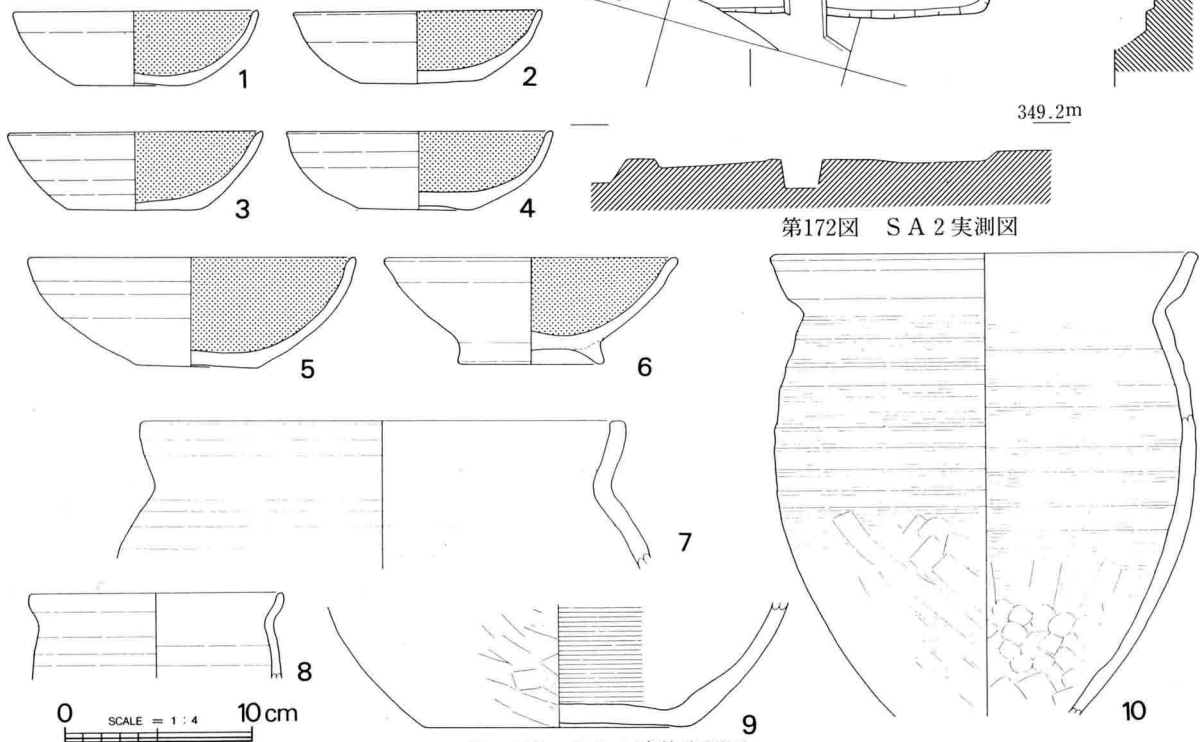
SA 2 (D区1次面)

一辺約3.60mの正方形の平面形態を呈する住居で、検出面からの床面の深さは12cmと浅い。カマドは東壁の中心より若干北寄りに設置され、主軸方位はN 75° E を測る。中央には堅緻な床面が比較的小範囲に残存している。

カマドは壁面より外側に掘り込まれ、受熱による酸化が見られる。カマド床面は住居床より約5cmほど掘り込まれていたが、硬化面はなかった。



第172図 SA 2 実測図



第173図 SA 2 遺物実測図

出土した土器は土師器のみであり、そのほとんどがカマド周辺より出土した。杯類はすべて内黒処理されている。SA1と同じく9世紀後半から10世紀代の遺物と考えられる。

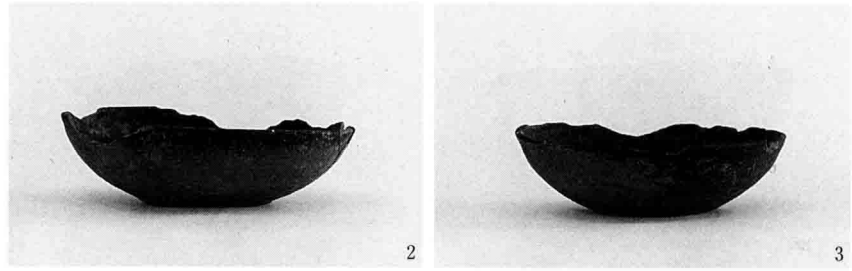
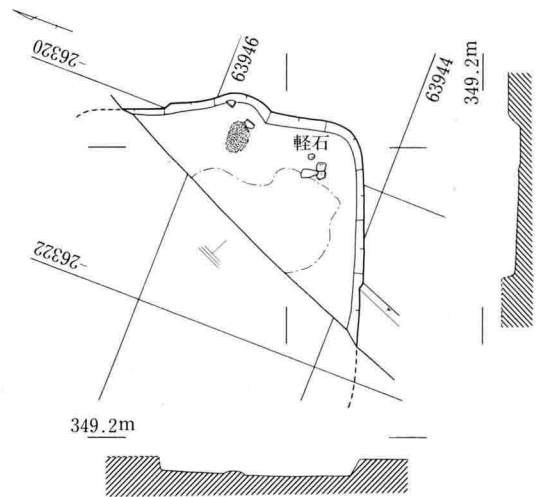


写真173 SA2 遺物写真

### SA3 (D区1次面)

調査区西側壁に半分を切られているため規模は明らかではないが、東側のカマド部を含め三角形に残留し、住居中央に堅緻な床面が認められる。主軸方位はN69°Eを測るが、カマドの残存状況は、カマド床面の痕跡と思われる酸化面が若干残っているにすぎない。

出土遺物はカマドから杯(1・2)と甕(6)が、その他はカマドの左側床面直上から、土師器のみが出土している。



第174図 SA3 実測図

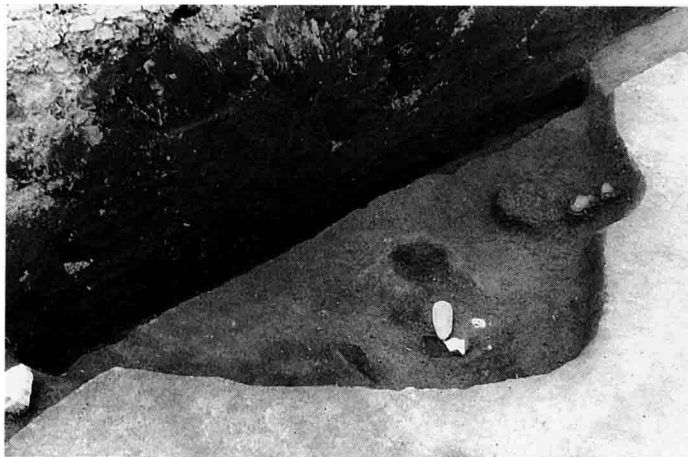
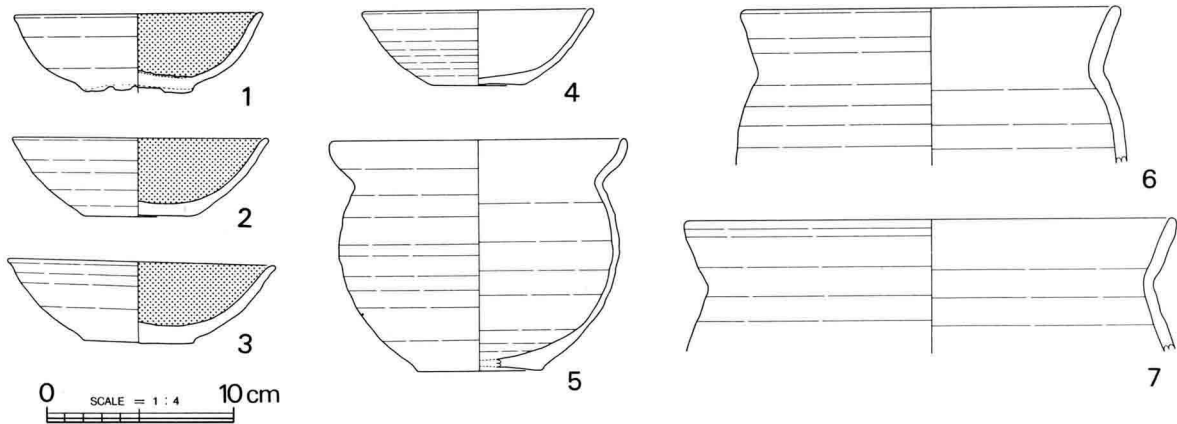


写真174 SA3



写真175 SA3 カマド近景



第175図 SA3 遺物実測図

SA 4 (E区1次面)

E区北側で5軒検出したうち、SA 5に切れられ、SA 6を切っている住居跡である。主軸方位はN139° Wで、主軸3.80 m、横軸3 mを測る長方形を呈している。床面は堅緻ではないがそれとわかる程度で、検出面から床面の高さは18cmである。カマド部は酸化焼土も一部に認められるものの破壊が著しく、芯材と考えられる石材が付近に散在している。焼土の右側住居壁に接して、ひときわ大きい石材が置かれており、検出状況からカマド機能時の原位置を保っているかどうかは不明である。カマド付近からは土師器杯(1・3~6・8・9)、高台付杯(14~18)、小型甕(21)、甕(24)、甗(25)、灰釉陶器壺(20)、刀子(26)等の遺物出土量が多い。灰釉碗(19)は大原2号窯式に相当すると思われる、10世紀前半代と考えられる。



写真176 SA 4カマド近景

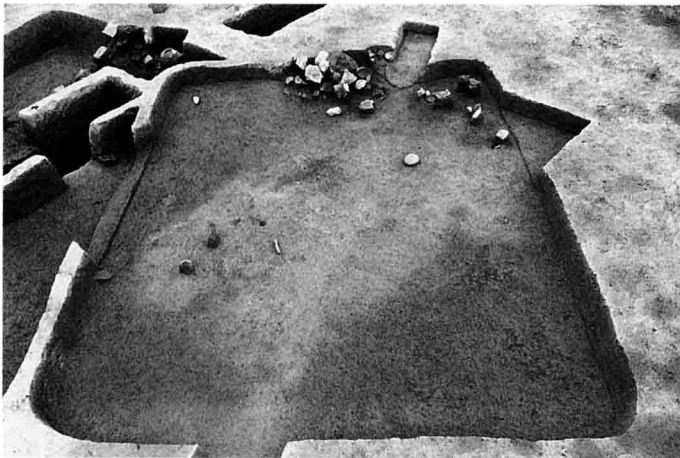
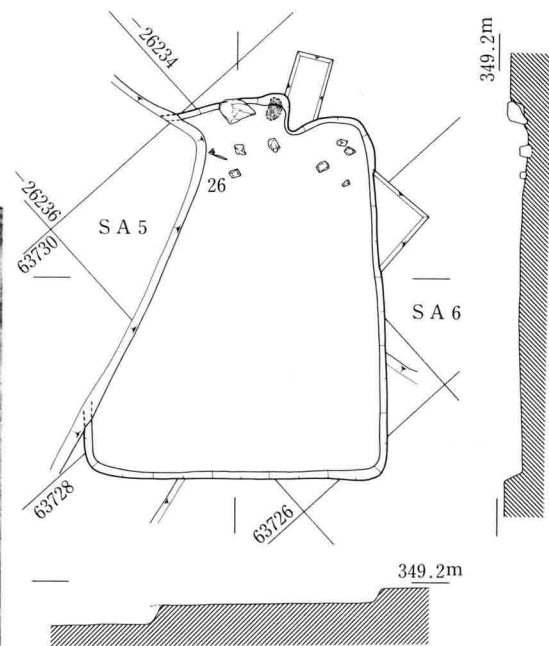
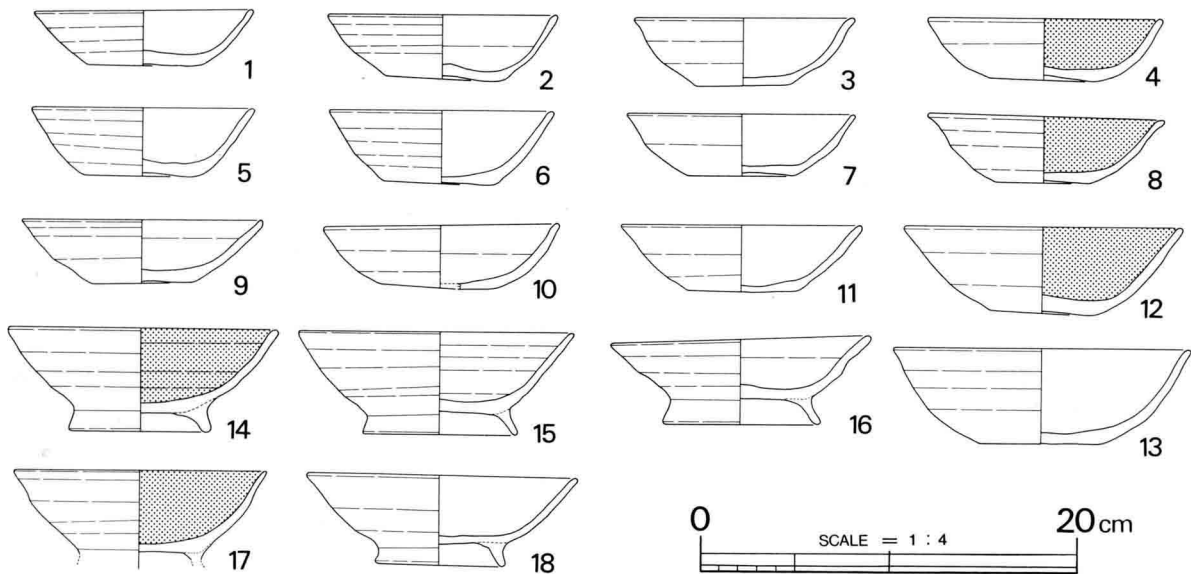


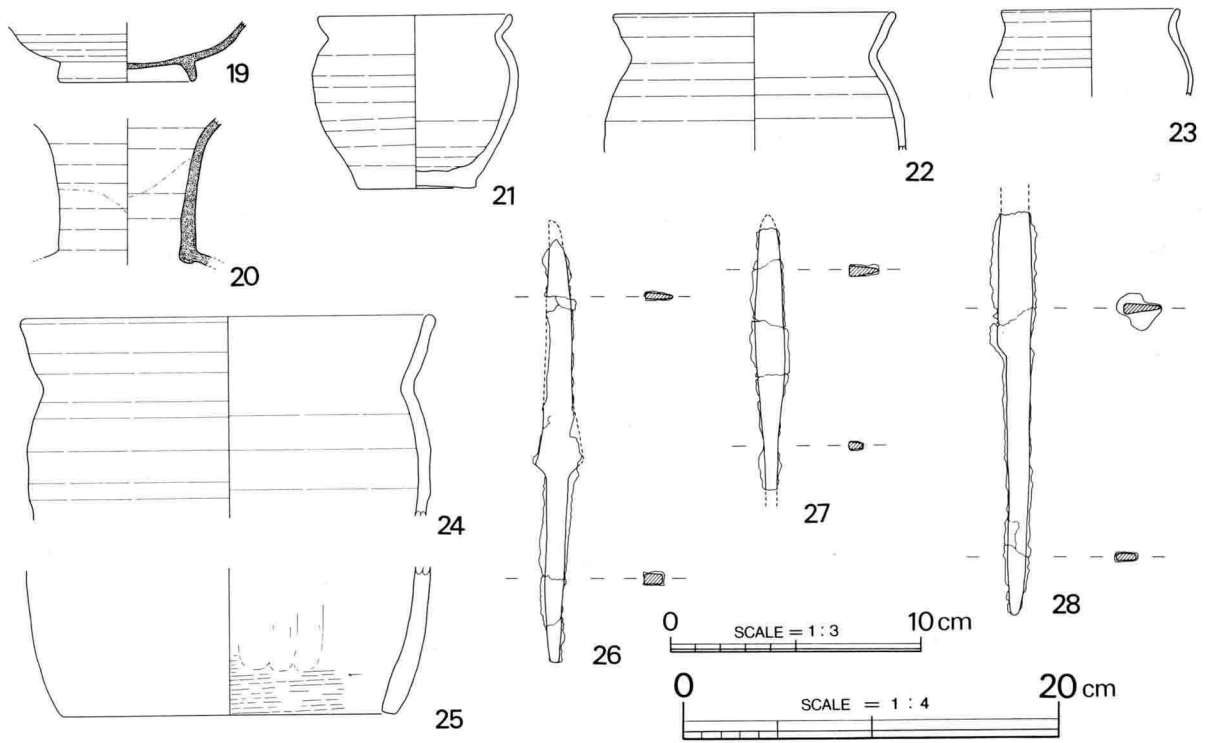
写真177 SA 4



第176図 SA 4実測図



第177図 SA 4遺物実測図(1)



第178図 SA 4 遺物実測図 (2) (26~28はS = 1 : 3)

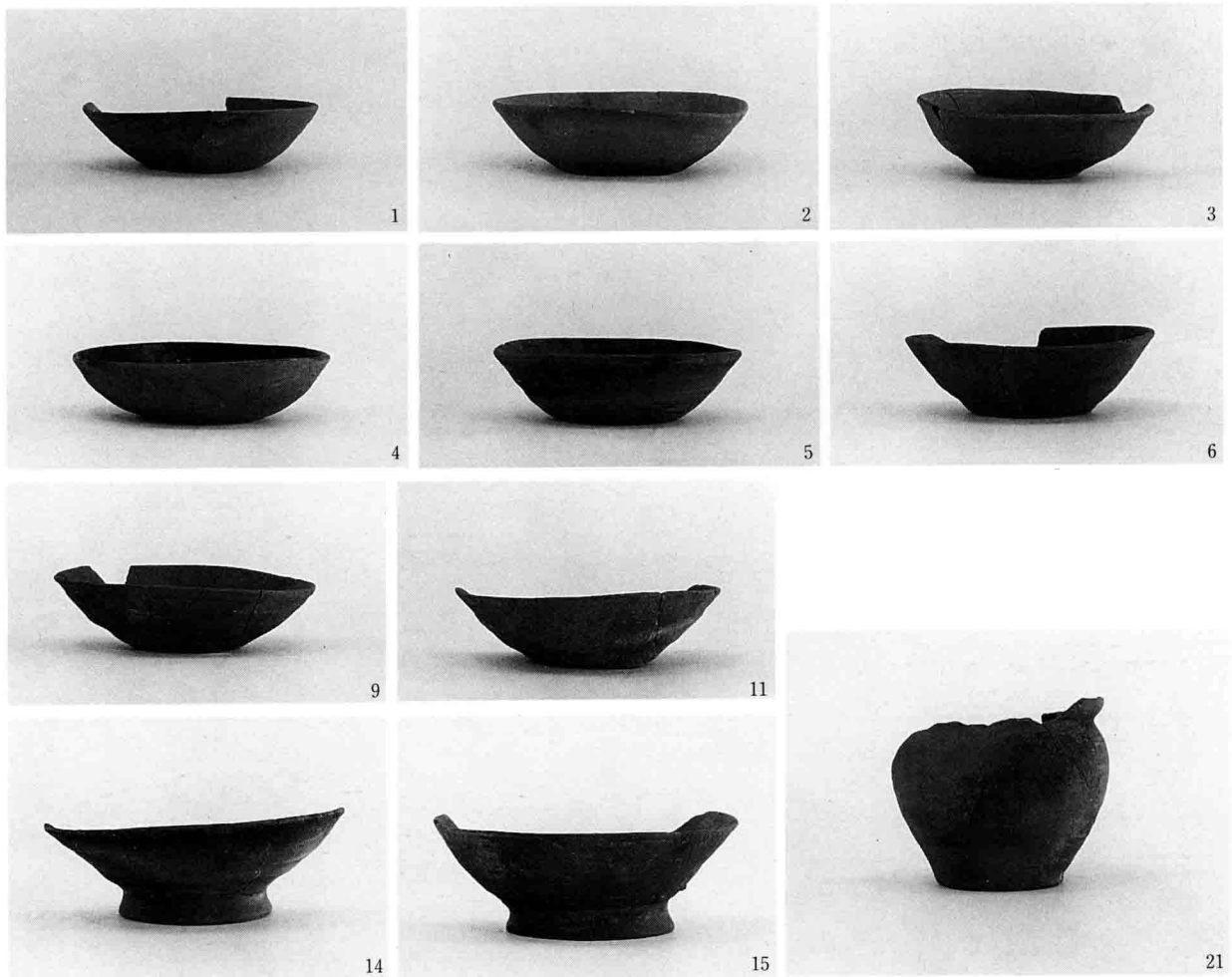


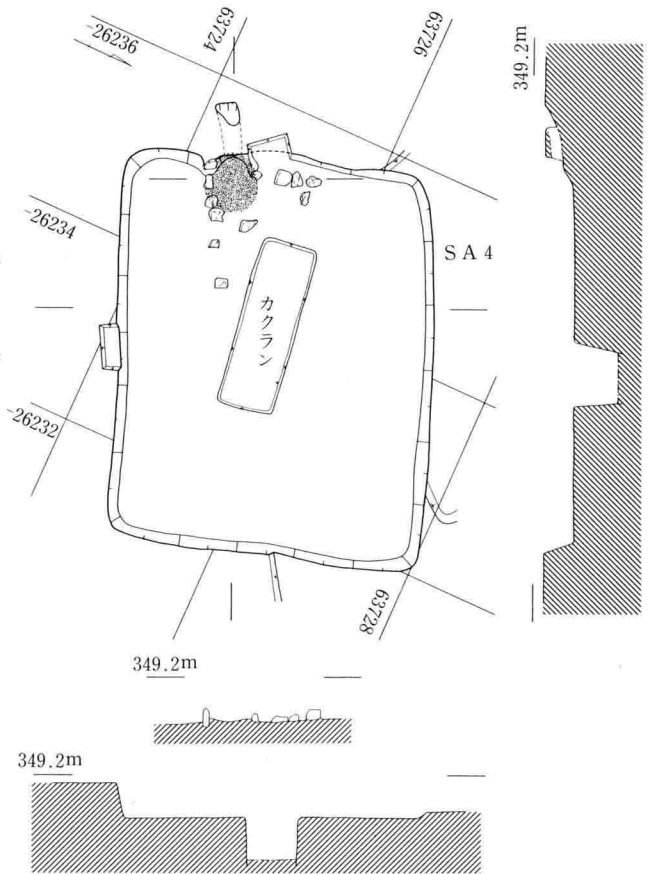
写真178 SA 4 遺物写真

SA 5 (E区1次面)

SA 4を切っている住居跡で、中央では中世以降と思われるイモ貯蔵穴攪乱に切られている。切り合い関係ではSA 7と同様新相を示している。主軸方位N113° W、主軸4.20m、横軸3.26mを測る長方形を呈している。床面は堅緻ではないものの認められ、検出面からの床面の高さは40cmである。

カマドは破壊は受けており石材が散在しているが、煙道の一部、袖部の痕跡等が明瞭に残存している。カマドの位置は西側壁の中央より若干南側に寄っている。煙道はトンネル状にカマド床面より6cmの高さから穿たれている。袖部右側には4個の石材が並んでおり、カマド機能時の原位置を保っているものと思われる。左側は石材1個で明瞭でない。床面は酸化焼土が堆積し、住居床面と同レベルである。カマド内からは土師器杯(1・2)、高台付杯(3・5)、羽釜(7)等の土器片が多数出土した。

カマドの左側から灰釉陶器碗(6)と鉄鎌(8)が出土している。灰釉碗はほぼ完形で、釉は漬掛けであるなど虎溪山1号窯式の要素を有し、10世紀後半と考えられる。鉄鎌は曲刃で、基部を一部欠損している。



第179図 SA 5実測図



写真179 SA 5



写真180 SA 5カマド近景

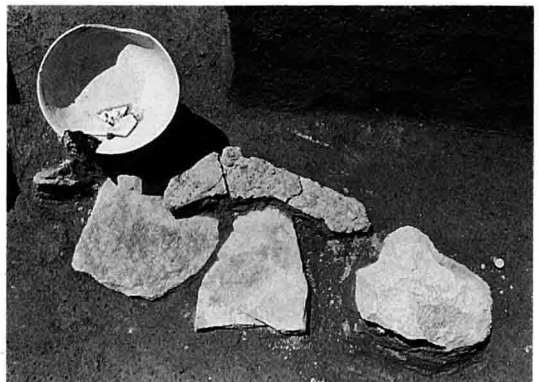
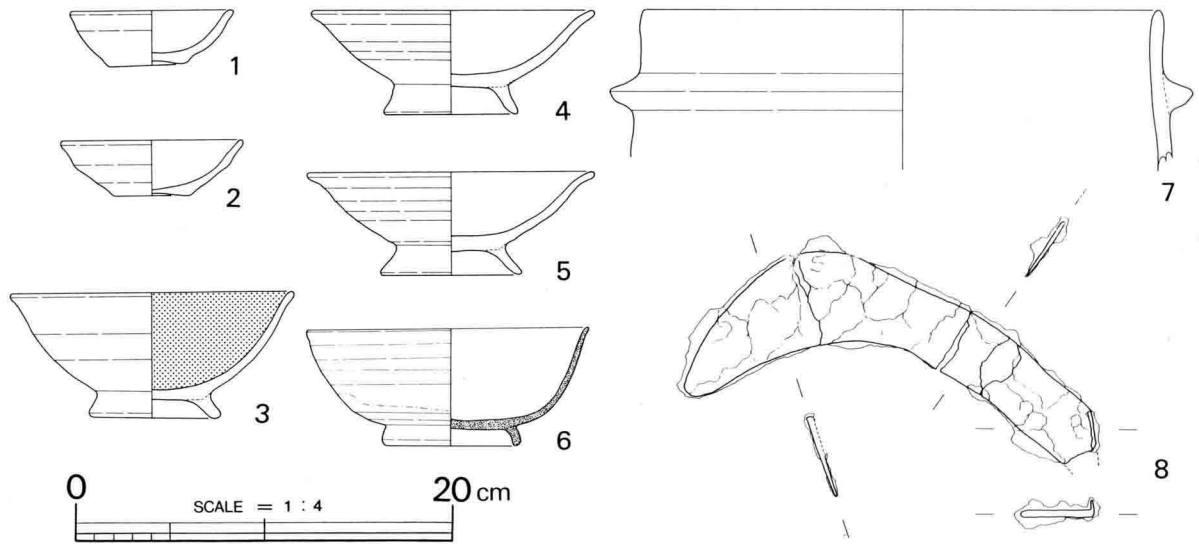


写真181 SA 5遺物出土状況





第180図 SA 5 遺物実測図 (8もS=1:4)

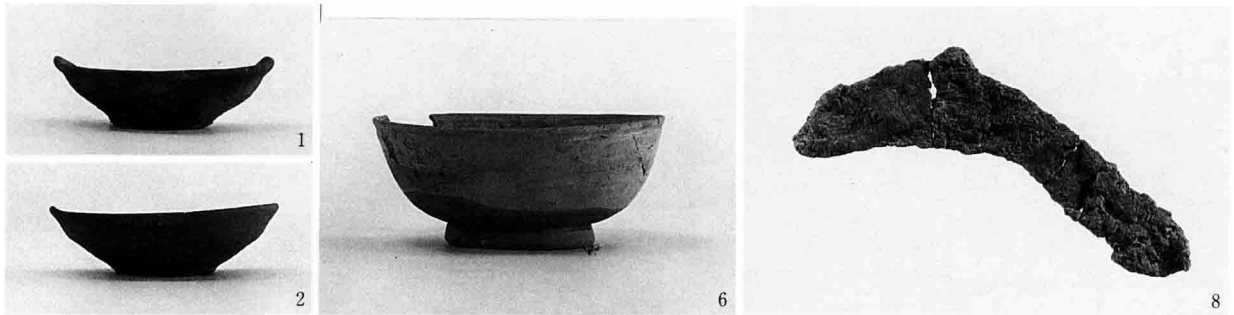


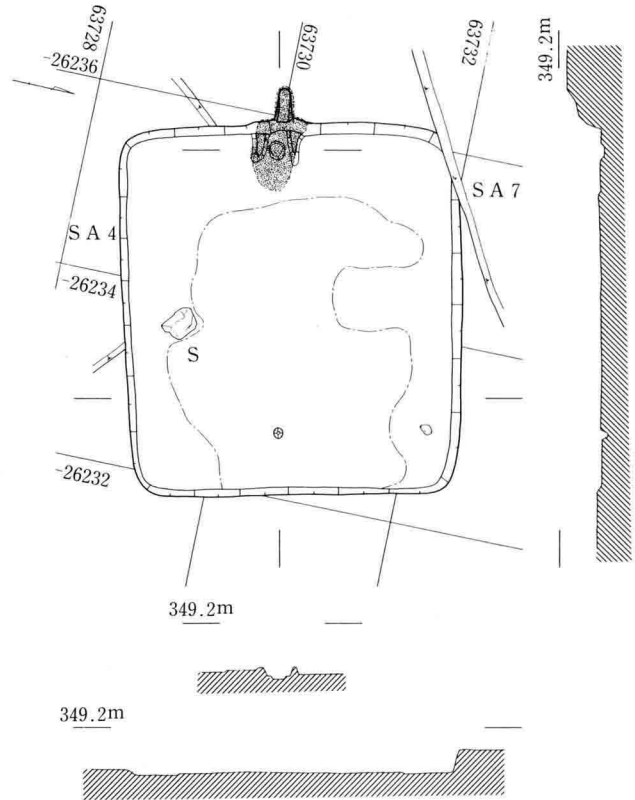
写真182 SA 5 遺物写真

SA 6 (E区1次面)

主軸方位N103° W、主軸3.84m、横軸3.60mを測る正方形を呈する住居跡で、SA 4に切られる。堅緻な床面が比較的広範囲に認められる。中央部南側床面には25cm大の石材が残っているが、カマドの石材かどうかは不明である。カマドは煙道の一部と両袖の痕跡、支脚石抜き取り痕が残っている。出土遺物には暗文の施される高台付杯(6・7)等がある。



写真183 SA 6



第181図 SA 6 実測図

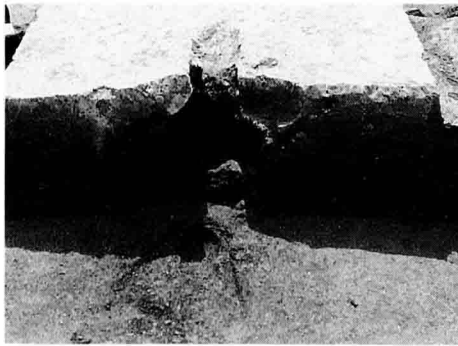


写真184 SA 6 カマド近景

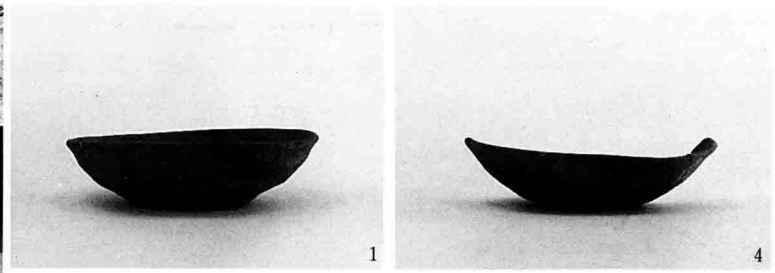
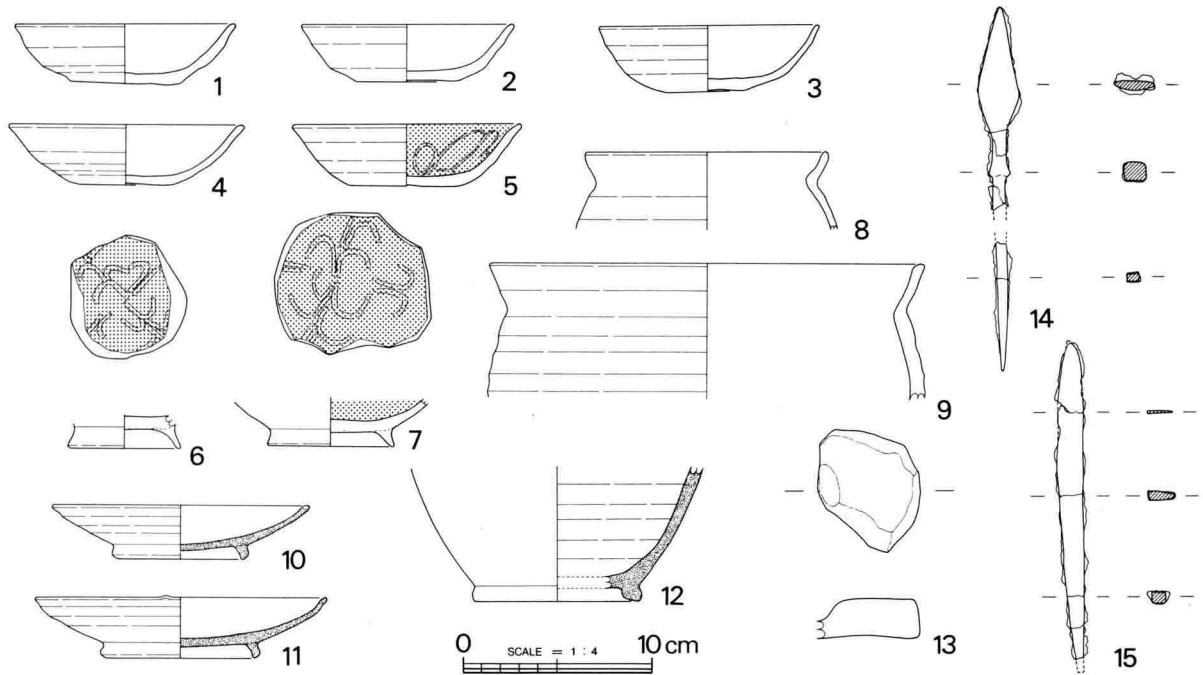


写真185 SA 6 遺物写真



第182図 SA 6 遺物実測図 (13~15はS = 1 : 3)

SA 7 (E区1次面)

主軸方位N118° W、主軸3.86m、横軸3.60mを測るほぼ正方形の住居跡で、SA 6を切っており、切り合い関係の新相を示している。中央には堅緻な床面が広範囲に

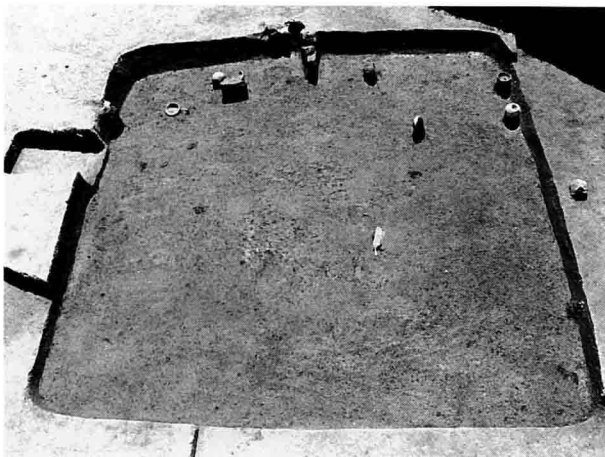
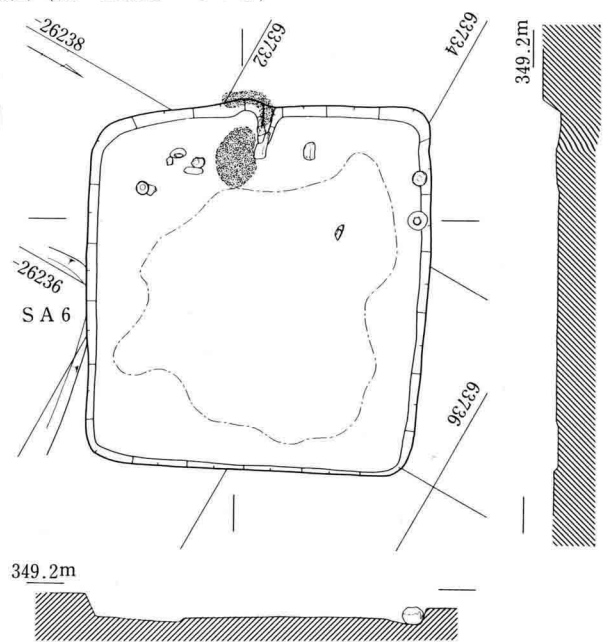
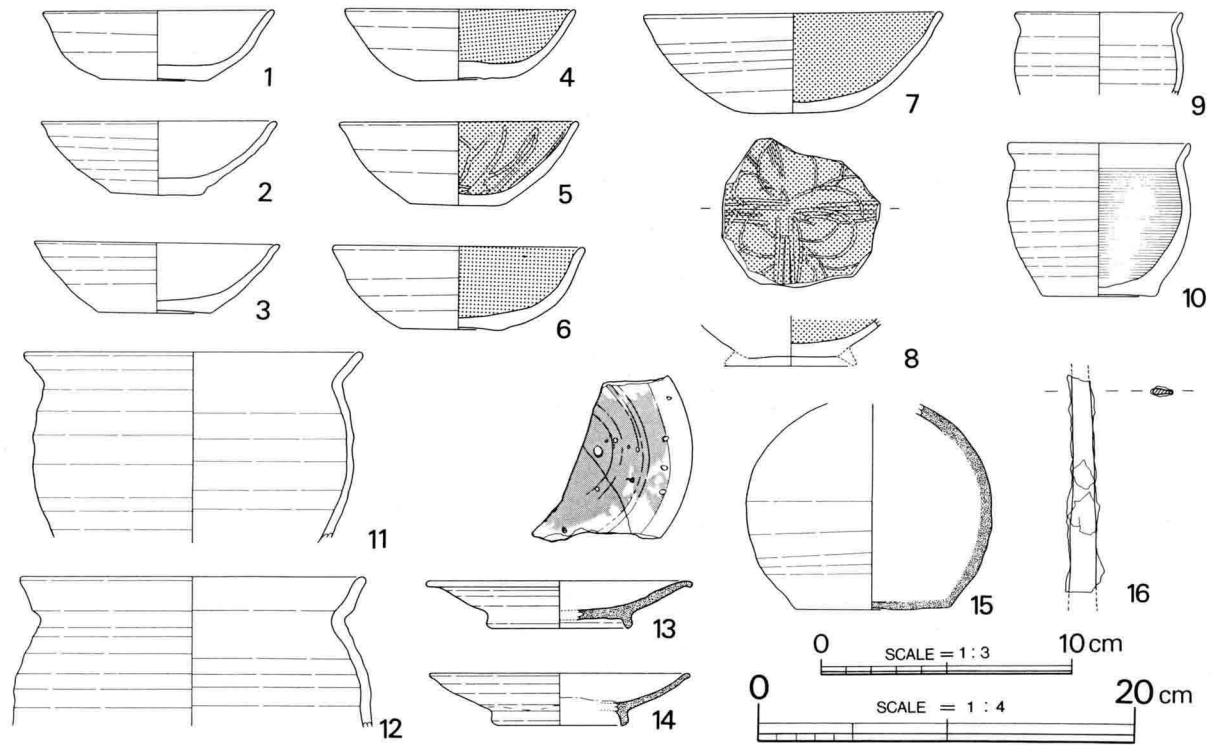


写真186 SA 7



第183図 SA 7 実測図

認められる。カマドは左袖部の痕跡が残存し、カマド床面と思われる位置には酸化焼土面が残っている。比較的完形に近い土器が住居床面に散在していた。灰釉陶器皿(13)は内面に墨痕があり、転用硯として使用されていた可能性がある。灰釉皿(13・14)は高台形態から大原2号窯式に相等するものと考えられる。



第184図 SA 7 遺物実測図 (16はS = 1 : 3)

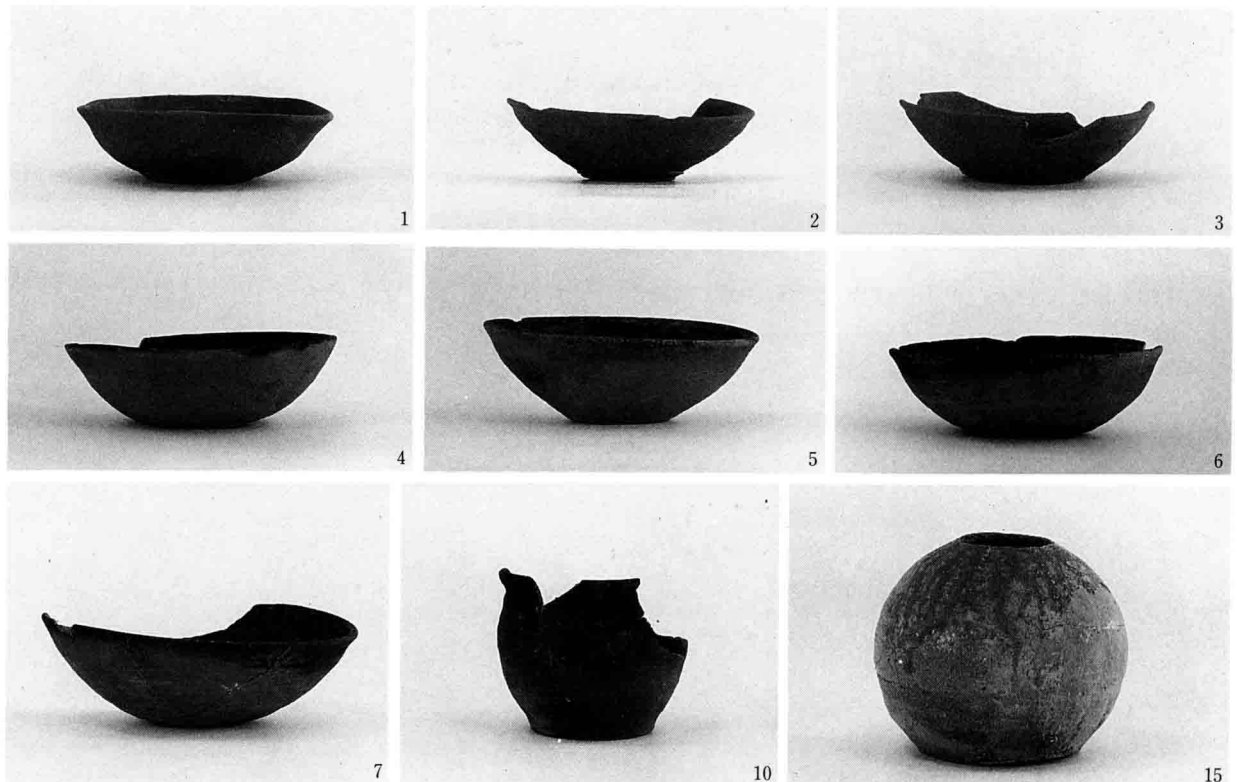


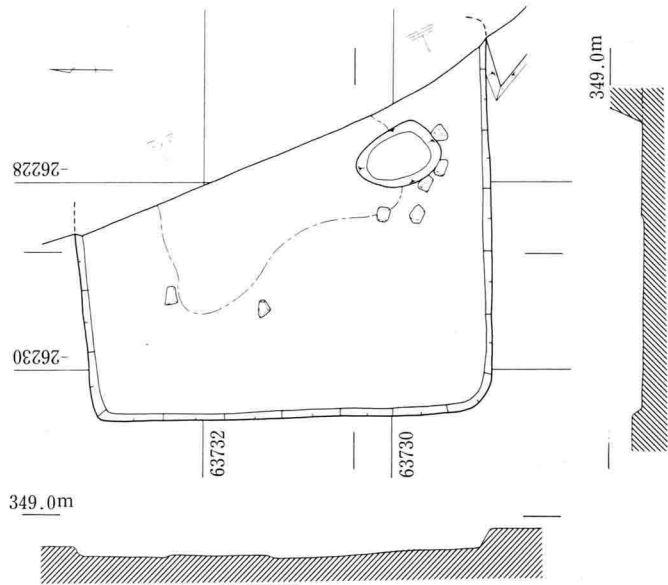
写真187 SA 7 遺物写真

**SA 8 (E区1次面)**

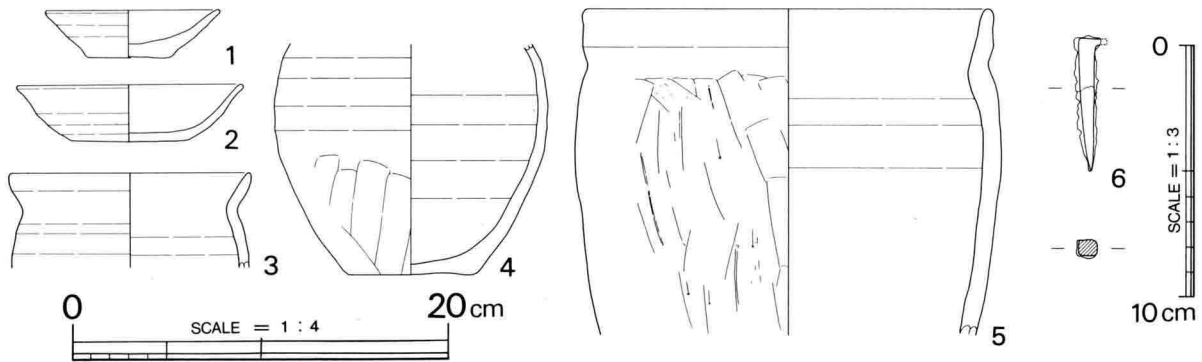
堅緻な床面を検出したが、住居壁が明確に確認できず規模は不明瞭であるが、一辺4.20mの正方形を呈するものと推測される。床面には石材が散在するが、カマドの痕跡は確認できなかった。



写真188 SA 8



第185図 SA 8実測図



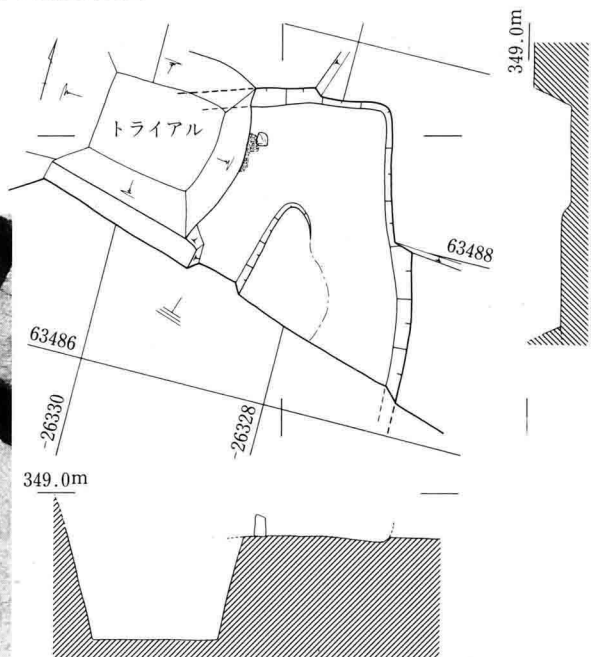
第186図 SA 8 遺物実測図

**SA 9 (A区2次面)**

A区の南端に位置し、松原遺跡最南端の住居跡と考えられる。試掘時の土層観察用のトライアルによってカマドの大部分を破壊してしまっていた。堅緻な床面が残っているが、そのほとんどは調査区外に展開しているものと考えられる。カマドの痕跡として若干の酸化焼土と、石材1個が残存している。検出できた部分が小さいため、規模等は不明である。遺物は土器の小片が数片出土した。



写真189 SA 9



第187図 SA 9実測図

S A 10 (A区2次面)

主軸方位N24° W、主軸3.48m、横軸3.66mを測る正方形を呈する住居跡である。堅緻な床面は確認できず、検出面から床面の高さは3cm前後と浅い。カマド部には酸化焼土が残存するのみで、明瞭でない。出土遺物は須恵器杯(1~3)の他に武蔵型甕(5)がある。

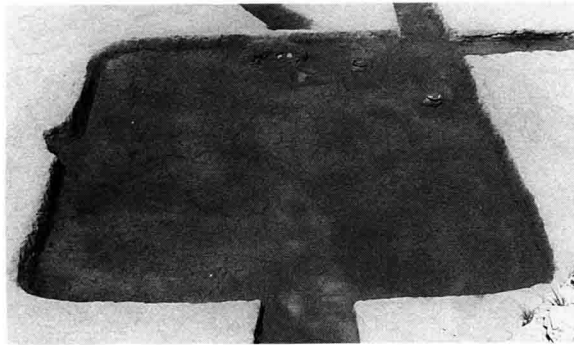
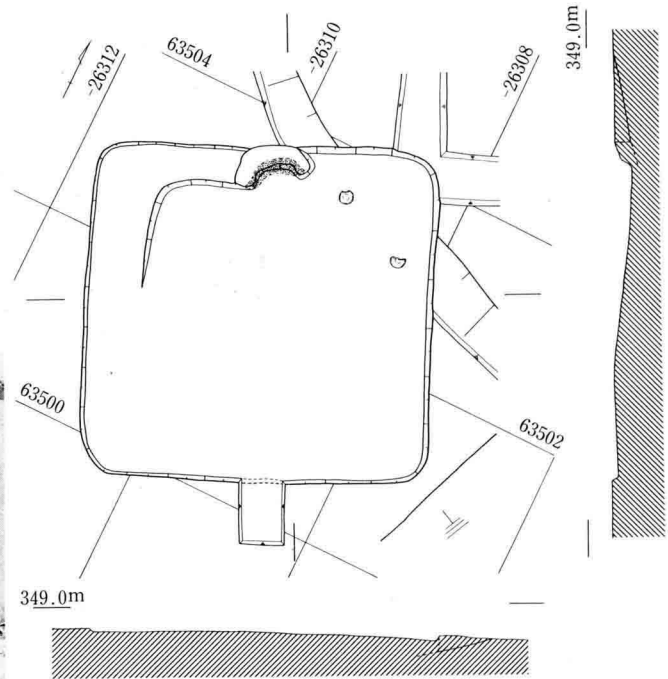
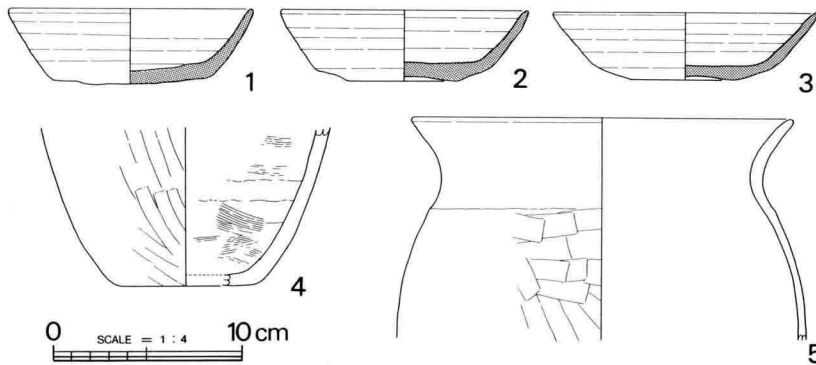


写真190 S A 10



第188図 S A 10実測図



第189図 S A 10遺物実測図

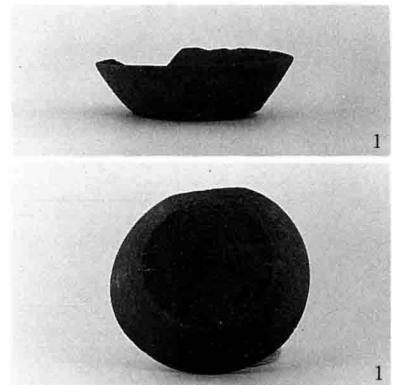
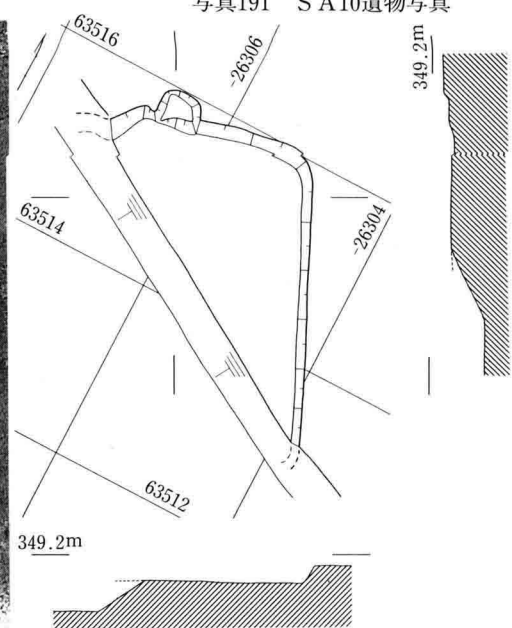


写真191 S A 10遺物写真



写真192 S A 11

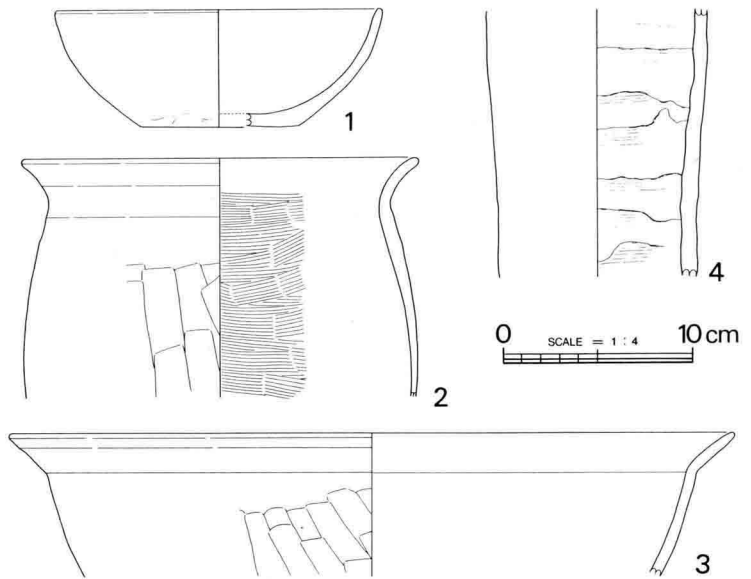


第190図 S A 11実測図

**S A 11 (B区 2次面)**

A区とB区の境界部にあり、重機による表土除去と廃土移動作業の際、破壊してしまったため、規模は不明である。主軸方位はN28° Wを測る方形と思われる。床面は堅緻な部分は検出できなかった。カマドは焼土も残らず明確ではないが、住居壁の外側、床面より高い位置にある掘り込みその痕跡と考えられる。

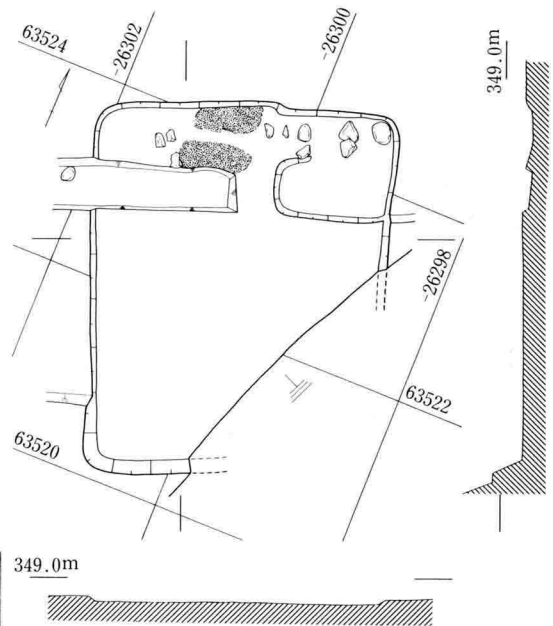
遺物出土量は少ないが、土師器大型鉢(3)や筒形土器(4)がある。



第191図 S A 11遺物実測図

**S A 12 (B区 2次面)**

主軸方位N22° W、主軸3.80m、横軸3.20mを測る長方形を呈する住居跡である。堅緻な床面は確認できなかったが、検出面からの床面の高さは28cmである。しかし検出面では良好に検出できなかったためトレンチを設定し住居範囲を確認した。住居内北側に石材が散在しているが、焼土の存在からカマド構築材と考えられる。焼土は2箇所にとまっていたが、カマドの位置を推定できるものではない。カマド付近より土師器碗(1)や内黒処理された杯(2)、須恵器杯(3・4)の他、ケズリを施した甕(5~10)が出土した。



第192図 S A 12実測図

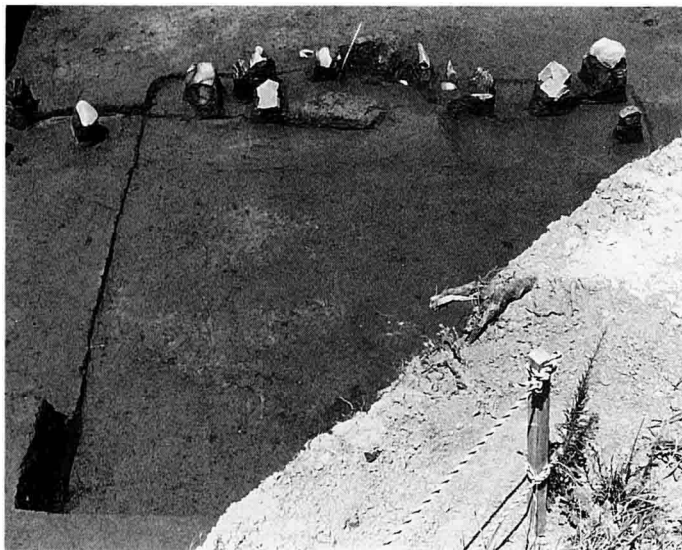


写真193 S A 12

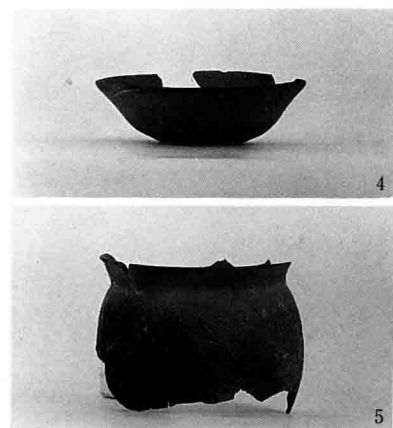
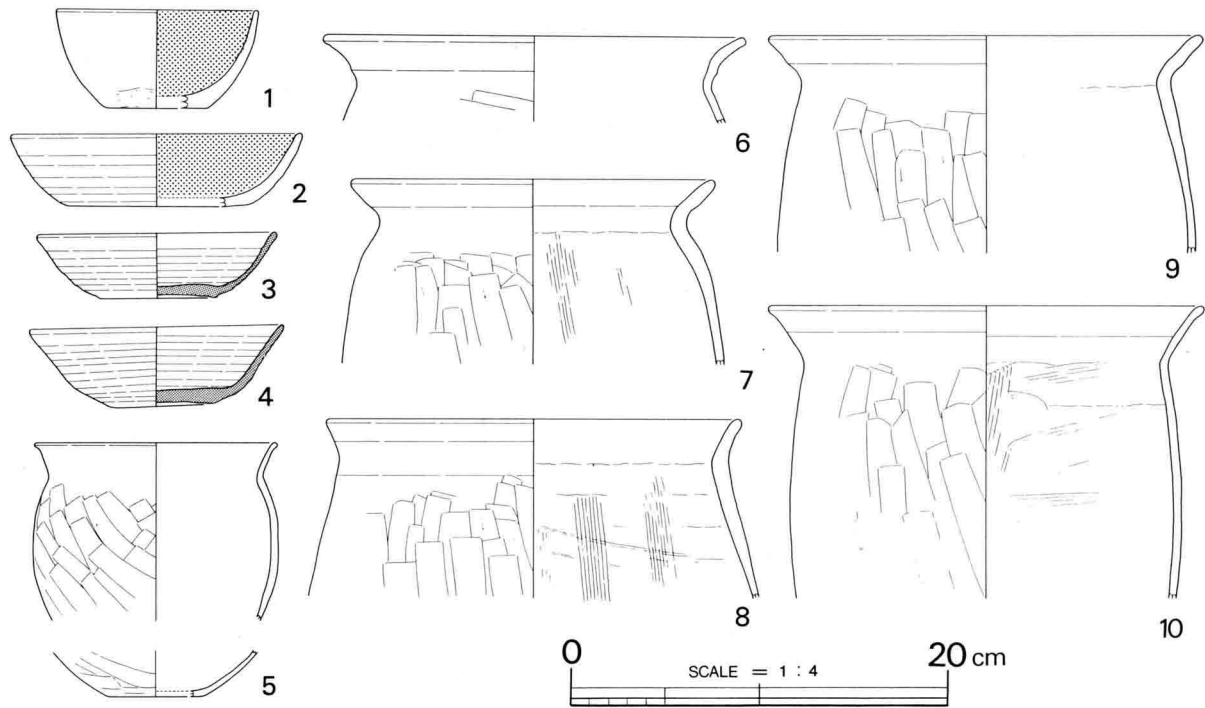


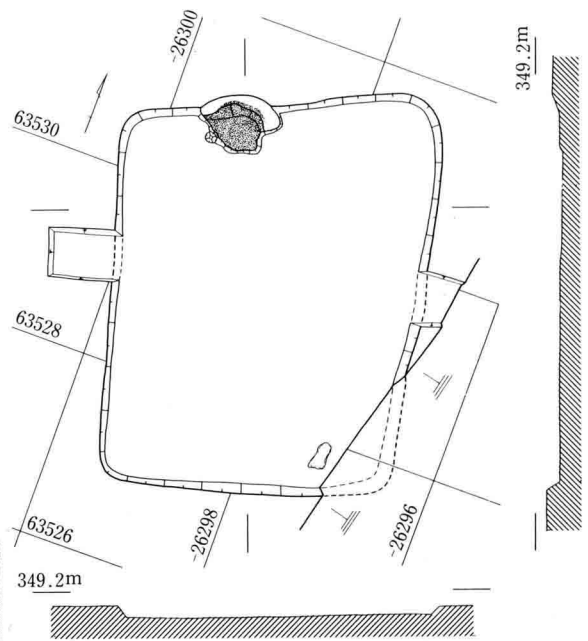
写真194 S A 12遺物写真



第193図 SA12遺物実測図

**SA13 (B区2次面)**

若干歪な長方形を呈する住居跡で、主軸方位N17° W、主軸4 m、横軸3.30mを測る。床面は堅緻とは言えないが比較的しっかりと絞められていた。カマドは主軸中心線より若干西側に寄っている。カマド床面は、住居床面レベルより6 cmほど高く、一面に焼土化している。右袖部に石材抜き痕らしき小穴があるが、住居南東隅に石が1個あるのみで、構築材が石だったかどうかは不明である。カマドからは小型甕(2~4)、甕(6)、筒形土器(5)が出土した。この他須恵器杯(1)がある。



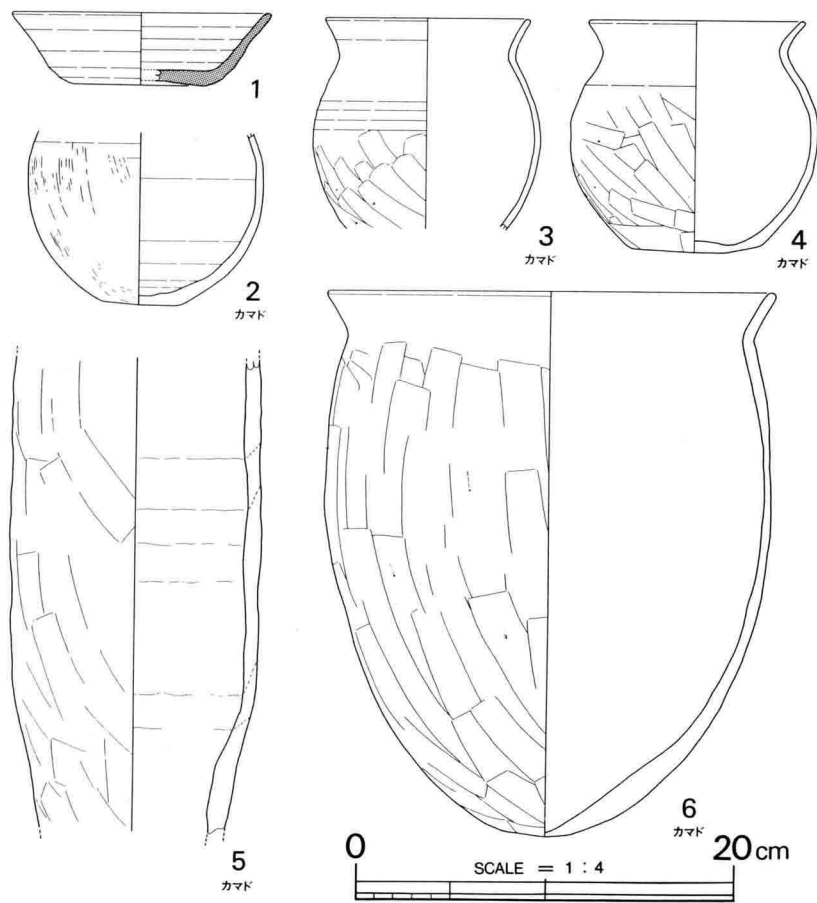
第194図 SA13実測図



写真195 SA13



写真196 SA13遺物写真



第195図 SA13遺物実測図

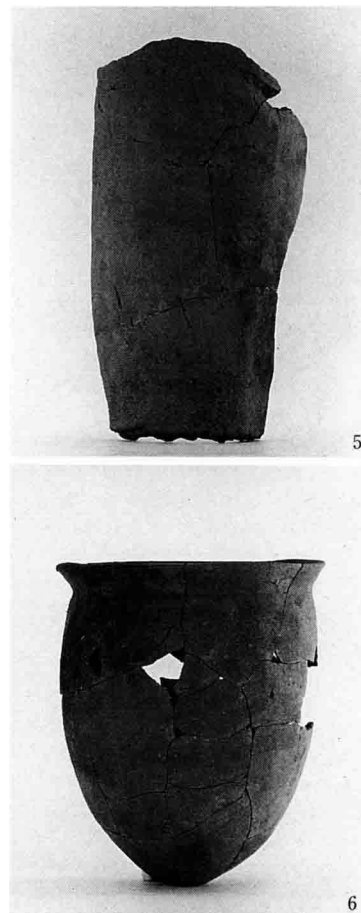


写真197 SA13遺物写真

SA14 (B区2次面)

かなり歪で、台形のように見える住居跡で、主軸方位N 61° E、主軸3.12m~2.78m、横軸3.42mを測る。検出面からの床面の高さは12cmで、SA15と床面の高さはほぼ同じである。SA15を切っているがカマドの位置から当住居跡を新相とした。床面は堅緻ではない。カマド右側に石材が1個存在するのみで、原位置は保っていないと思われる。

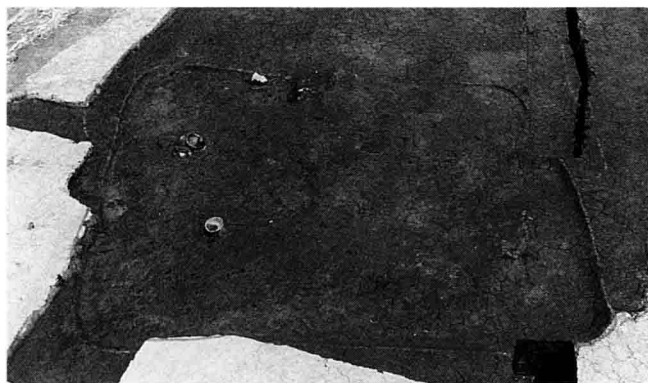
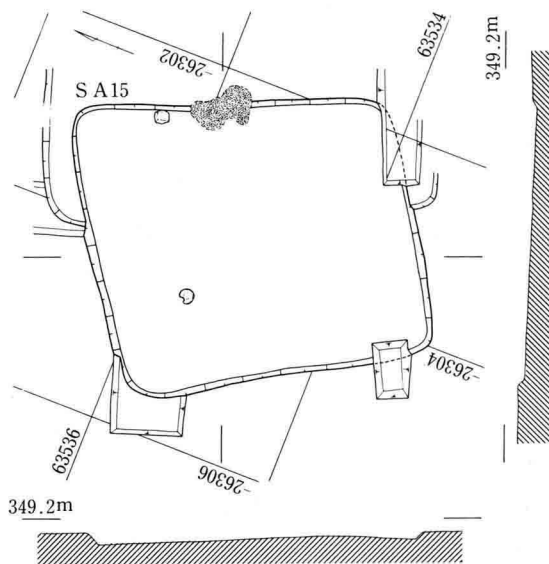


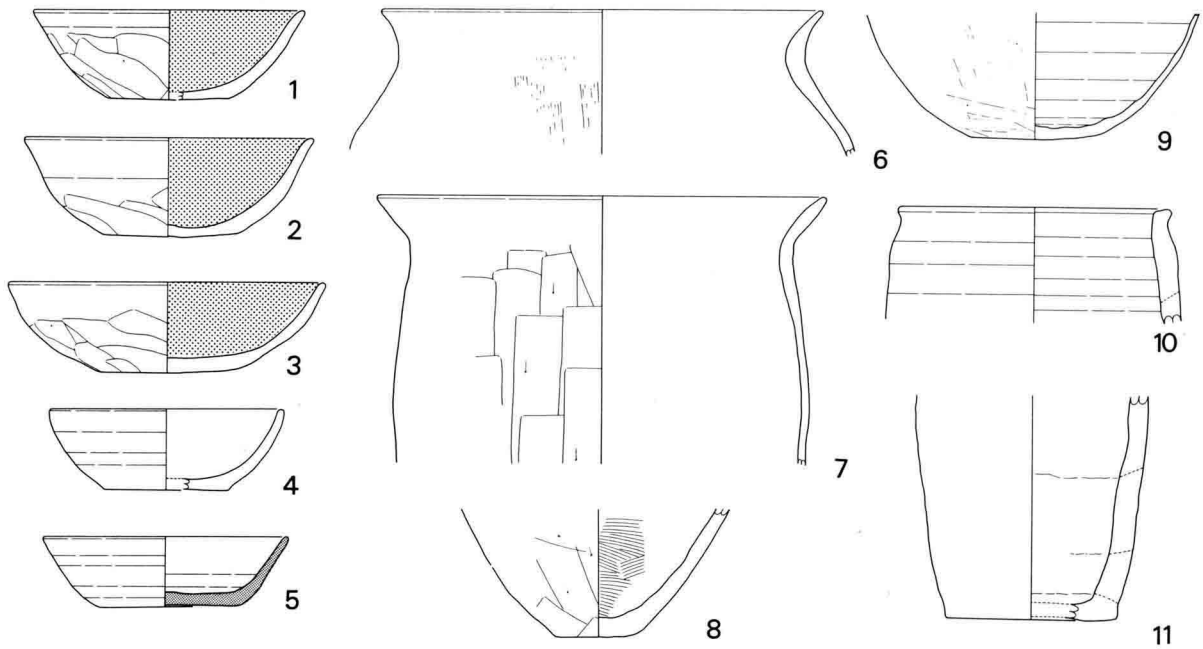
写真198 SA14



第196図 SA14実測図

出土遺物には内黒処理された土師器杯(1~3)がある。底部のみならず立上り部にまで静止ヘラケズリを施していることから9世紀代前半の所産と考えられる。この他筒形土器(11)もある。





第197図 SA14遺物実測図

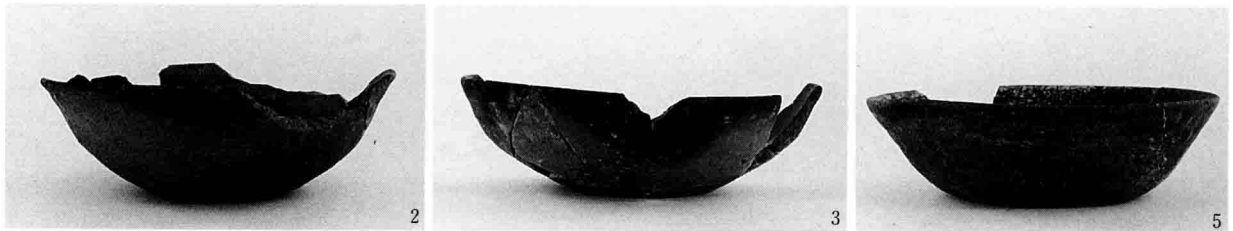


写真199 SA14遺物写真

SA15 (B区2次面)

SA14に切られており、主軸方位N66° E、主軸3.30m、横軸4.10mを測る長方形を呈する住居跡である。床面はSA14とほぼ同じレベルで堅緻ではない。カマドは東側壁のほぼ中央に設置されている。

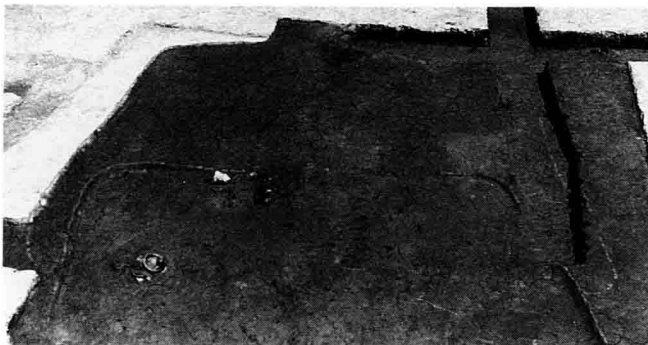
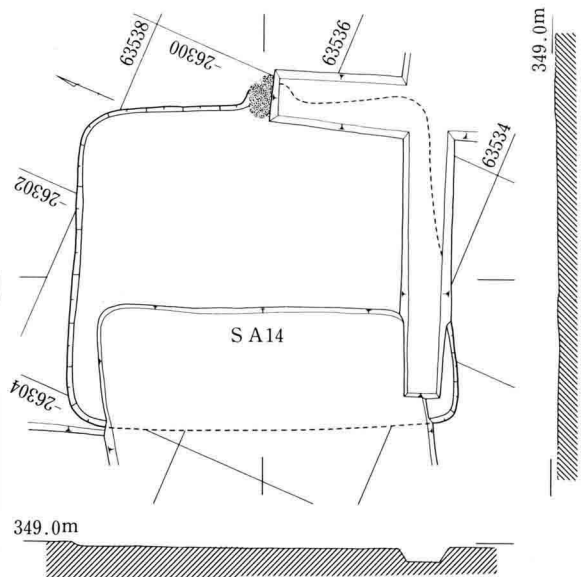
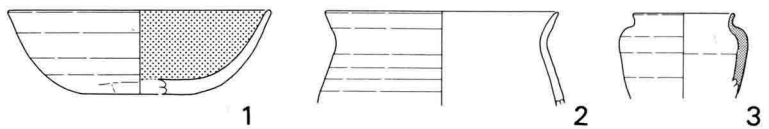


写真200 SA15



第198図 SA15実測図

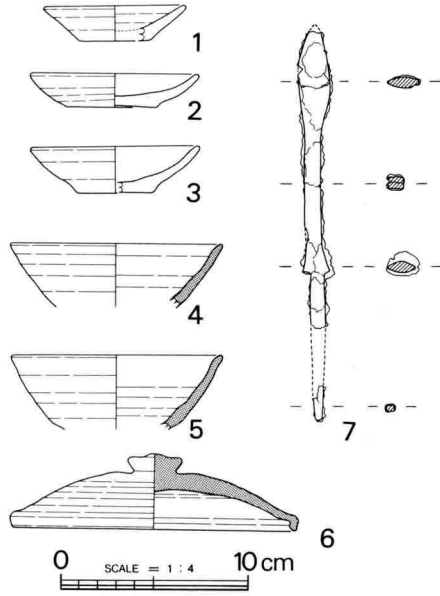
土師器杯(1)は内黒処理され、糸切り後底部周縁に静止ヘラケズリが施される。この他須恵器の小型短頸壺(3)がある。



第199図 SA15遺物実測図

**SA16 (B区2次面)**

主軸方位N33° E、主軸4m、横軸3.82mを測る住居跡であるが、壁の検出が明確にできず、切り合い関係は逆転している可能性がある。住居内に石材が散在しているが、比較的しっかりとした酸化焼土部にある石材は原位置を保っているように思われる。出土遺物はSA20との切り合いが曖昧なため一括性は疑わしい。



第201図 SA16遺物実測図  
(7のみS=1:3)



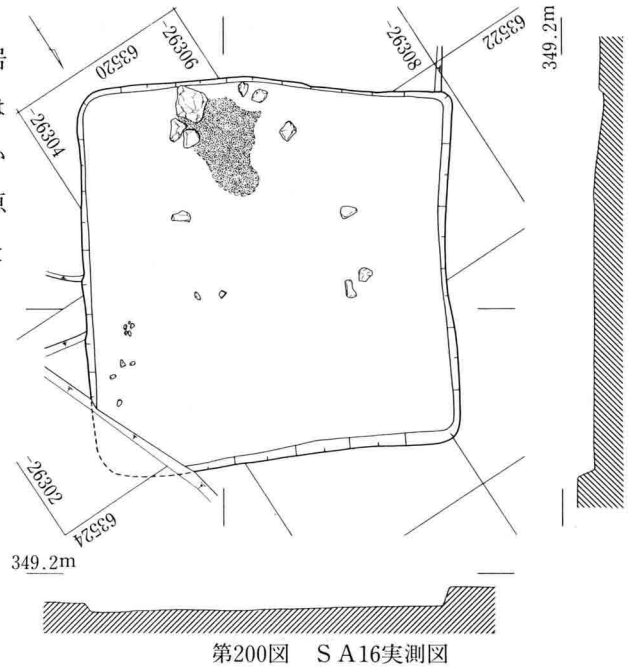
写真201 SA16遺物写真

**SA17 (B区2次面)**

SA18・20を切る住居跡であるが、SA16と同様壁の検出が曖昧で、切り合い関係は明瞭ではない。主軸方位はN22° W、一辺3.70mの正方形を呈する。カマドは壁の外側に掘り込まれ一面が酸化している。



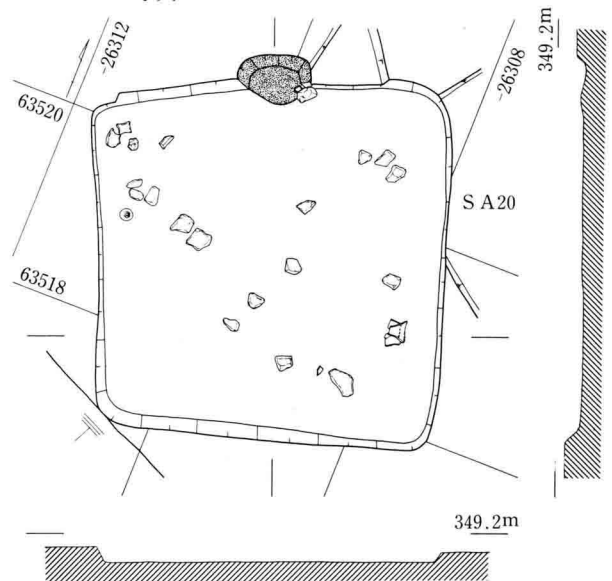
写真203 SA17



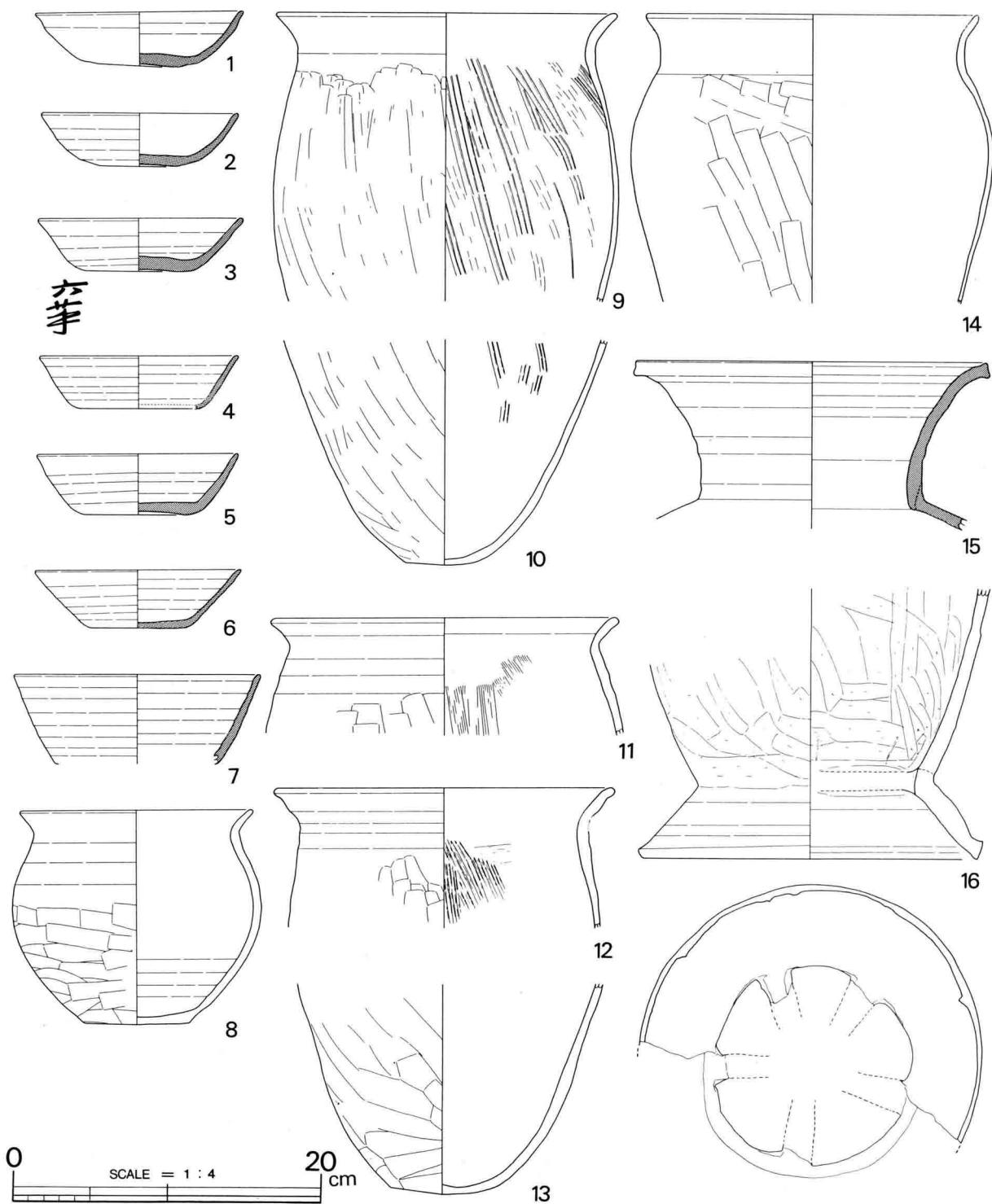
第200図 SA16実測図



写真202 SA16



第202図 SA17実測図



第203図 S A17遺物実測図

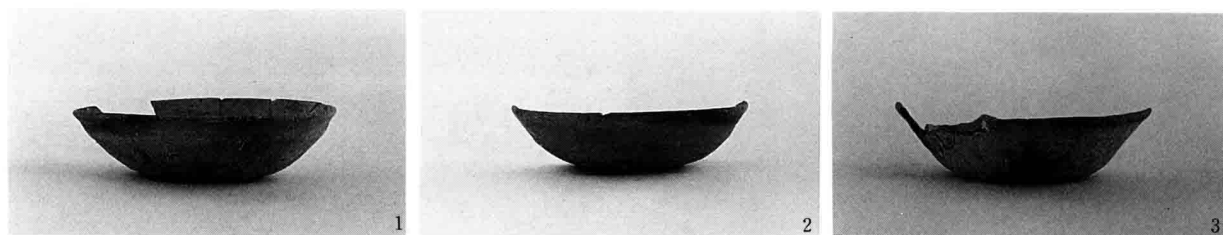
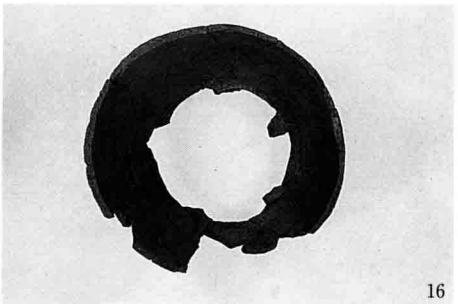
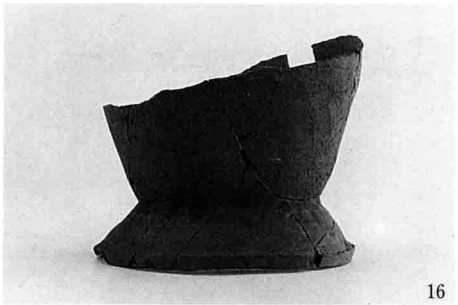


写真204 S A17遺物写真

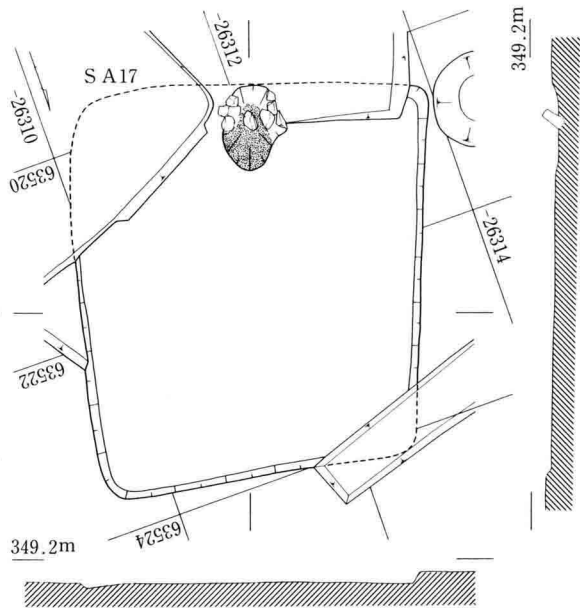


出土遺物量は多い。杯(1~7)はすべて須恵器で、「六芋」状の墨書(3)も見られる。またケズリ甕(9~13)の他、武蔵型甕(14)も出土した。小型甕(8)はケズリの手法に武蔵型の影響がうかがえる。また須恵器甕口縁部(15)の他、土師質であるが焼成良好な甕と思われる土器(16)がカマド付近から出土している。

写真205 S A17遺物写真

**S A18 (B区2次面)**

S A17に切られ、S A19を切る住居跡で、主軸方位N161°W、主軸4.12m、横軸3.60mを測る。やはり切り合い関係は不明瞭で、S A16~21までは前後関係は曖昧である。遺物の混入も考えられるため、切り合いによる前後関係の把握は信憑性を持たない。壁の検出が困難だったため平面形は歪である。床面は堅緻ではないが比較的締まっていた。カマドは支脚石が残っている稀な例である。壁中央の住居内に構築され、両袖の石材ともそれぞれ3個ずつ残っていたが、その他の石材は住居内にはなかった。カマド床面は、住居跡の床面より5cmほど掘り込まれ、床面は硬く焼土化していた。出土遺物には杯(1・2)は土師須恵1個ずつの他、ケズリ甕(3~5)、把手付羽釜(6)がある。



第204図 S A18実測図

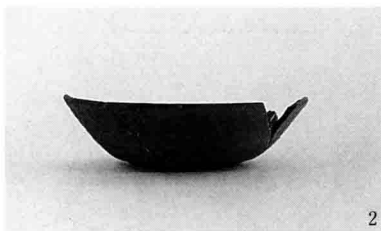


写真206 S A18遺物写真

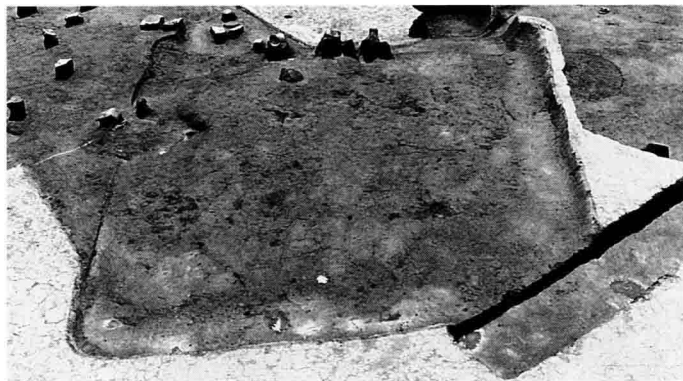
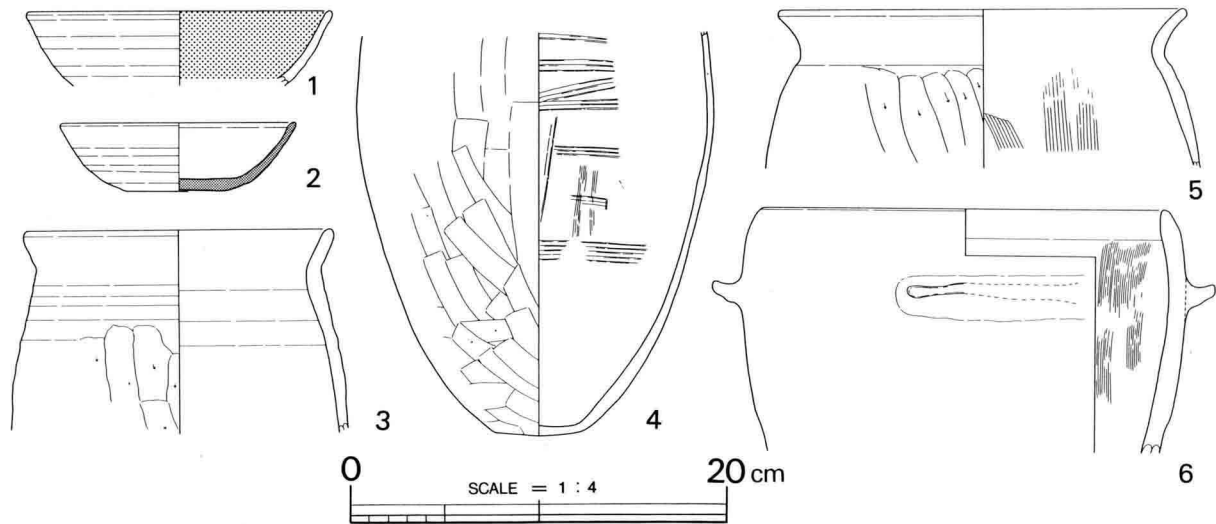


写真207 S A18



第205図 S A18遺物実測図

**S A19 (B区 2次面)**

西側調査区壁にかかっており、全容を知ることはできなかったが、主軸方位N24° W、主軸6 m、横軸5.70 mを測る大型住居跡である。床面は堅緻な部分は確認できなかったが、検出面からの床面の高さが32cmである。住居内に土坑が7基穿たれているが、Pit 2・3は住居との同時性は疑わしい。柱穴はPit 1・5・7と調査区外に1基と思われ、4本柱建物が予想される。遺物出土量は少なく、杯(1~3)が出土したにすぎない。

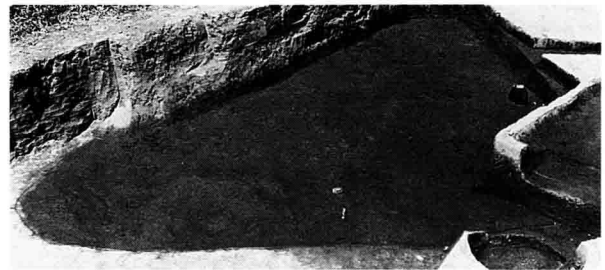
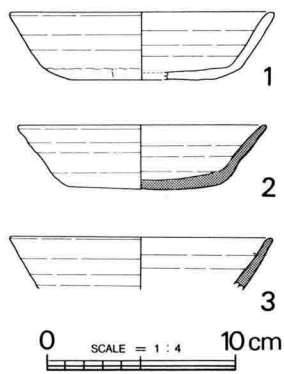
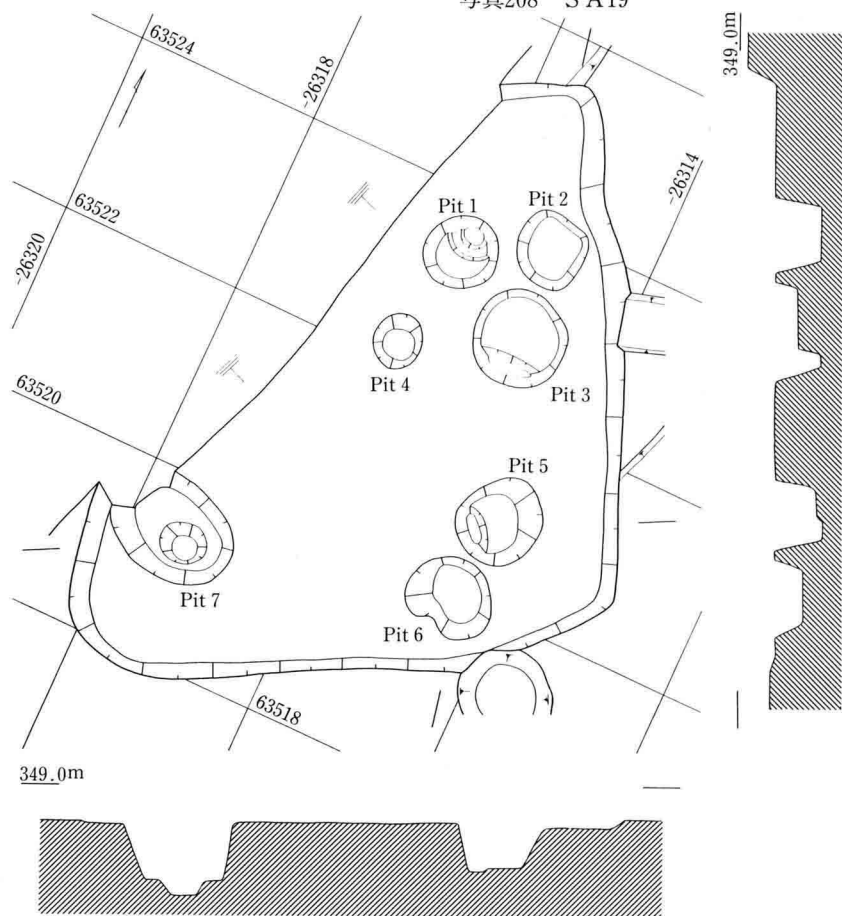


写真208 S A19



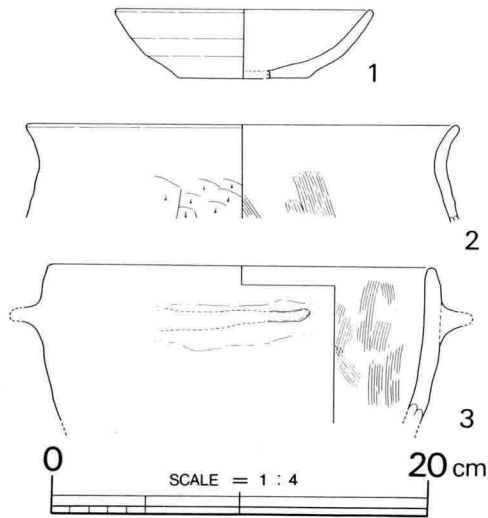
第206図 S A19遺物実測図



第207図 S A19実測図

**S A 20 (B区2次面)**

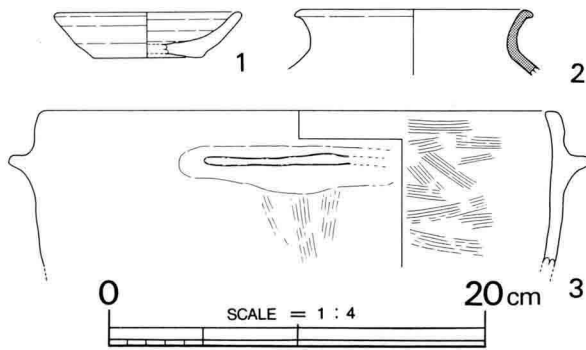
S A 16・17・21と切り合い関係を持つが、前後関係は曖昧である。主軸方位N142° W、一辺4.10mを測る正方形を呈する住居跡である。カマドは酸化焼土と石材が残っていたが、住居内に石材と焼土が散在しており、破壊の程度がうかがえる。出土遺物には把手付羽釜(3)がある。



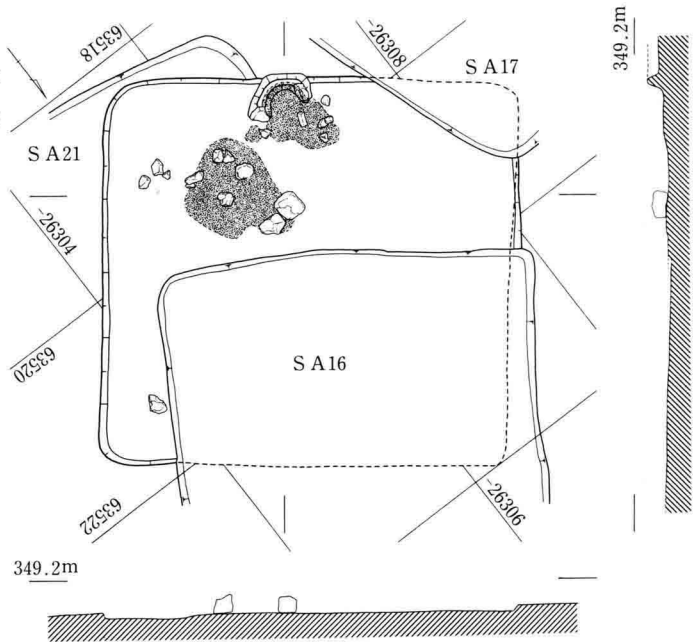
第209図 S A 20遺物実測図

**S A 21 (B区2次面)**

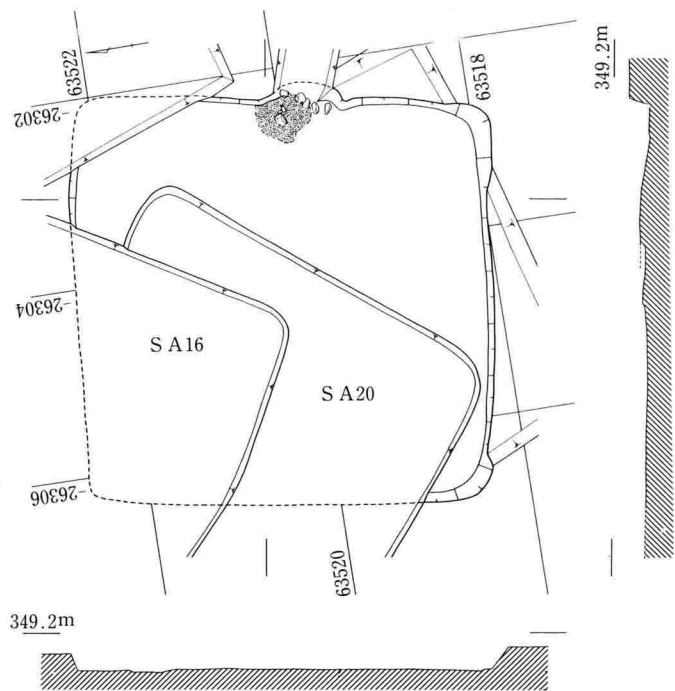
主軸方位N81° E、主軸4.20m、横軸4.40mを測るほぼ正方形を呈する住居跡である。S A 16・20との切り合い関係を持つ。カマドは東側壁のほぼ中央に設置され、若干の石材と焼土化した床が確認された。出土遺物には中世の土器に近似した土師器杯(1)や須恵器壺(2)、把手付羽釜(3)がある。



第211図 S A 21遺物実測図



第208図 S A 20実測図



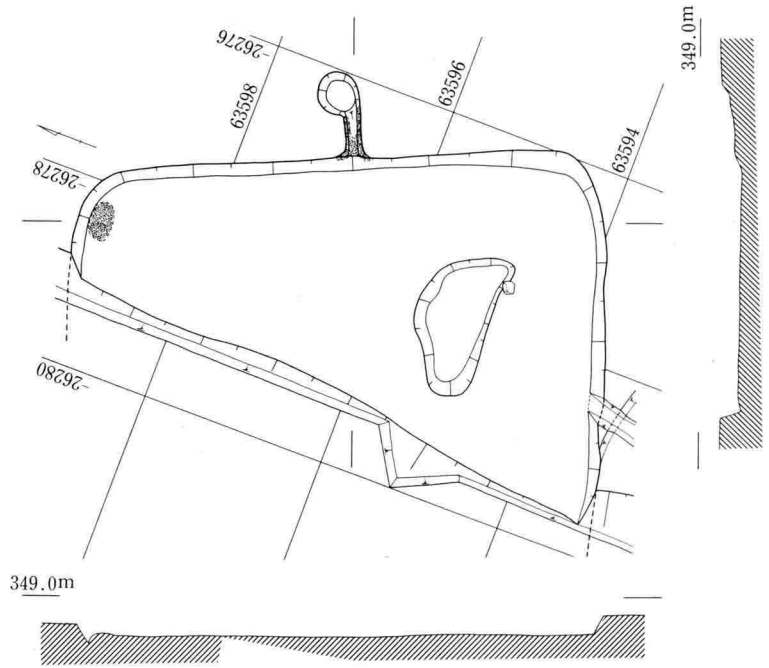
第210図 S A 21実測図



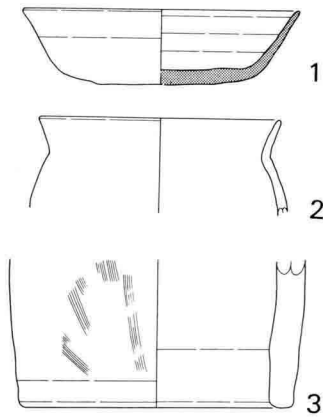
写真209 S A 21

**S A 22 (C区 2次面)**

主軸方位N70° Eを測る大型住居で、一辺5.60mの正方形を予想できる。農道敷設時の攪乱で西側半分が残っていない。床面は堅緻ではない。住居内の北東隅壁際には焼土があった。住居内の土坑は14cmの深さで、柱穴とは考えにくい。カマドはほとんど残っていないが、焼土化した煙道と灰溜まり土坑が検出された。出土した遺物には須恵器杯(1)の他、筒形土製品(3)がある。



第212図 S A 22実測図



第213図 S A 22遺物実測図  
SCALE = 1 : 4 10cm

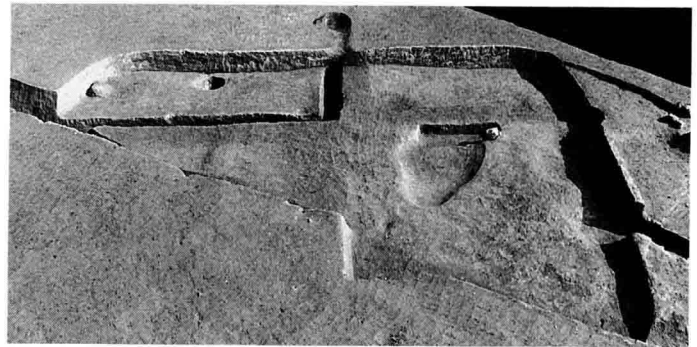


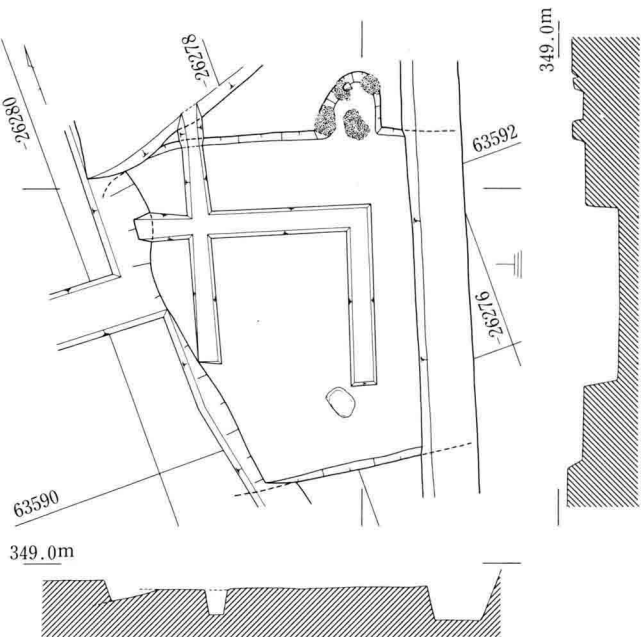
写真210 S A 22



写真211 S A 22遺物写真

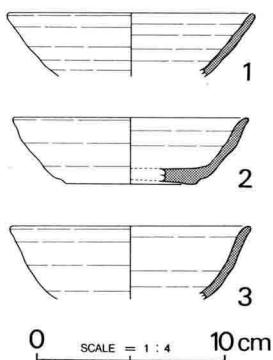
**S A 23 (C区 2次面)**

S A 22の南側にあるが攪乱や調査区外のため全容を知ることはできない。主軸方向はN20° Eと思われる。床面は堅緻ではなく、また締まっていないためカマドの焼土面から推定した。カマドは住居壁の外側に掘り込んで設置され、焼土が部分的に散見さ



第214図 S A 23実測図

れた。住居内には石が1個あったが、カマド構築材かどうかは不明である。出土遺物は少なく、須恵器杯（1～3）のみである。



第215図 S A23遺物実測図



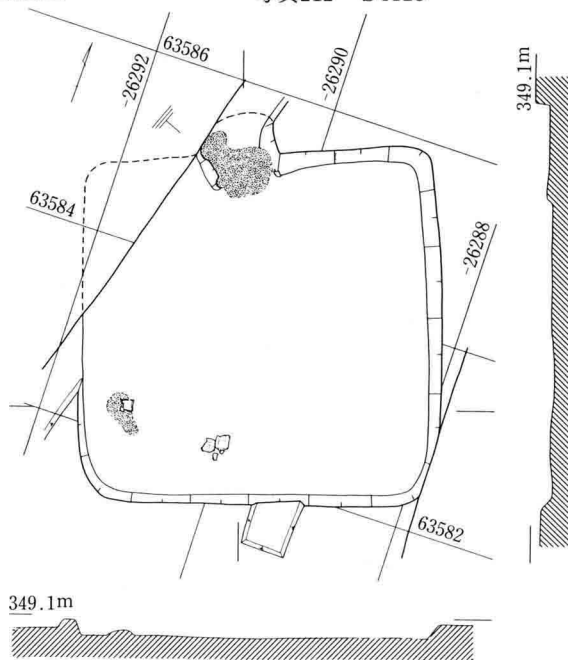
写真212 S A23

### S A24 (C区2次面)

土壙墓S J 4の北側にあり、調査区外に北西隅を切られるが主軸方位N17° E、一辺3.80mを測る正方形を呈する住居跡である。堅緻な床面は確認されなかったが、検出面



写真213 S A24



第216図 S A24実測図

からの床面の高さは12cmである。

出土遺物には、底部に「×」印の刻印がある土師器甕(3)や、土師器鉢(5)がある。これらの遺物は古相を呈し、8世紀代と考えられる。

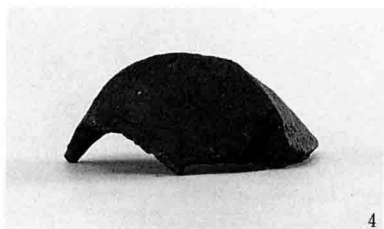
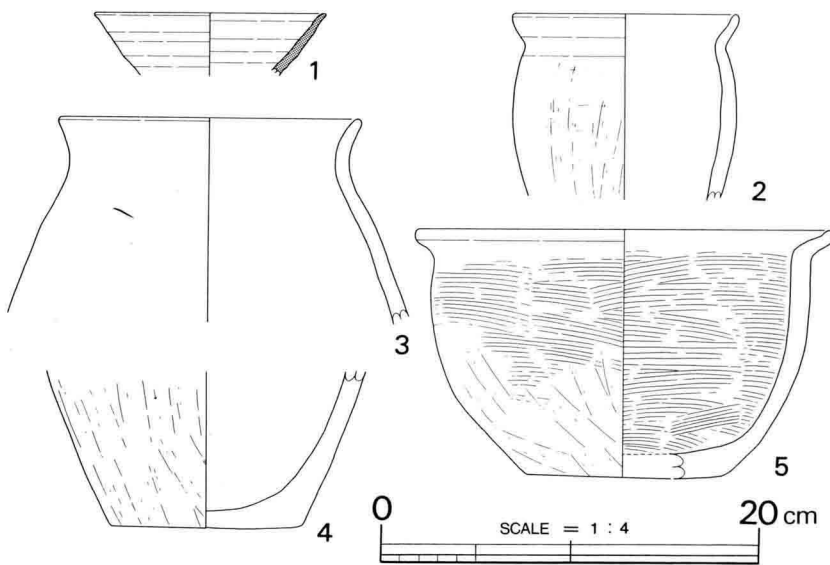


写真214 S A24遺物写真



第217図 S A24遺物実測図

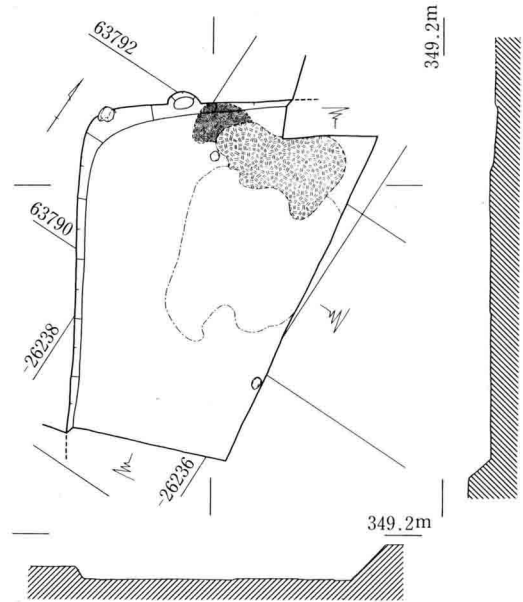


S A 25 (F区 2次面)

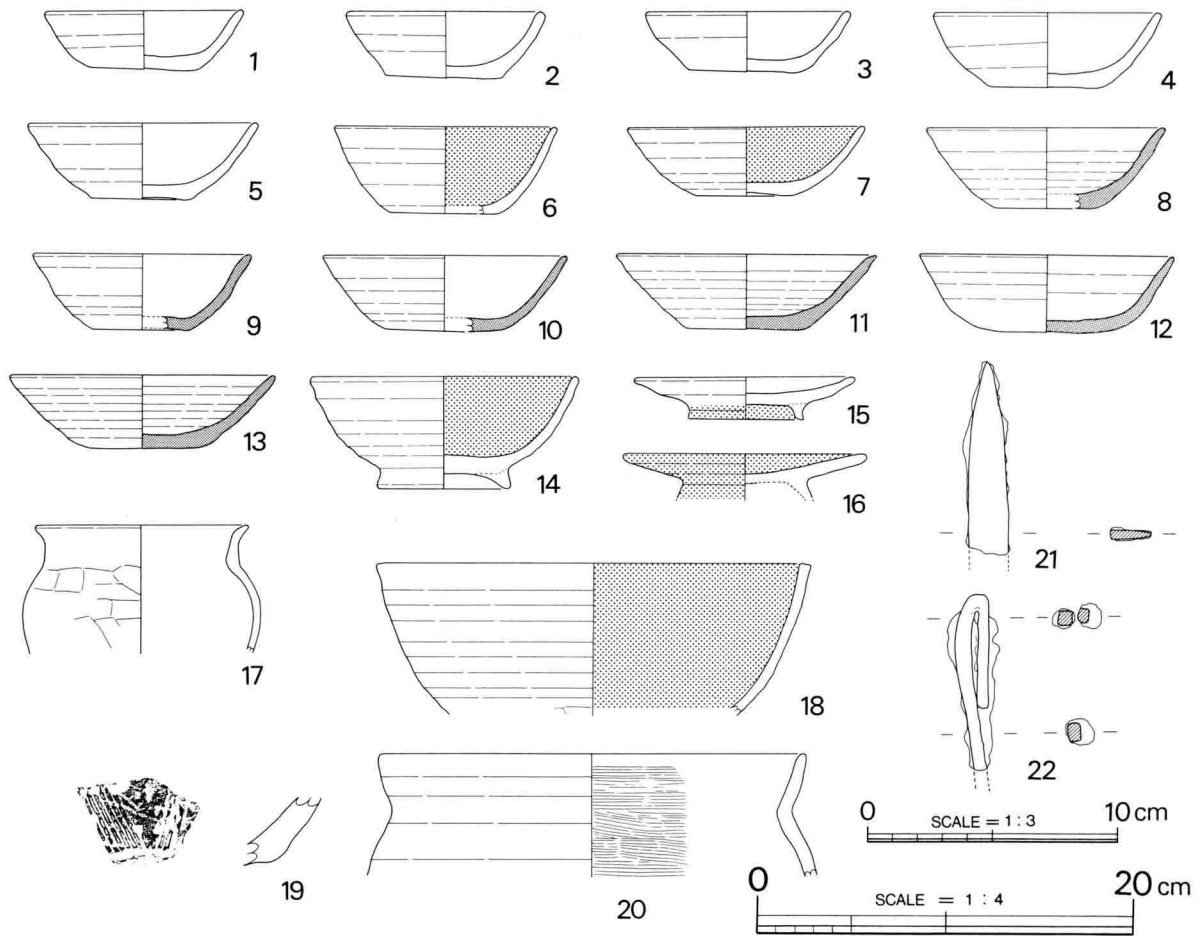
F区の南端で1/3ほどを検出した住居跡である。主軸方位はN31° Wを測るが、調査区外のため規模等全容は不明である。北側壁に焼土化した部分が残っており、カマドの痕跡と思われる。付近には炭化物が広がり、堅緻な床面の範囲辺りまで広がっていた。検出面からの床面の高さは16cmである。



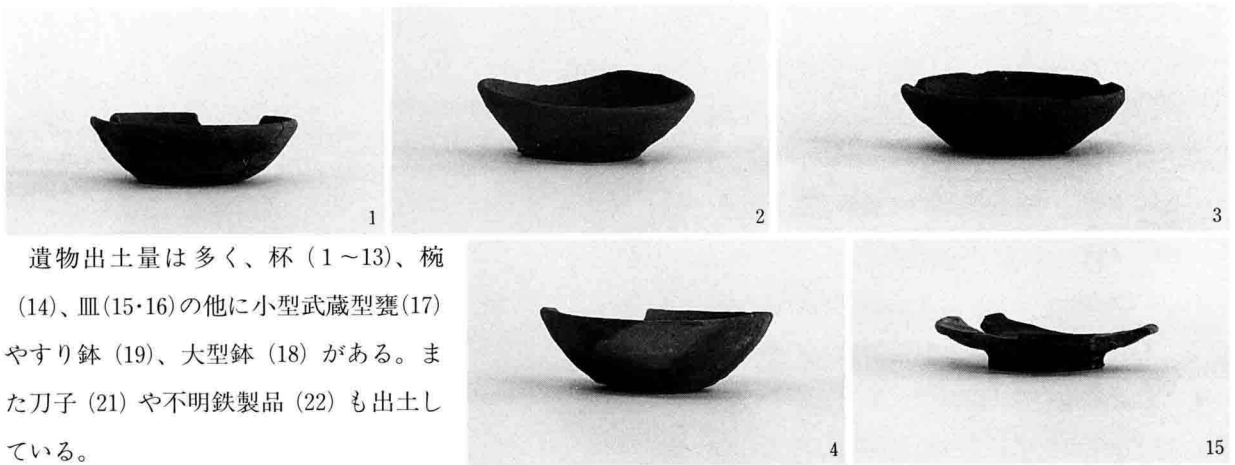
写真215 S A 25



第218図 S A 25実測図



第219図 S A 25遺物実測図



遺物出土量は多く、杯(1~13)、椀(14)、皿(15・16)の他に小型武蔵型甕(17)やすり鉢(19)、大型鉢(18)がある。また刀子(21)や不明鉄製品(22)も出土している。

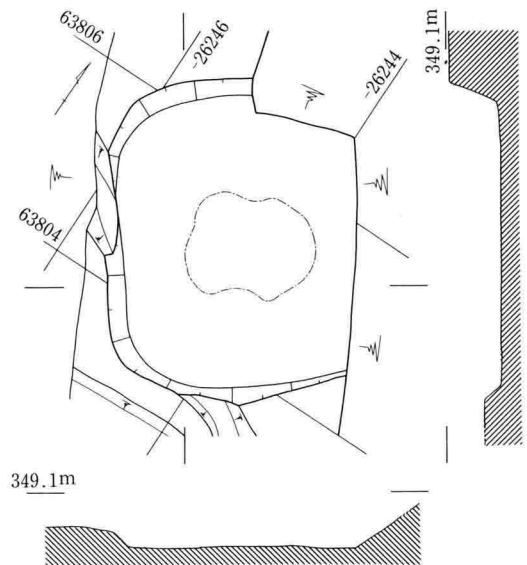
写真216 SA25遺物写真

SA26 (F区2次面)

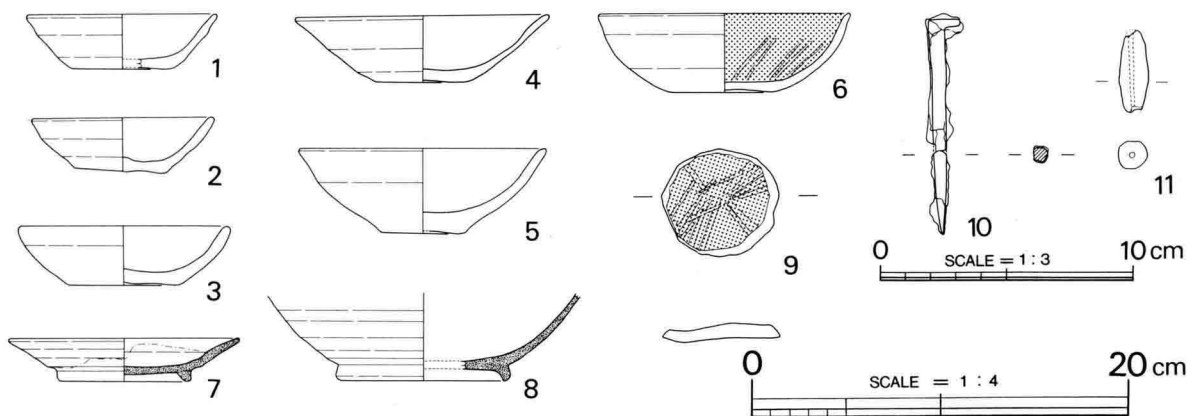
F区の中央付近で検出した住居跡であるが、東側が調査区外のため、全容は不明である。一辺3.32mの隅丸正方形の住居と思われる。他3辺にカマドの痕跡が皆無いため、カマドは東側に設置されているもの考えられる。堅緻な床面が中央部に若干残っていた。出土遺物には土器の他土器底部転用の円板(9)、鉄釘(10)、土錘(11)がある。



写真217 SA26



第220図 SA26実測図



第221図 SA26遺物実測図 (10・11はS=1:3)

**S A 27 (G区 2次面)**

G区の南端にて、住居跡の北東隅と思われる1/4程度を検出した。主軸方位はN27° Wと推定される。調査区の西側壁に焼土の一部が見えているため、カマドの位置を推定できる。カマドの左側に炭化物が検出された。検出面からの床面の高さは4 cmほどしかない。遺物は出土しなかった。

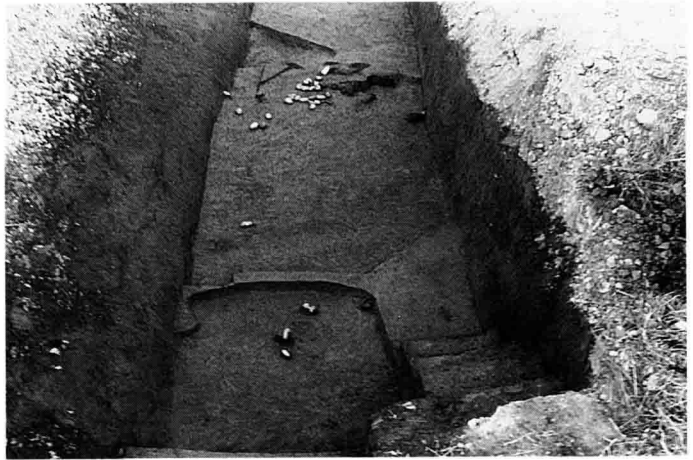
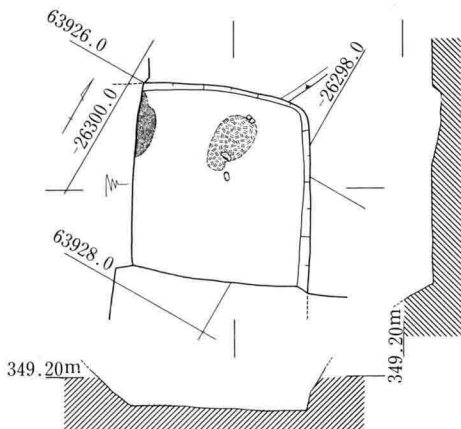


写真218 S A 27・28全景



第222図 S A 27実測図

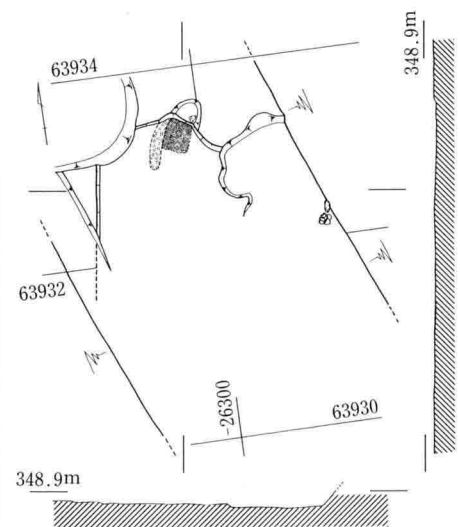


写真219 S A 27

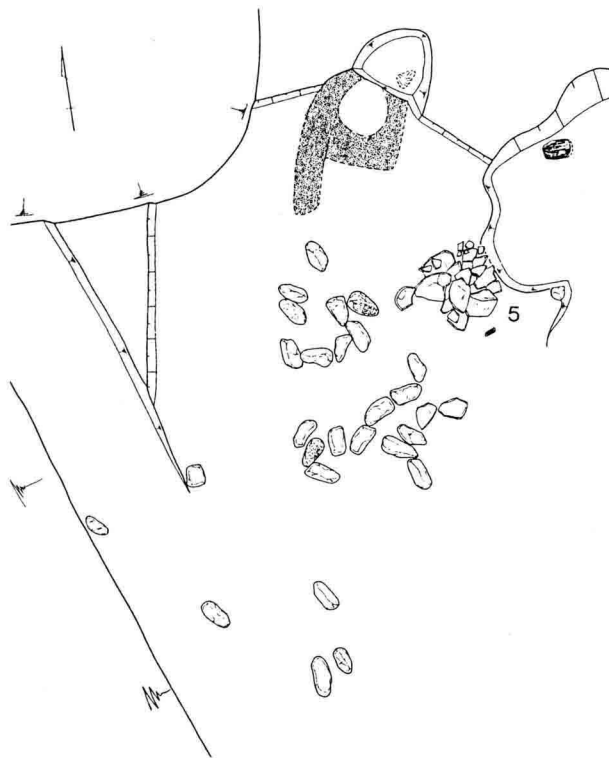
**S A 28 (G区 2次面)**



写真220 S A 28



第223図 S A 28実測図



第224図 S A 28礫検出状況実測図 (S = 1 : 30)

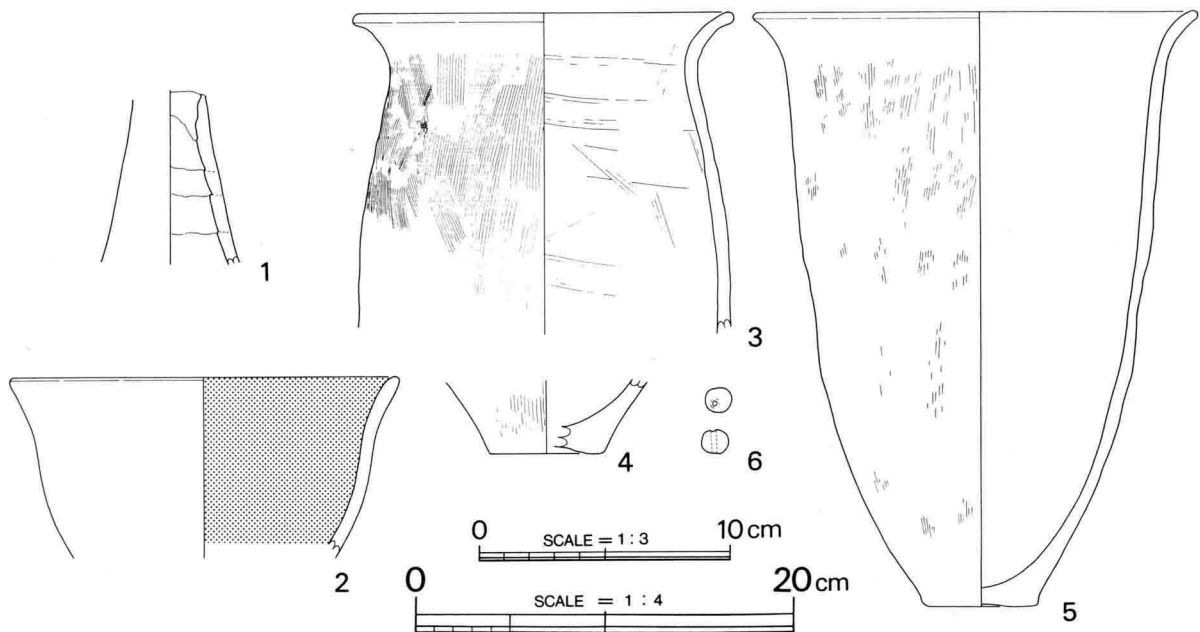
には異形の掘り込みが見られ、炭化材が1個体出土したが焼土は検出されなかった。床面からは土師器長胴甕(5)が1個体分出土した。この他土師器高杯の脚柱部(1)や内黒処理された鉢(2)、土玉(6)も出土した。高杯の脚柱部は古相を呈し混入品の可能性があるが、これらの遺物からは概ね8世紀代の時代観が与えられる。

S A 27の北側にて検出したが、壁の検出が明確にできず、住居規模が特定できない。検出面からの床面の高さは4 cmと浅く、床面は堅緻な部分が確認できず絞まってもいなかった。床面と思われるレベルに拳大の礫石が散在していた。礫石は計28個でほとんどが川原石であり、うち2個は花崗岩質で脆弱化していた。カマド構築材とは考えにくい。若干被熱痕があることから、カマド廃絶時にもなう何らかの祭祀行為と関係があるように思う。カマドは北壁の外側に掘り込んで設置されるものと思われるが、住居床面の高さよりは3 cmほど高い前面には酸化焼土面が見られた。その特異な形状からカマドの位置が推定できるものと考え

る。カマドの左側



写真221 S A 28遺物写真



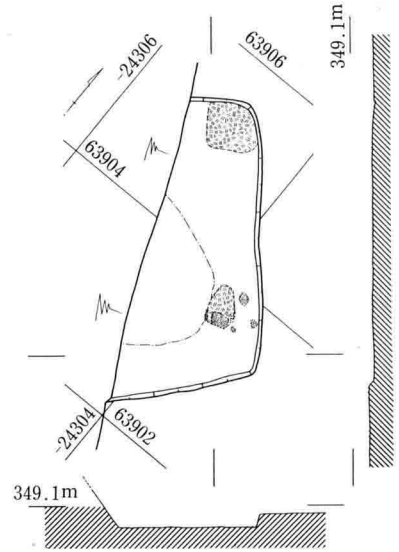
第225図 S A 28遺物実測図 (6のみS = 1 : 3)

**S A 29 (G区 2次面)**

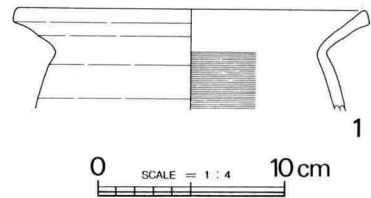
この住居も壁の検出が曖昧で、堅緻な床面から住居規模を推定した。住居の西側半分が調査区外のため、カマドの位置も特定できないが、仮に北西壁に存在するならば主軸方位はN30°Eとなる。一辺3m程度の正方形プランであろうか。住居内の北東隅に炭化物が、南東には焼土と炭化物が検出された。検出状況からいずれもカマドの位置を特定できる材料ではない。検出面から床面まで3cm前後と浅いため、遺物も土師器甕(1)1点のみであった。口縁部形態は須恵器を模倣しており、8世紀後半から9世紀代と考えられる。



写真222 S A 29



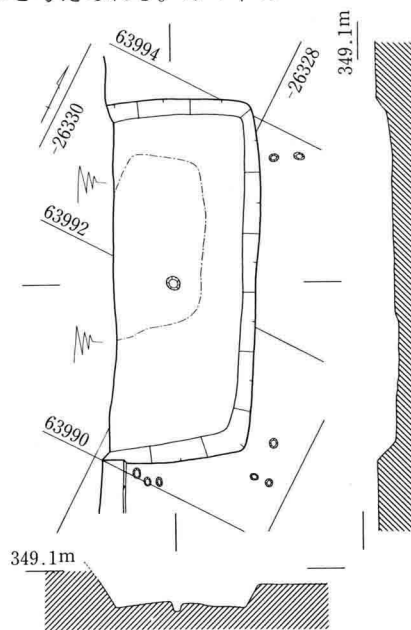
第226図 S A 29実測図



第227図 S A 29遺物実測図

**S A 30 (G区 2次面)**

G区の北側で検出した住居跡で、西側半分は調査区外となるが、一辺3.84mの正方形を呈するものと考えられる。カマドの痕跡は認められず、調査区外にあるものと推定される。中央部には堅緻な床面と、小穴が1個穿たれていた。検出面からの床面の高さは18cmである。出土した遺物は土師器杯(1)、須恵器高台付杯(2)、須恵器無頸鉢(3)の他、土師器長胴甕(5)、器壁が薄く底部の小さい武蔵型甕(4)がある。9世紀代の遺物と考えられる。



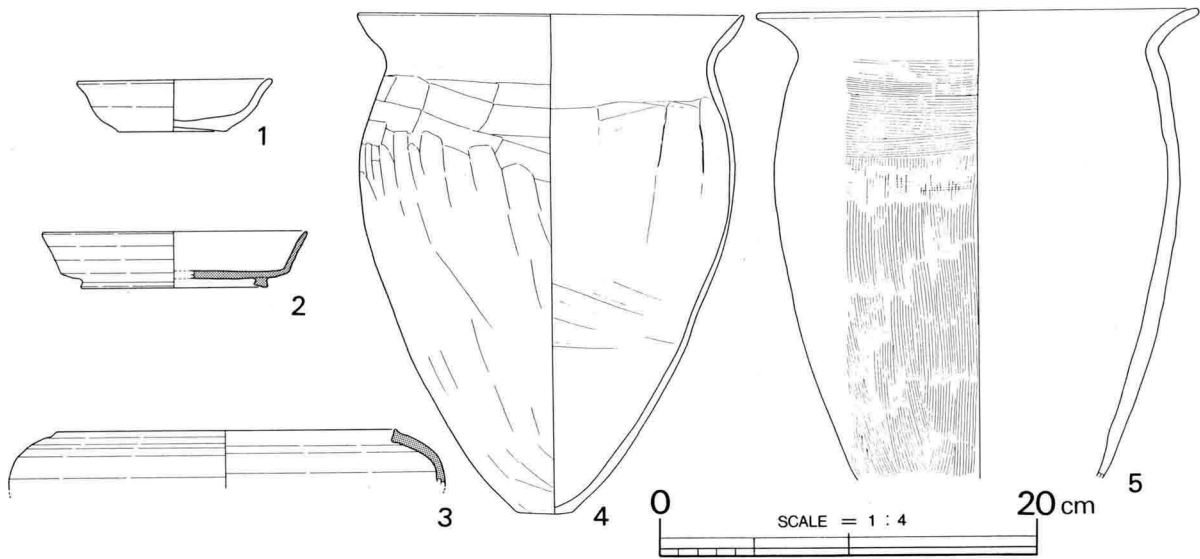
第228図 S A 30実測図



写真223 S A 30遺物写真



写真224 S A 30

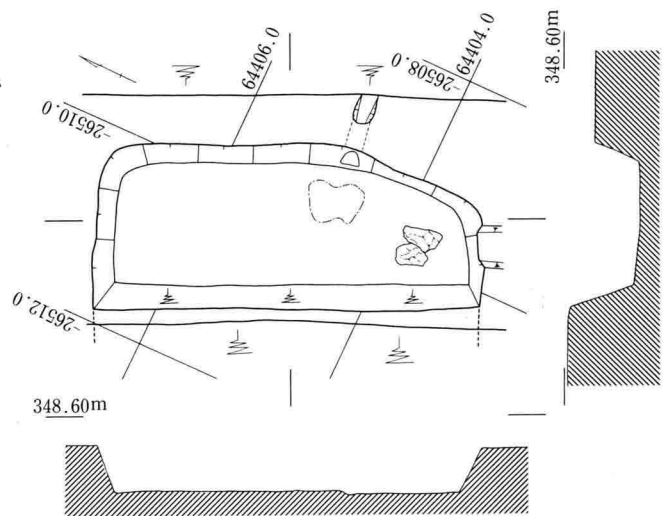


第229図 S A 30遺物実測図

### S A 31 (J<sub>3</sub>区 2次面)

G区S A 30とは、かなり北へ距離を有する住居跡である。その間H区には該期の住居跡は検出されず、またI区には河川跡と思われる礫層面を検出していることから、別の集落単位を想定しうる位置に立地している。またL区のS A 32とも距離があり、いわゆる松原遺跡とは別の遺跡として認識できる可能性が考えられる。

住居の西側半分は調査区外のため全容は明らかではないが、東側壁の南寄りにカマドが非常に良好な状態で検出された。主軸方位はN65° Eを測り、一辺4.08mの正方形と考えられる。特筆すべきはカマドに破壊行為の痕跡が見られないことと、遺物が原

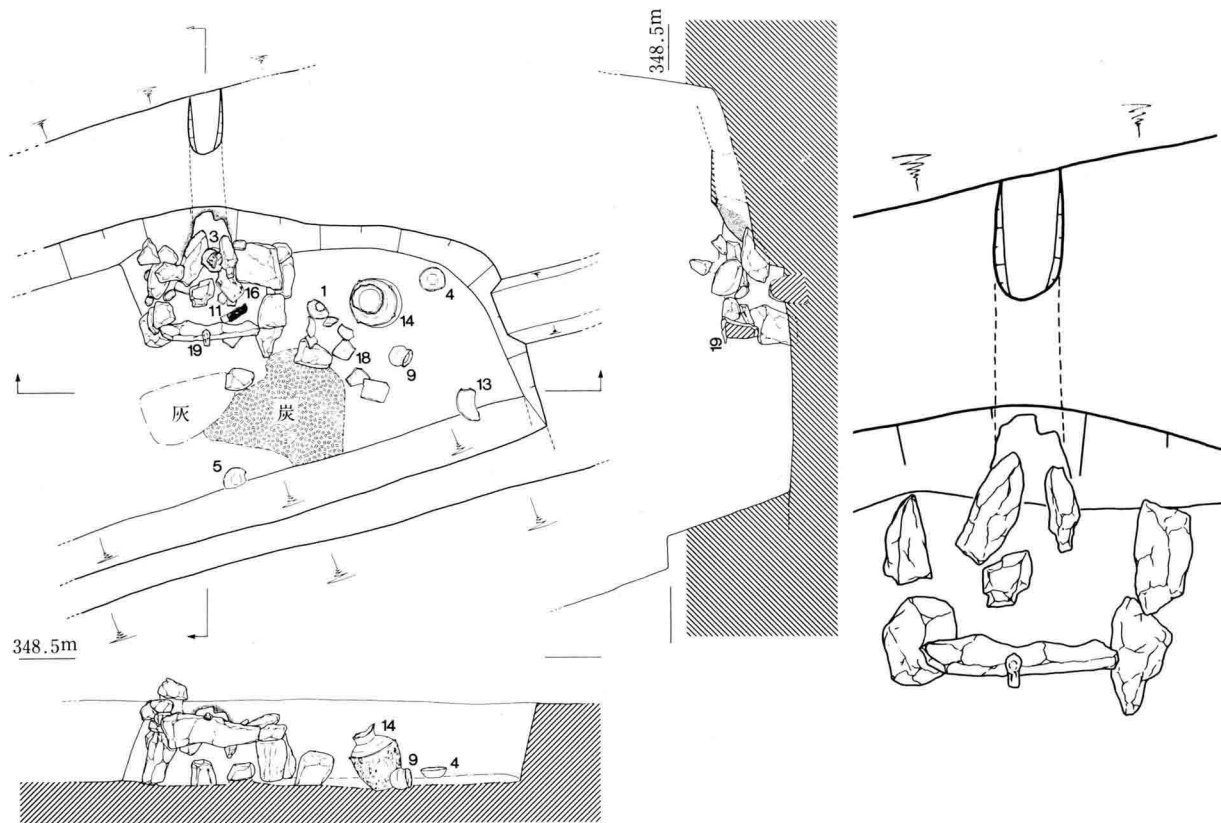


第230図 S A 31実測図

位置を保っていると考えられることであろう。カマド本体部分では石材が構築されたまま残っており、炊口部分の天井には石材が架せられていた。なおこの石材にはなぜか小型鉄斧(19)が付着していた。左袖部はすべて石材を芯としているのに対し、右袖部は土台は粘土のみで上部に石材を使用していたようである。煙道入口部には平石を貼り耐熱・保温効果を狙ったものと考えられる。内黒処理された土師器杯(3)も平石の間から出土し、特異な検出状況である。床面からの煙道の高さは32cmである。支脚石は中央より若干右によっており、床面からの支脚石の高さは19cmである。カマドの前面の床面には灰と炭化物が広がっていた。



写真225 S A31遺物出土状況



第231図 S A31遺物出土状況 (S = 1 : 40)

第232図 同カマド検出状況 (S = 1 : 20)



写真226 SA31カマド近景および遺物出土状況

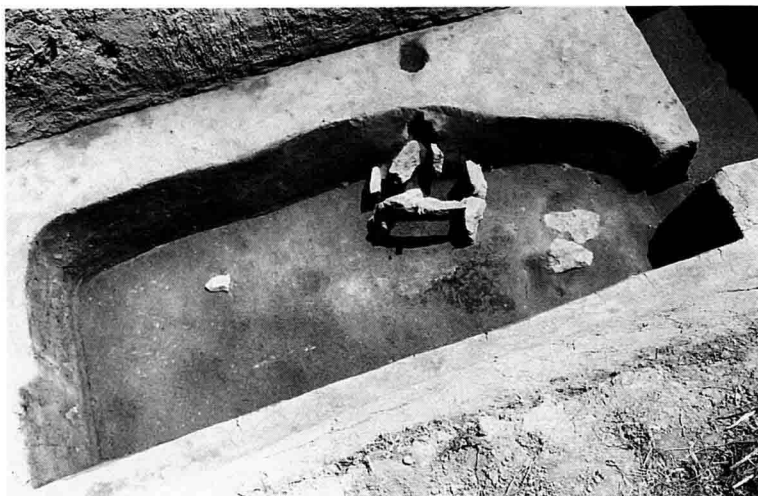


写真227 SA31全景

遺物は住居機能時の原位置を保っているものと思われる。カマド本体内から出土した遺物は煙道部入口から土師器杯(3)、燃烧部床面から小型甕(11)と甌(16)である。その他は主にカマドの左側で出土した。特に土師器杯(4)と小型甕(9)は完形、須恵器四耳壺(14)は口縁部を欠損しているのみで、正置された状態であった。中身については水洗洗浄の結果何も検出されなかった。



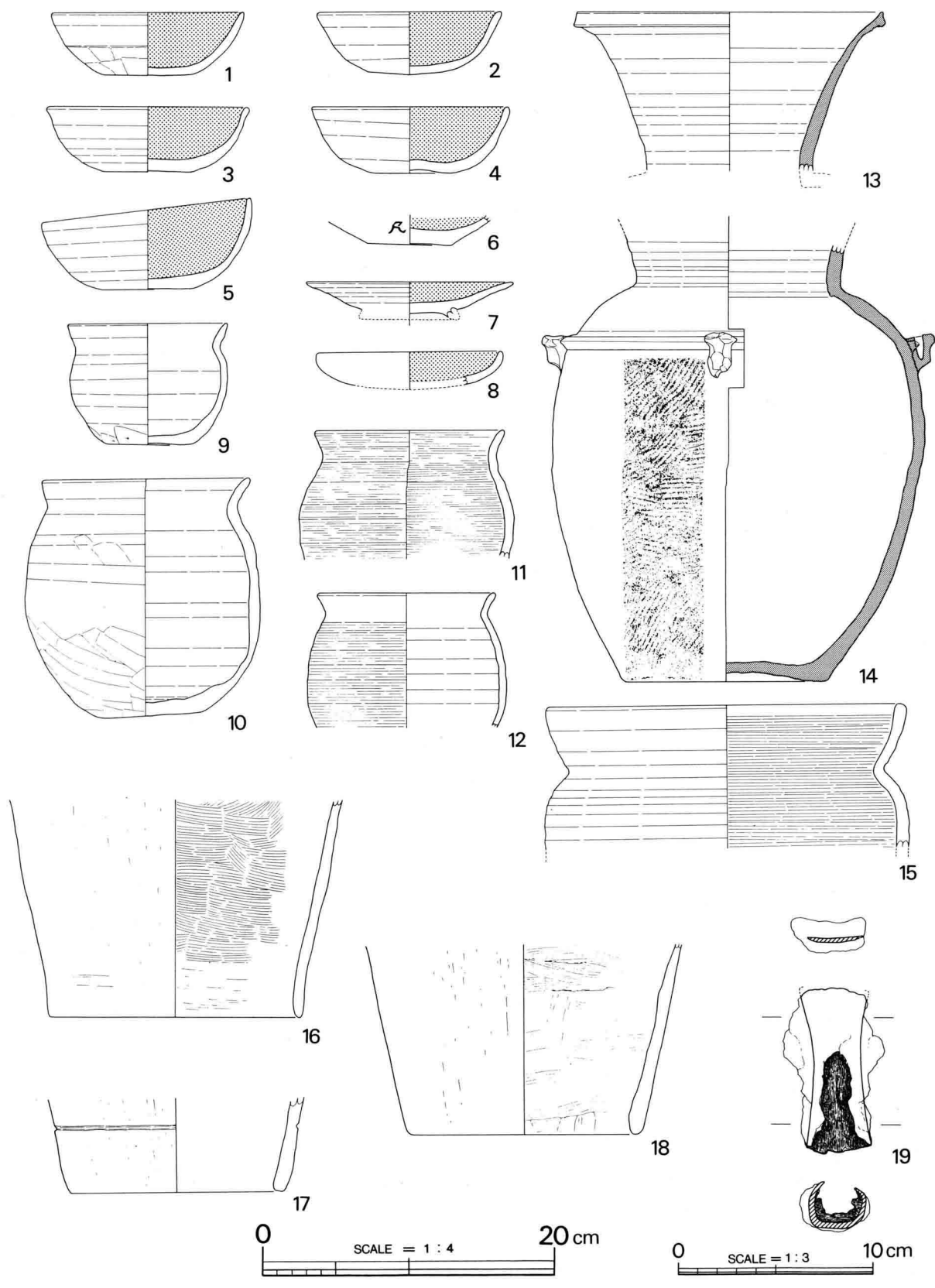


写真228 S A31カマド近景



写真229 S A31完掘全景

出土した遺物内容は、すべて内黒処理された土師器杯（1～6）6点、皿（7・8）2点、小型甕（9～12）4点、ケズリ甕（15）1点、須恵器壺（13・14）2点、甑（16～18）3点である。この内土師器杯（6）の底部付近には「尺」字状の墨書がある。



第233図 S A31遺物実測図 (19はS = 1 : 3)

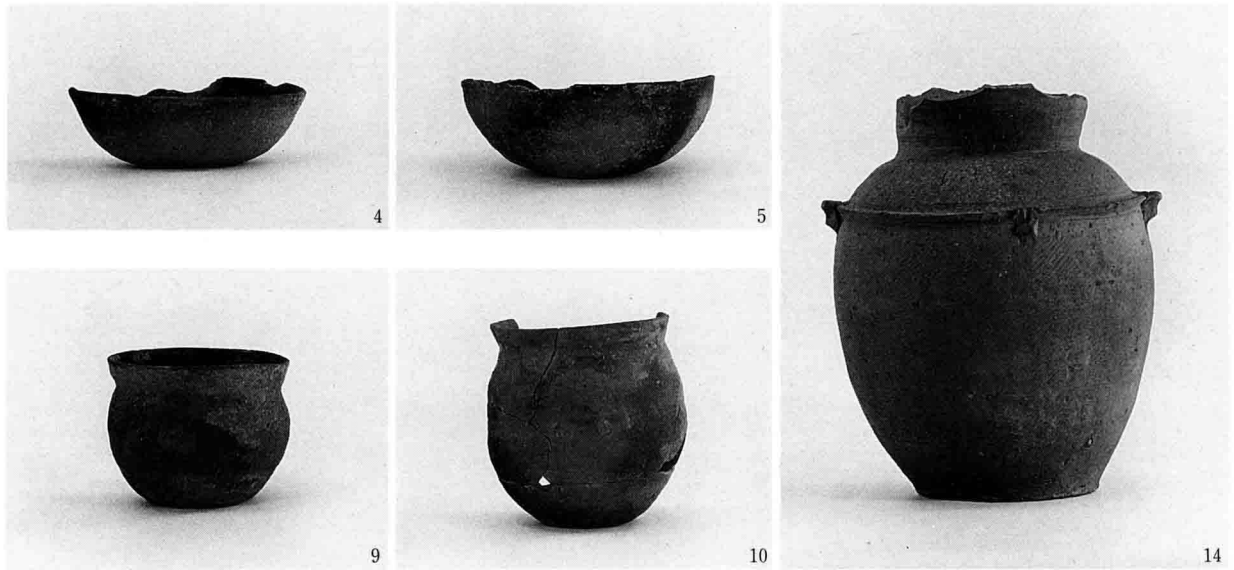
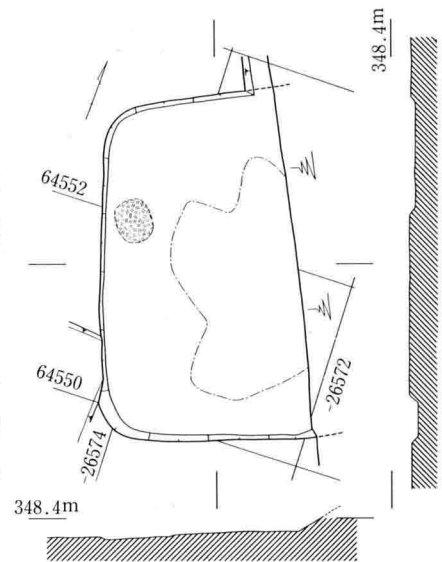


写真230 S A31遺物写真

**S A32 (L区2次面)**

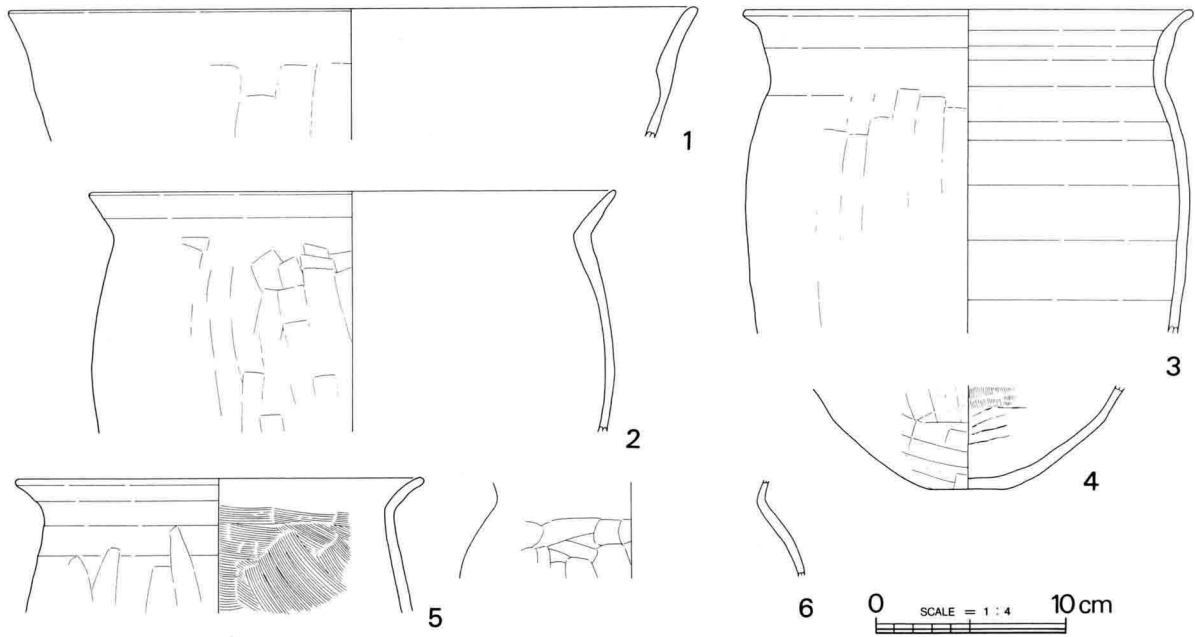
G区はJ区とも離れており、S A32~36はA~G区の集落とは別の集団単位を想定するのが適当と思われる。東側半分が調査区外のため規模は明確ではないが、主軸方位N18° W、一辺3.60mの正方形が推定できる。住居内ではよく絞まった堅緻な床面が比較的広範囲に検出された。西側壁近くでは炭化物の塊も検出した。検出面からの床面の高さは4cm前後と浅いため、出土遺物量は多くない。図化できたものは土師器大型鉢(1)が1点、ケズリ甕(2~5)が4点、肩部に横方向のケズリが施される武蔵型甕片(6)が1点のみである。



第234図 S A32実測図



写真231 S A32

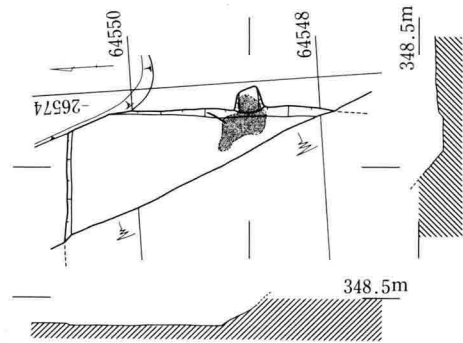


第235図 SA32遺物実測図

**SA33 (L区2次面)**

SA32に切られる住居跡で、ほとんどが調査区外のため規模等は不明である。予想される主軸方位はN86° Eである。カマドは東側壁に設置され、煙道が若干残るにすぎない。煙道と床面の一部は焼土化している。検出面からの床面の高さは3 cmと浅くSA32の床面よりも高い。

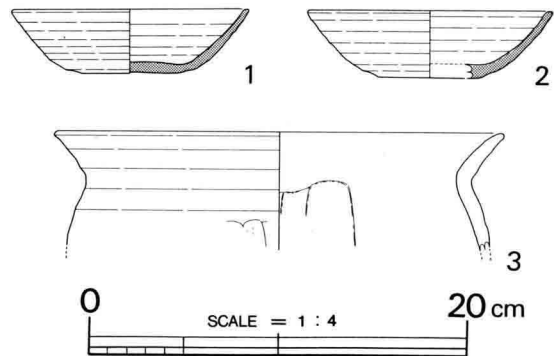
遺物出土量は少ない。須恵器杯(1)を除く遺物のほとんどはカマド部より出土し、その内図化できたものは須恵器杯(1・2)2点、ケズリ甕(3)1点のみである。



第236図 SA33実測図



写真232 SA33遺物出土状況



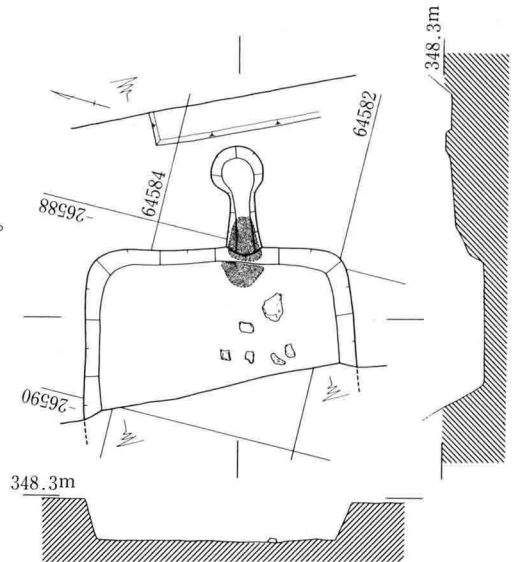
第237図 SA33遺物実測図



写真233 S A 33

**S A 34 (M区 2次面)**

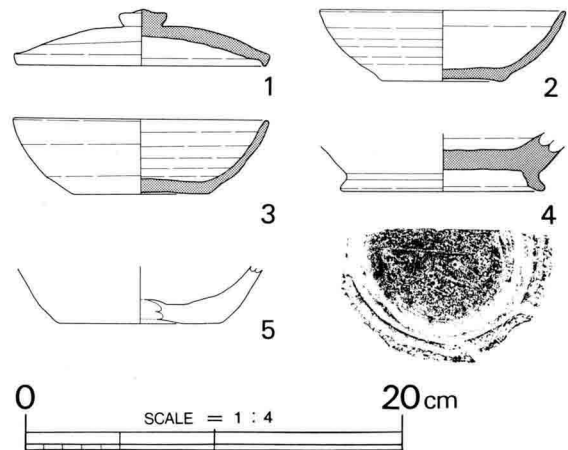
主軸方位N76° E、横軸2.82mを測る小型の住居跡である。西側半分が調査区外となるため全容を知ることはできない。住居東壁の、中央より若干南側に寄った位置にカマドが設置されている。煙道部の一部と灰溜り土坑が残っており、煙道部の入口とカマド床面は焼土化していた。支脚石および両袖の痕跡すら残存していないことから、住居廃絶時の破壊行為が徹底していたことをうかがわせる。カマド前面に構築材と思われる石材数個と土器片が出土した。須恵器杯蓋(1)と杯(2・3)、底部に線刻のある須恵器壺底部(4)の他、土師器甕(5)がある。



第238図 S A 34実測図



写真234 S A 34カマド遺物出土状況



第239図 S A 34遺物実測図



写真235 S A34

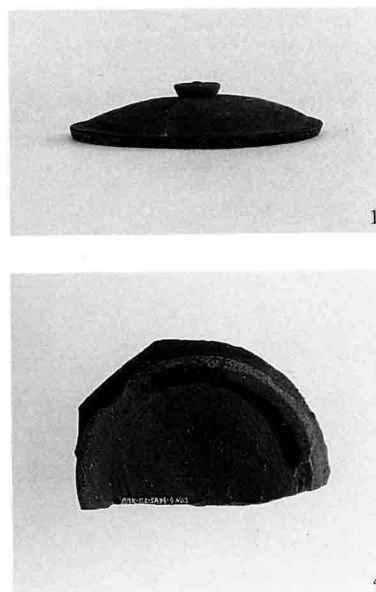
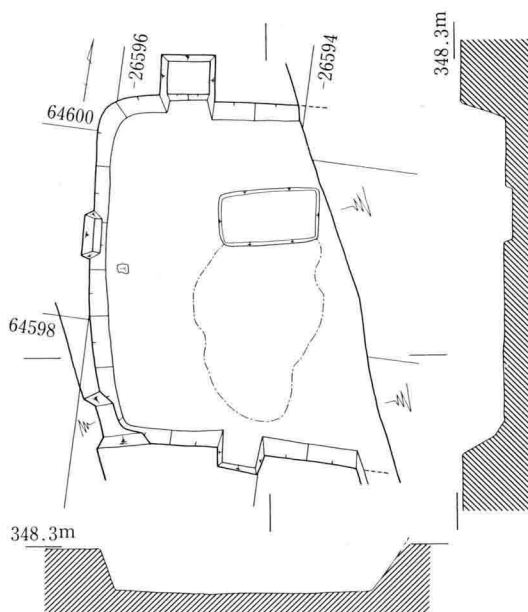


写真236 S A34遺物写真

**S A35 (M区 2次面)**

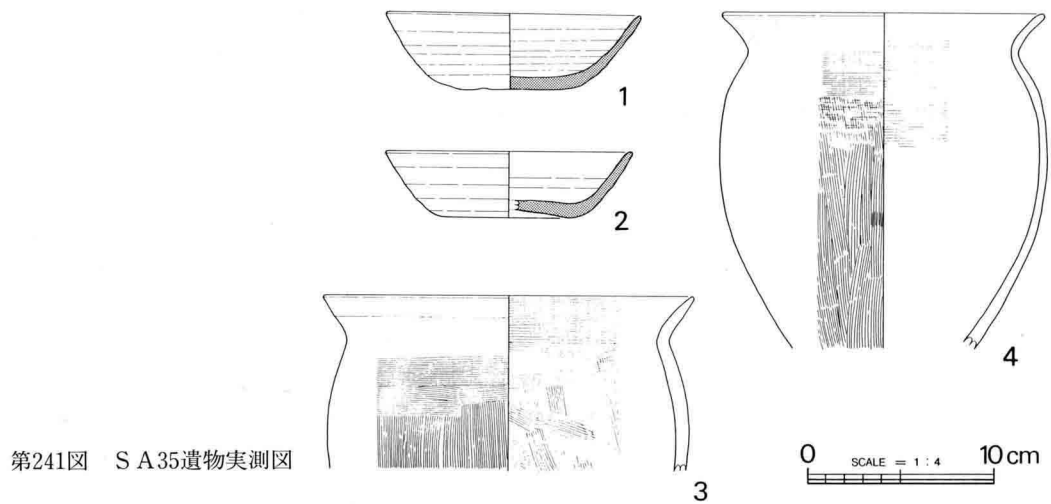
住居の東側は調査区外であり、他3辺にカマドの痕跡が認められないため、カマドは東側に設置されているものと思われる。主軸方位 $N81^{\circ}E$ 、一辺 $3.54m$ を測る正方形を呈する住居跡と予測できる。中央には近世以降と思われるイモ貯蔵穴攪乱を受けている。検出面から床面の高さは $42cm$ で、堅緻な床面が中央に広がっている。遺物出土量は少ない。図示できたのは須恵器杯(1・2)と土師器ハケ甕(3・4)のみである。



第240図 S A35実測図



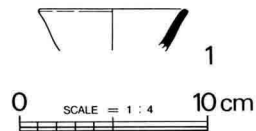
写真237 S A35



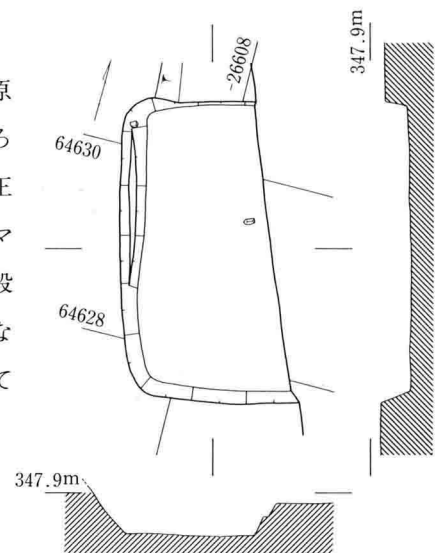
第241図 S A35遺物実測図

### S A36 (M区2次面)

今調査時の北限の住居跡である。N区には住居遺構がないため、松原遺跡(別の遺跡名を冠する必要性も勘案しながら)集落範囲の北限となろう。東側半分は調査区外となるが、主軸方位N77°E、一辺3.20mの正方形を呈するものと思われる。検出した部分では焼土・炭化物などカマドの存在を想定する痕跡は確認できなかった。よってカマドは東壁に設置されていたものと思われる。遺物は全くといってよいほど入っていない。覆土の上層から混入品と考えられる陶器(古瀬戸?、1)が出土している。



第243図 S A36遺物実測図



第242図 S A36実測図



写真238 S A36

(2) 土壙墓 (S J 1 ~ 10)

S J 1 (B区1次面)

C区との境付近で検出した。検出面の状態が悪く、墓壙平面形には若干の曖昧さが残るが、全長283cm、幅98cmを測り比較的大きめである。東側にある小穴は同時期のものではない。埋葬人骨の頭位はN72° Eを測り、両手・両足を伸ばした仰臥伸展葬である。骨の遺存状態は悪く、どの部位においても脆弱であった。下顎以外の頭部は骨片すら検出できなかった。埋葬時より下顎以外の頭部がなかった可能性が考えられる特異な例といえる。

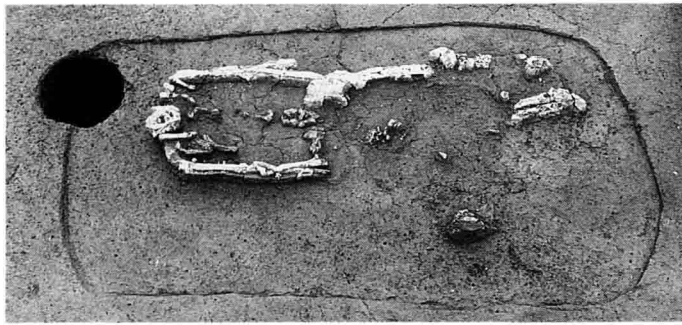
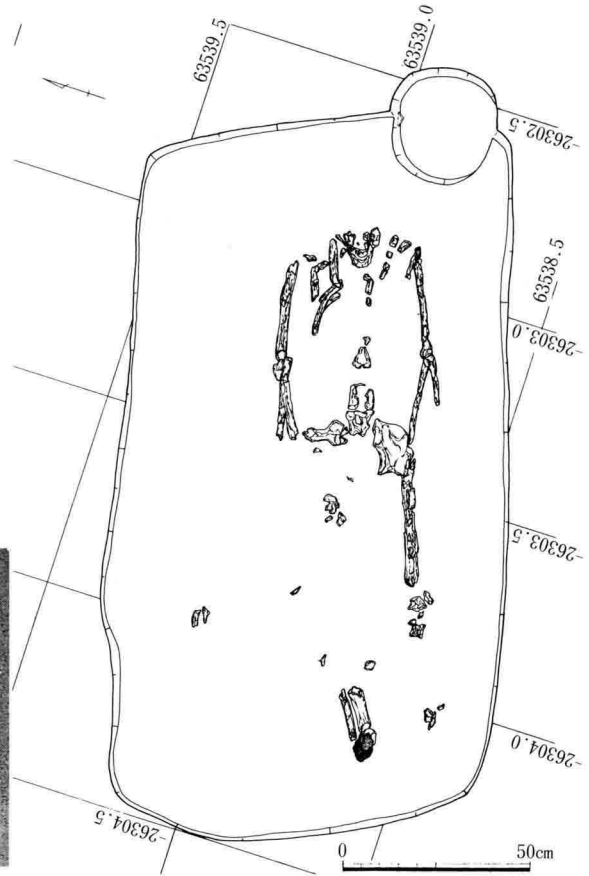


写真239 S J 1



第244図 S J 1実測図 (S = 1 : 20)

S J 2 (C区1次面)

C区の南側、中世のSD 2のすぐ近くで検出した。墓壙は全長130cm、幅76cmを測る小判形である。埋葬人骨の頭位はN33° Wで、顔は右を向いている。体位は右腕を曲げ、左腕を伸ばし、脚を立膝状態にしたような仰臥屈葬である。右腕と脚部の曲げ具合から、埋葬時の緊縛を想定できる。骨の遺存状態は良好で、歯もほとんど揃っていた。

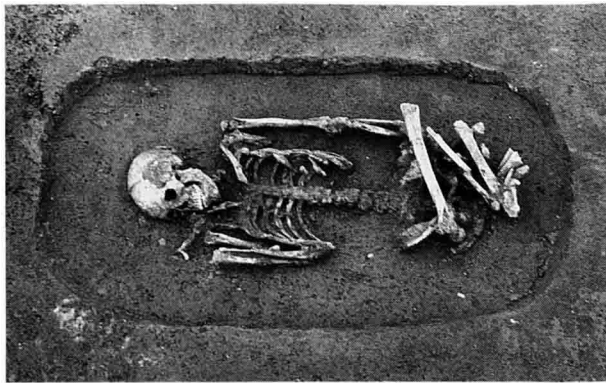
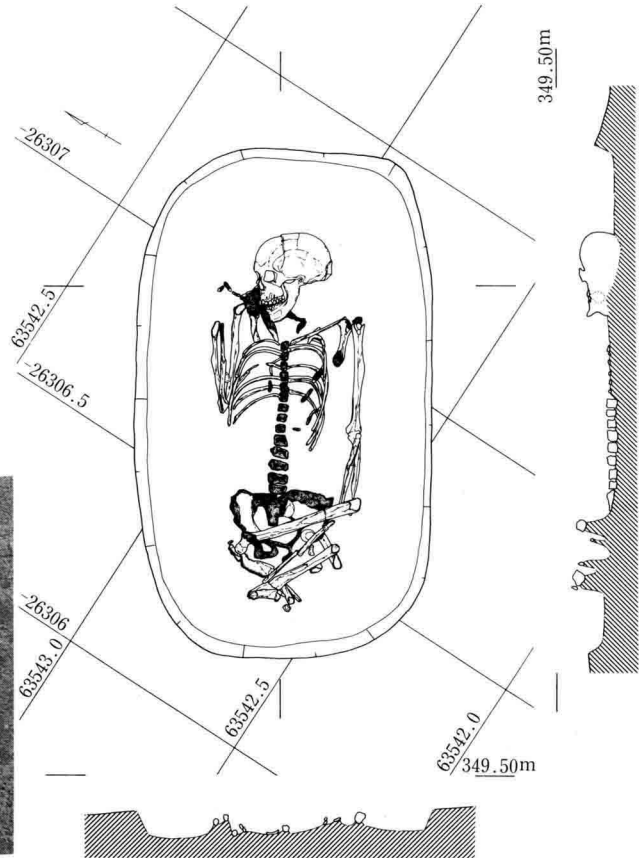


写真240 S J 2



第245図 S J 2実測図 (S = 1 : 20)



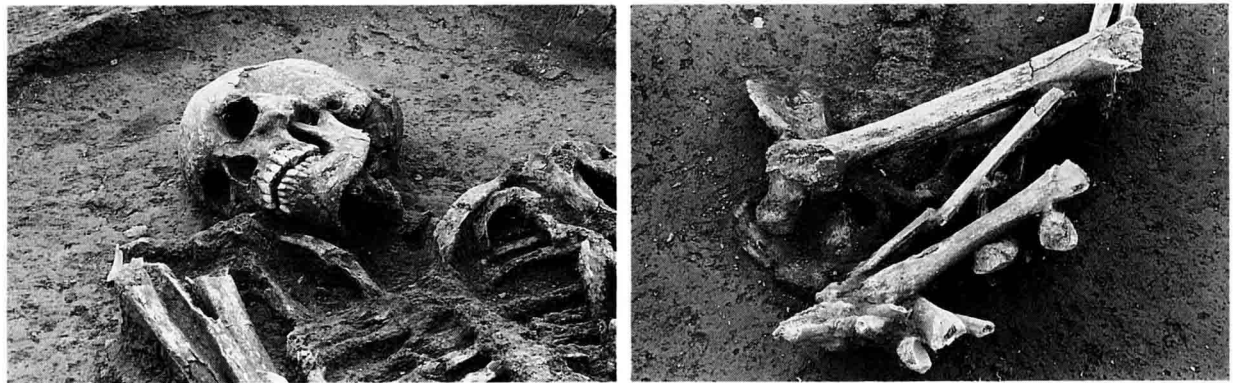


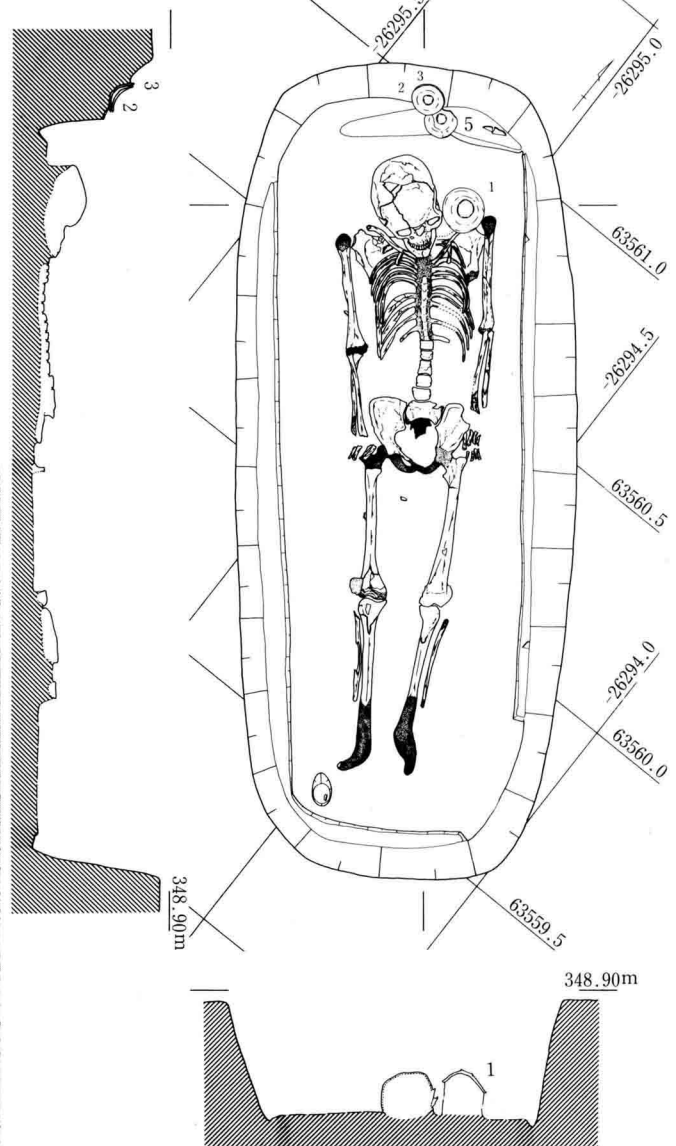
写真241・242 S J 2人骨検出状況

### S J 3 (C区1次面)

C区の柵列遺構S H 1の北側にて検出した。墓壙は全長208cm、幅88cmを測る比較的長大なものである。当初より埋葬位が伸展葬であることを予想させた。検出面からの墓壙床面（人骨検出レベル）の深さは29cmを測る。墓壙床面には両棺側材の痕跡が残り、木棺墓である可能性が高い。小口部分は、天地とも掘り込みが認められるものの、明確に埋め込まれていたものとは考えがたい。右足の先辺りには、性格不明な小穴が斜めに穿たれていた。また副葬土器の出土状況から、蓋が架けられていた可能性が考えられる。埋葬人骨の頭位はN39° Wを測る。体位は仰臥伸展葬である。骨の遺存状態はきわめて良好で、検出直後の骨の色調は赤褐色を呈していた。



写真243 S J 3



第246図 S J 3実測図 (S = 1 : 20)

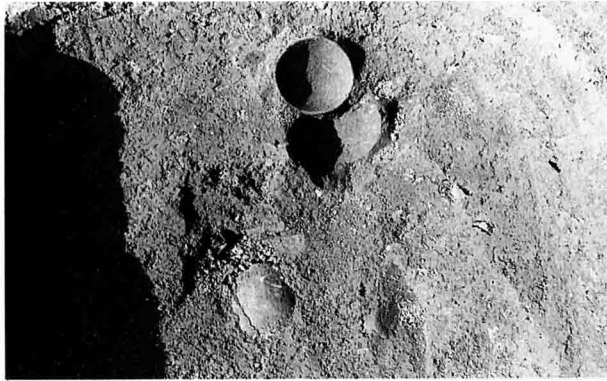
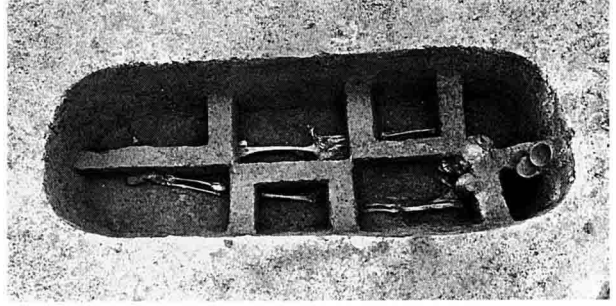
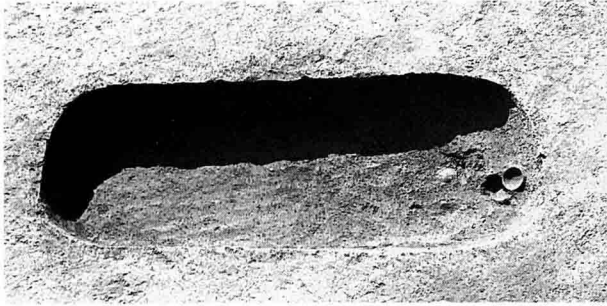
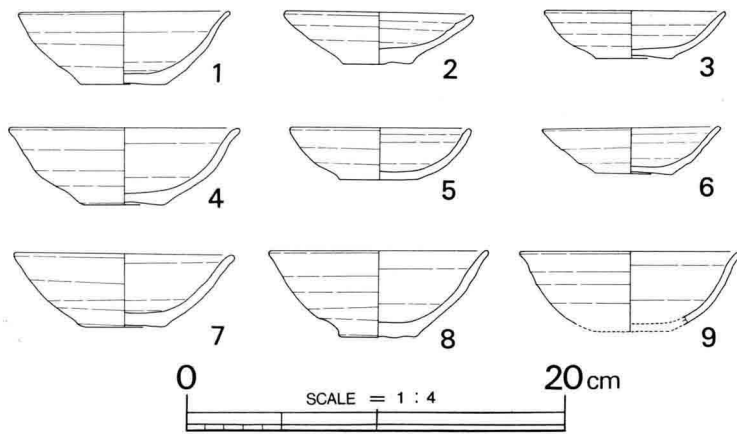


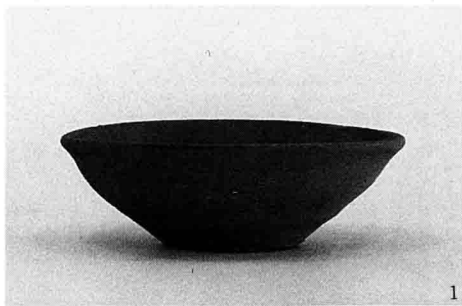
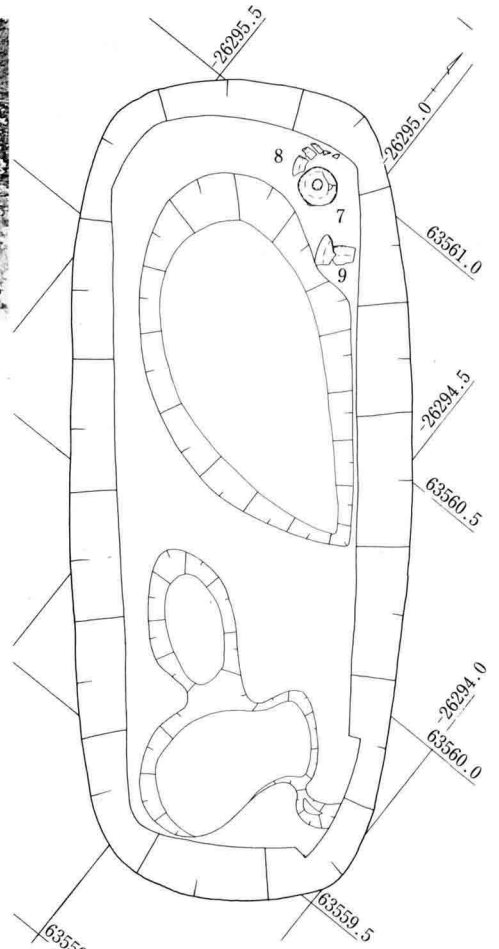
写真244 S J 3人骨検出状況



写真245 S J 3 下層土器群出土状況



第247図 S J 3 遺物実測図



供献土器はすべて土師器杯である。出土状況から棺上に置かれていたもの(1~6)と、棺下あるいは人骨下に埋められたもの(7~9)とに分かれる。2と3が重なった状態で検出されたことは、棺上に置かれていた土器が重ねて置かれたことを意味するものであろうか。人骨左肩口にある1は不明である。

第248図 S J 3 下層実測図 (S = 1 : 20)

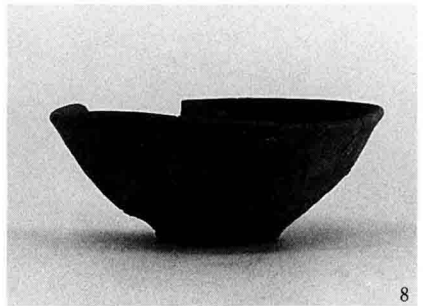
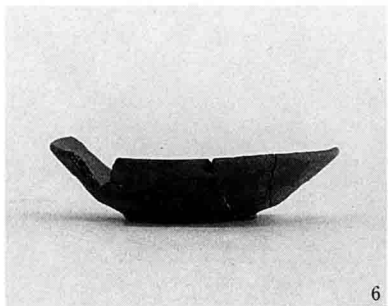
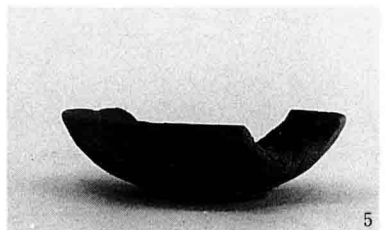
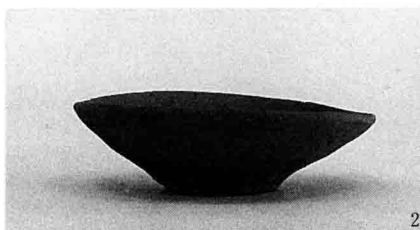


写真246 S J 3 遺物写真

### S J 4 (C区1次面)

C区西側調査壁際にて検出した。墓壙は全長156cm、幅86cmを測る。C区検出面からの墓壙床面(人骨検出レベル)は11cmであるが、壁面で確認できた掘り込みは30cmを測るため、C区検出面よりは新しいといえる。頭部付近に拳大の角石があったが、枕として用いたのであろうか。埋葬人骨の頭位はN 7° Wを測る。体位は、右向き側臥で両足を右側に折り曲げる屈葬である。骨の遺存状態は比較的良好と思われるが、滅失した部分も多いように思われる。

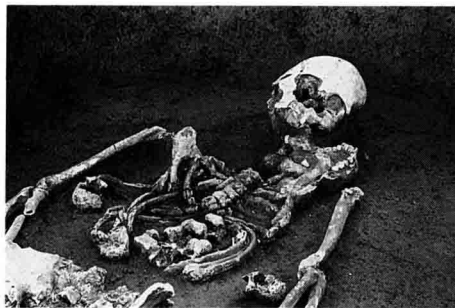
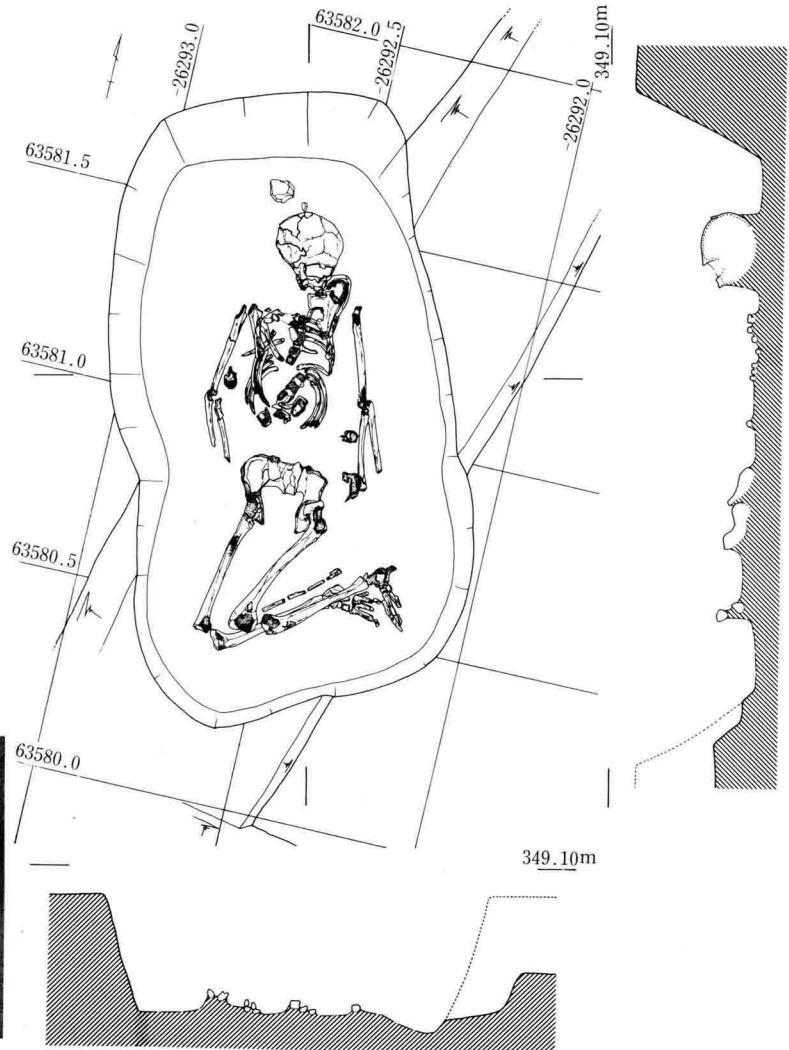


写真247 S J 4 人骨検出状況



第249図 S J 4 実測図 (S = 1 : 20)

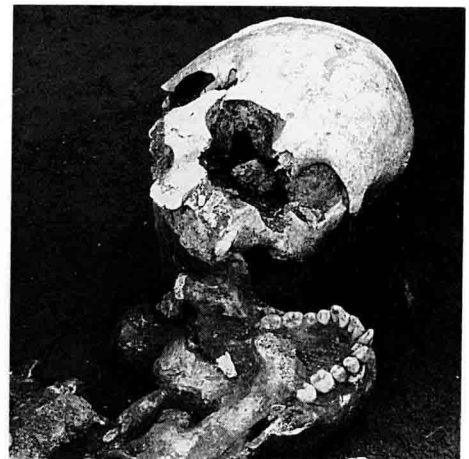
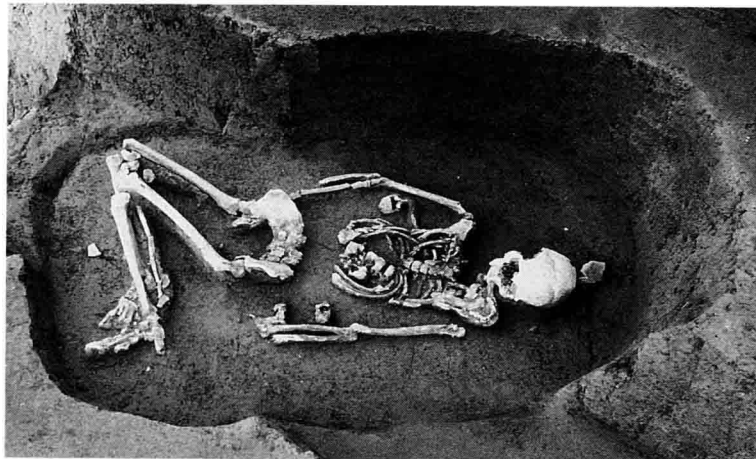


写真248・249 S J 4 人骨検出状況

### S J 5 (C区1次面)

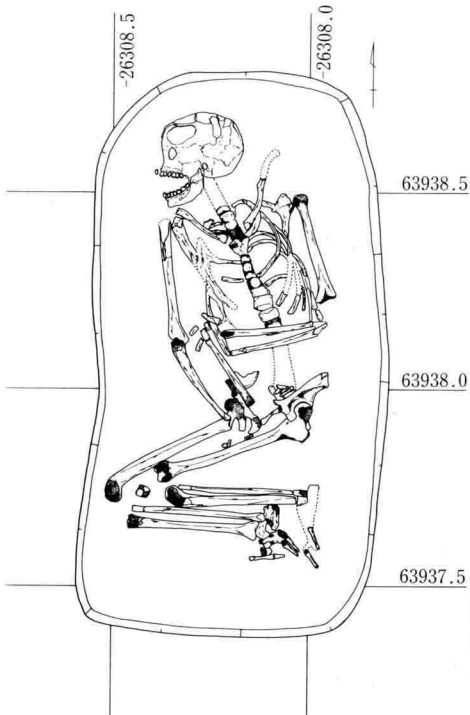
S J 4の全体を検出するために拡張した調査区西側壁部分で、牛馬と思われる獣骨の頭部のみ検出した。墓壙の検出はできず、埋葬状況は不明瞭である。したがって埋葬されたかどうかとも断定できない。



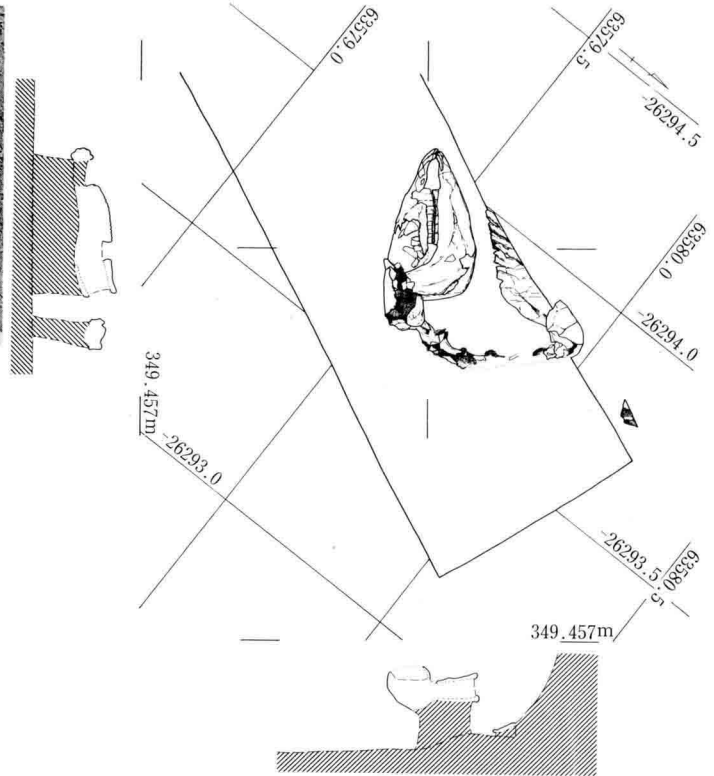
写真250 S J 5

S J 6 (D区1次面)

全長144cm、幅75cmを測る墓壙で、検出面からの掘り込みは5cmと浅い。頭位はほぼ真北を示し、左腕を腹部の上に曲げ右腕を伸ばした仰臥で、両足を右側に向けた屈葬である。



第251図 S J 6 実測図 (S = 1 : 20)



第250図 S J 5 実測図 (S = 1 : 20)



写真251 S J 6 全景

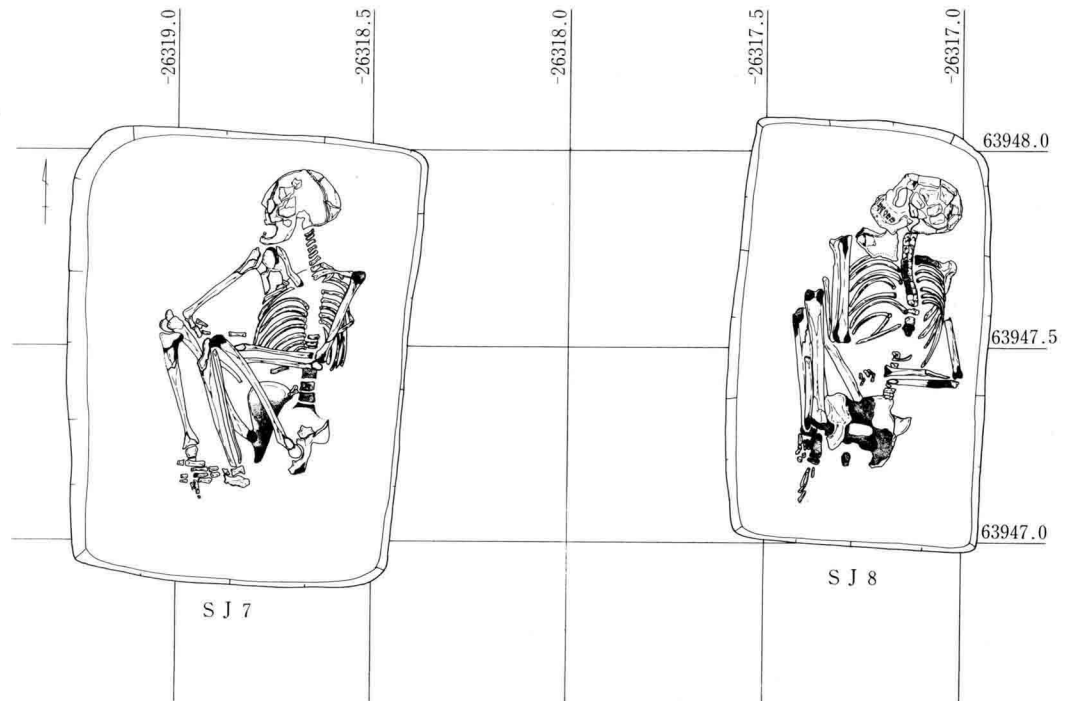


写真252・253 S J 6 人骨検出状況

S J 7

S J 8

(D区1次面)



第252図 S J 7・S J 8実測図 (S = 1 : 20)



写真254 S J 7・S J 8

2基ともほぼ真北に頭位を示し、並んで検出された。

S J 7の墓壙は全長116cm幅87cm、S J 8は全長109cm幅66cmを測る。S J 7の体位は仰臥屈葬で、S J 8は側臥屈葬、しかも両腕、両足を緊縛されていたものと推定される。2体とも右側、つまり西を向いている。



写真255 S J 7



写真256 S J 8

2体とも骨の遺存状態は良好で、手足の指らしき部分も検出されている。

検出状況からこの2基はほぼ同時に掘り込まれた可能性も考えられるが、その証拠は確認できなかった。また第IV章第10節の西沢氏の所見ではS J 7が男性、S J 8が女性の、熟年期と見なされる人骨であるという。この2体が夫婦である可能性を肯定する物証もないが、推量を重ねながらも夫婦合葬例とみることもできよう。



写真257 S J 7・S J 8

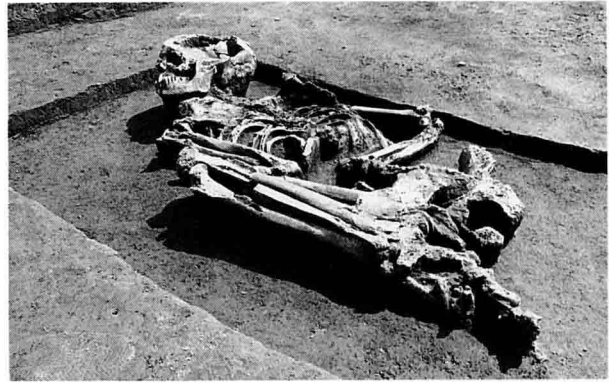


写真258・259 S J 7人骨検出状況

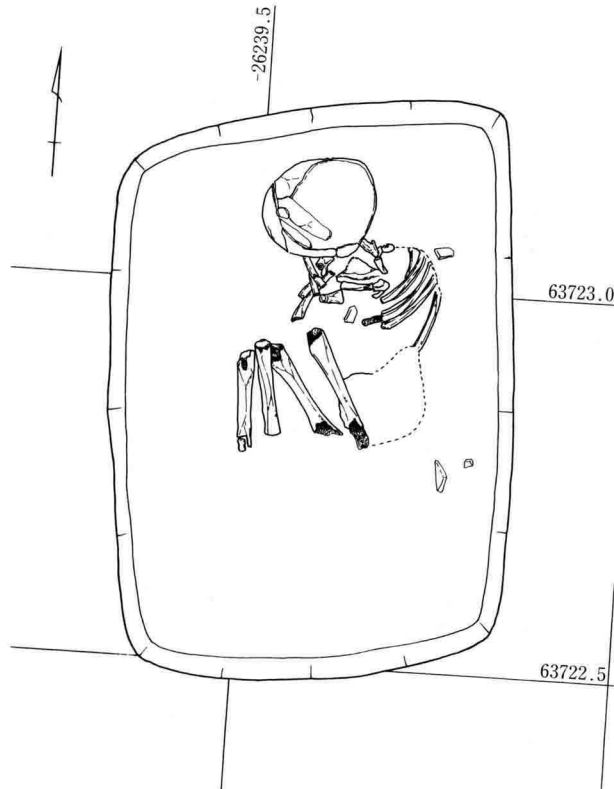
写真260・261 S J 8人骨検出状況

### S J 9 (E区1次面)

検出面からの掘り込みを明確に確認できず、墓壇の形態・規模に関しては不明瞭な点が多い。現状では全長76cm、幅54cmを測る。不明瞭ながらも墓壇・人骨の規模から幼年期の人骨と推定される。埋葬体位はうづくまるような側臥屈葬である。骨の遺存状態は良好であるが、手足の指など、滅失している部分も多い。



写真262 S J 9 全景



第253図 S J 9実測図 (S = 1 : 10)

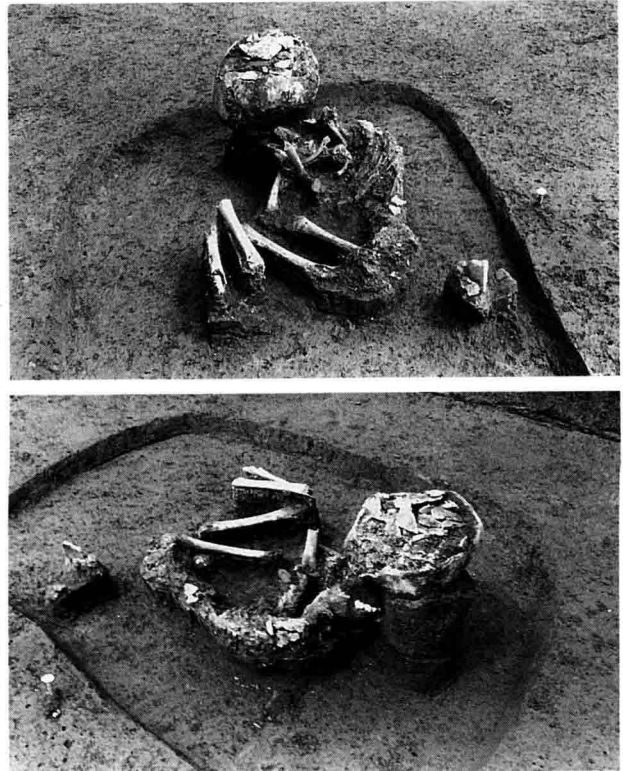
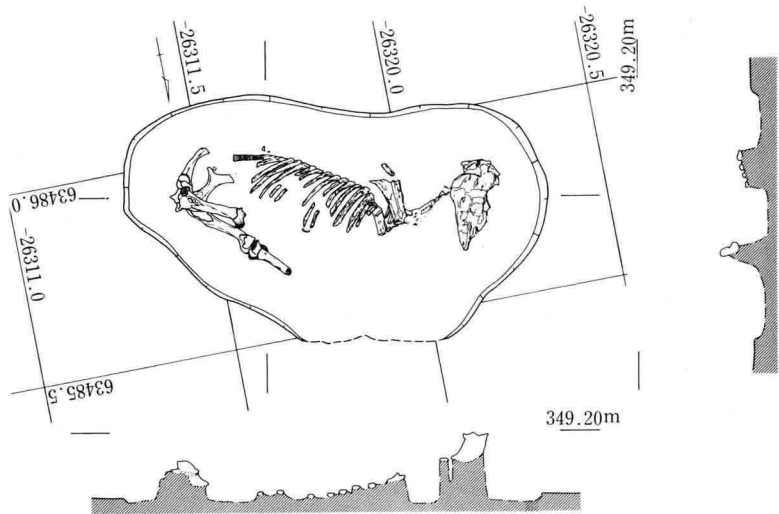


写真263・264 S J 9人骨検出状況

### S J 10 (A区2次面)

A区の南端、2次面で検出した。前述したとおりA区は南に向かって遺構面が落ち込んでおり、低湿地帯もしくは旧河川へと移行していく地形である。このため墓壇に埋葬された獣骨か自然葬かは不明である。検出した獣骨は牛馬と思われ、ほぼ全体が残存している。

時期的には検出面としての認定が甘く、遺物もないが、1次面と同様、平安中期以降と思われる。



第254図 S J 10実測図 (S = 1 : 20)

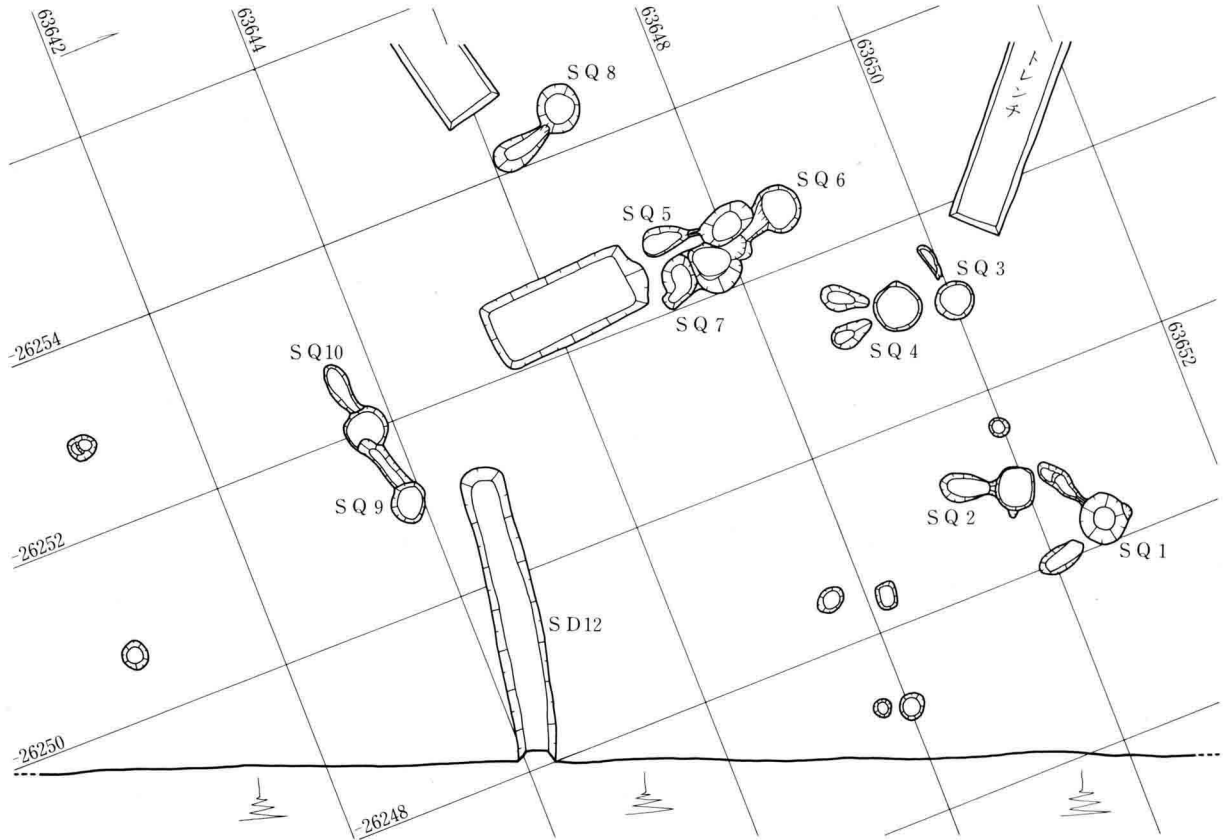


写真265・266 S J 10獣骨検出状況



### (3) 製錬炉状遺構 (D区2次面、SQ 1~10)

D区2次面にて検出した10基からなる遺構群である。同検出面では竪穴住居跡等の居住施設は検出されず、溝跡や土坑のみである。D区からE区にかけて検出したSD14~16は3本が併行に走り、あたかも弥生時代の囲郭集落にみられる環壕のようである。このSD14~16と同一面であることから遺構検出面から推定される時期は、9世紀中頃から10世紀代という約150年間の時間幅の中で考えられる。遺構検出面の状況よりD区1次面の竪穴住居跡を遡らないことから、出土遺物が僅少なためこれより時間幅を限定することには甚だ危険を内包するものの、10世紀代である可能性は高いものといえる。



第255図 SQ 1~10遺構分布図 (S = 1 : 80)

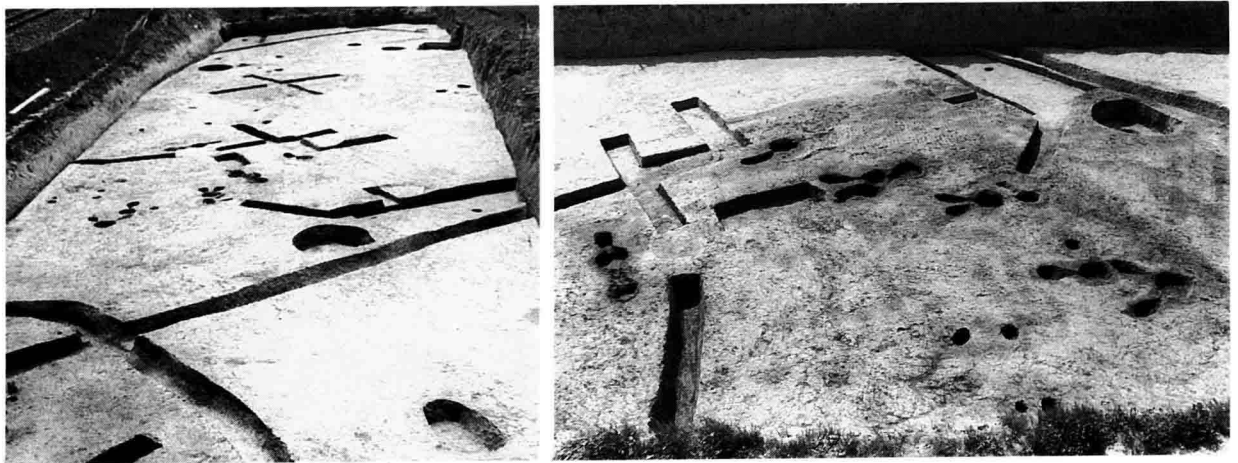
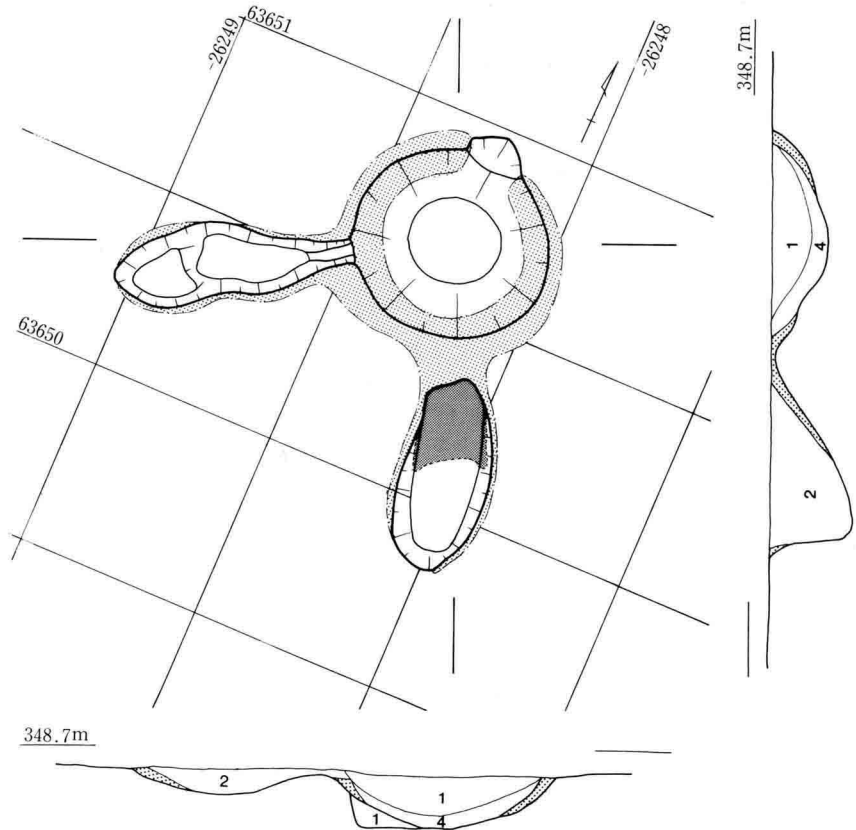


写真267・268 SQ群全景

SQ 1

2基の付属施設を有する精練炉状遺構で、燃烧炉は直径53cm、残存深さ15cmを測り炉底部は丸底状を呈している。炉内は底部を除き焼土化していた。北側に何らかの施設と思われる痕跡が残っていたが、性格は不明である。南側の付属施設は排滓溝と考えられ、炉に近接する部分は硬質焼土化しており、覆土には流動滓が多量に混入していた。西側の付属施設はフイゴの痕跡と思われる、焼土化した羽口取付粘土が出土した。

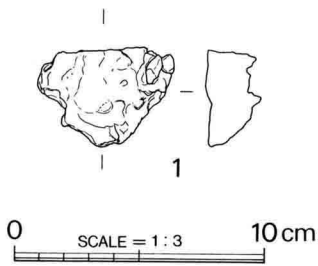


第256図 SQ 1 実測図 (S = 1 : 20)



写真269 SQ 1

出土した遺物内容は、炉内より炉内滓・炉壁・羽口取付け粘土、南側排滓溝より流動滓、炉壁、西側フイゴ跡より羽口取付け粘土、炉壁である。SQ 1全体の炉内滓の重量は1,840g、流動滓は424gを量る。この内、南側排滓溝より出土した流動滓1点を図示した。



第257図 SQ 1 遺物実測図



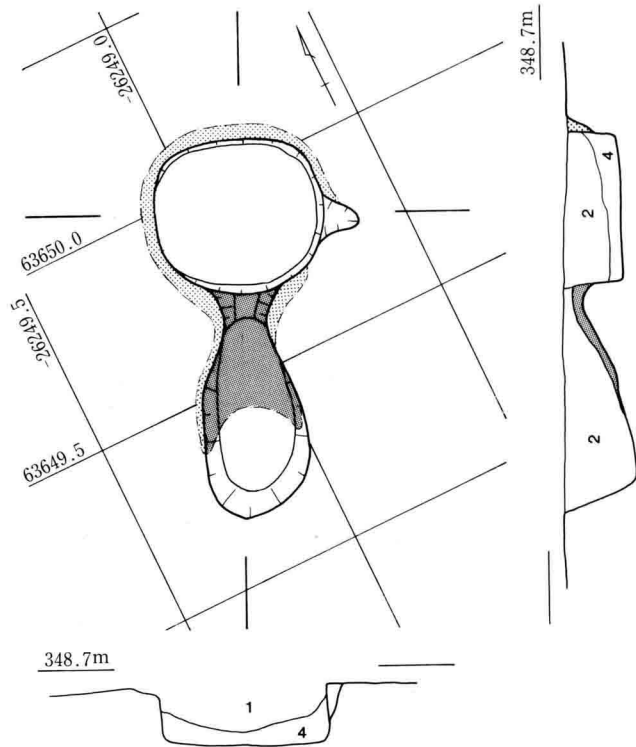
写真270 SQ 1 (南から)

### SQ 2

SQ 1の西側フイゴ跡に近接して検出されいるが、前後関係は明らかではない。燃烧炉は直径44cm、残存深さ16cmを測る。炉底部は平底で、壁面はほぼ直立している。東側にはフイゴの痕跡と思われる若干の削り込みがみられる。南側の排滓溝は炉に近接する部分では非常に硬質焼土化しており、覆土にも流動滓・炉壁が含有されていた。SQ 2全体の炉内滓の重量は284g、流動滓は124gを量る。



写真271 SQ 2



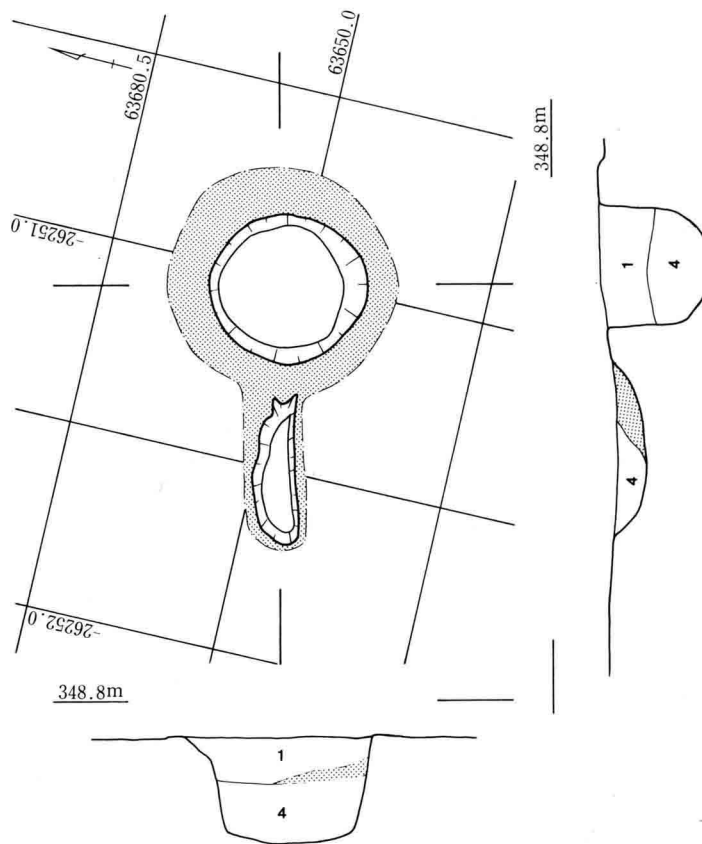
第258図 SQ 2実測図 (S = 1 : 20)

### SQ 3

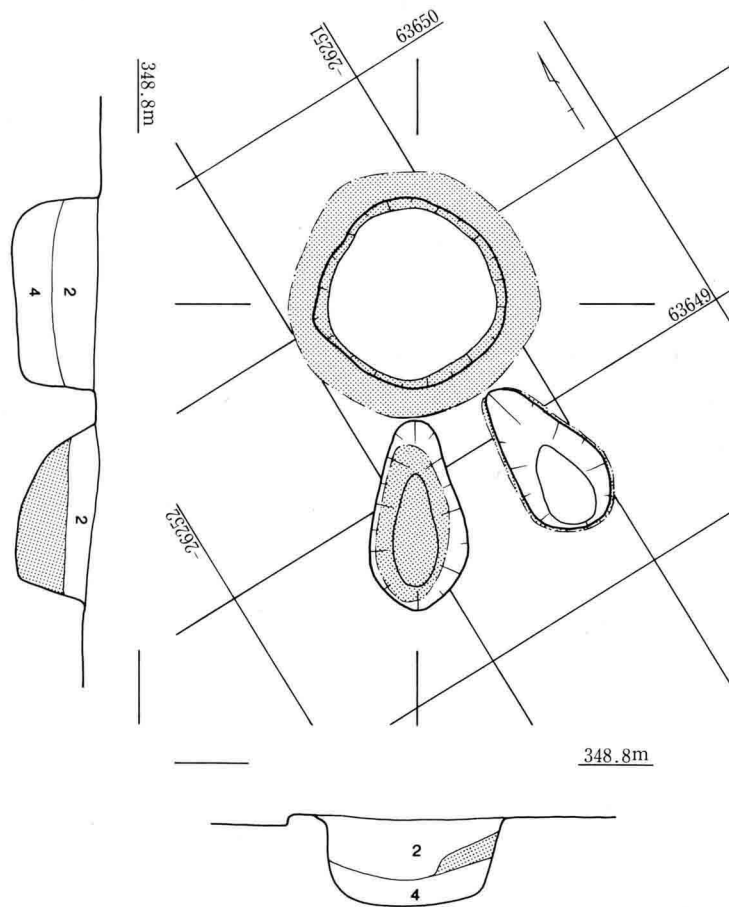
他の精練炉状遺構と比して若干形態が異なる遺構である。燃烧炉の直径39cm、残存深さ29cmを測り、丸底状を呈する。炉の周縁は幅広く酸化焼土化しているが、硬質部分は見当らない。炉内より出土する炉内滓は少ないが、炭化材片が出土している。西側の付属施設は排滓溝の底部と思われる。炉内滓49g、流動滓114gを量る。



写真272 SQ 3



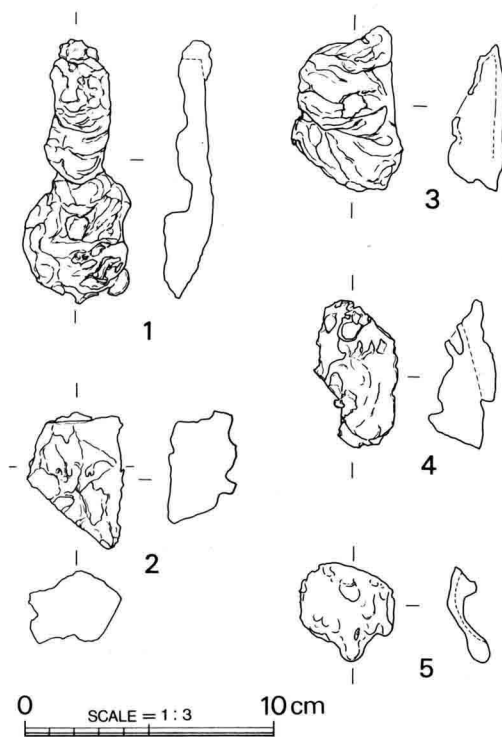
第259図 SQ 3実測図 (S = 1 : 20)



第260図 SQ 4実測図 (S = 1 : 20)

**SQ 4**

SQ 3の南側に近接する位置で検出したが、時間的前後関係は明らかではない。焼土は直径50cm、残存深さ23cmを測る。炉底部はほぼ平底で焼土化していないが、壁面や検出面の周辺部が硬質焼土化しており、良好な焼土状態を示している。焼土内からは炉内滓468g、流動滓762gのほか、炉壁や土師器杯底部破片なども出土している。排滓溝は焼土炉中心よりN149° Wの方向に設置され、底部は焼土化している。埋土より多量の炉内滓、流動滓が出土しており、それぞれ1421g、831gを量る。またフイゴ羽口や鉄塊系遺物も出土している。このすぐ東隣ではフイゴ跡か排滓溝か不明であるが掘込みが検出された。埋土より炉内滓824g、流動滓1392g、フイゴ羽口が出土している。



第261図 SQ 4遺物実測図

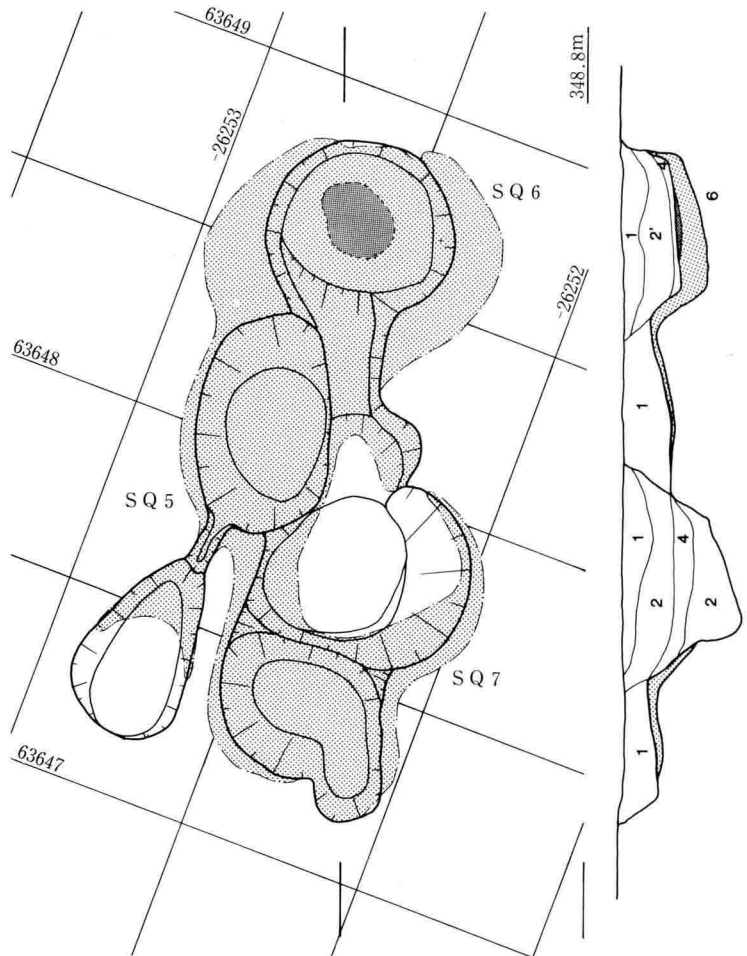
図化した流動滓のうち2と4は、意図的な切断の痕跡が看取される。



写真273 SQ 4

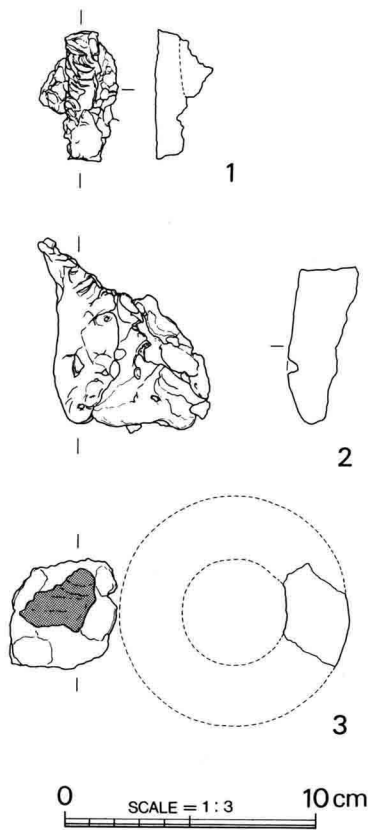
SQ 5・6・7

3基の製錬炉状遺構が重複した様相を呈す遺構であるが、切り合いが著しくそれぞれを明確に検出できなかった。SQ 5とした遺構は燃烧炉と排滓溝で構成される。炉内は丸底で一面焼土化しているが、排滓溝は炉に近接する部分のみである。遺物の出土量は非常に多く、炉内滓2824g、流動滓1455gのほか、鉄塊系遺物、炉壁頂部、鍛冶羽口、フィゴ羽口、羽口支え粘土、内黒処理された土師器杯破片が出土している。SQ 6は燃烧炉と大部分をSQ 7に切られているが排滓溝の一部からなる。燃烧炉の底部中心は硬質焼土化しており、底部は平底である。炉内滓216g 流動滓152gのほか、鉄塊系遺物、炉壁、フィゴ羽口が出土している。製錬炉としての可能性は少ないもののS



第262図 SQ 5・6・7実測図 (S=1:20)

Q 7は2基の土坑で構成される。この内北側の土坑は燃烧炉の可能性はあるが、焼土化していない。南側の土坑は北側よりも浅いが一面焼土化しており、排滓溝の可能性が残される。遺物はほとんど出土していないため、製錬炉状遺構よりは別の性格、たとえば作業ピット等を考慮したほうがよいかもしれない。



第263図 SQ 5・6 遺物実測図

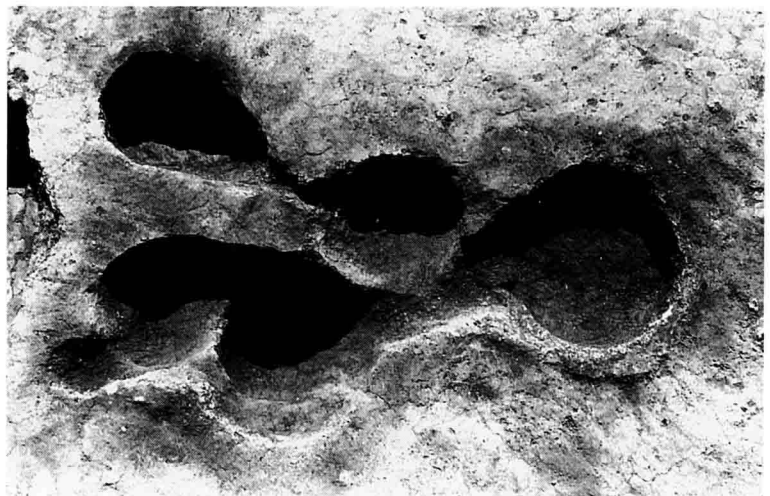


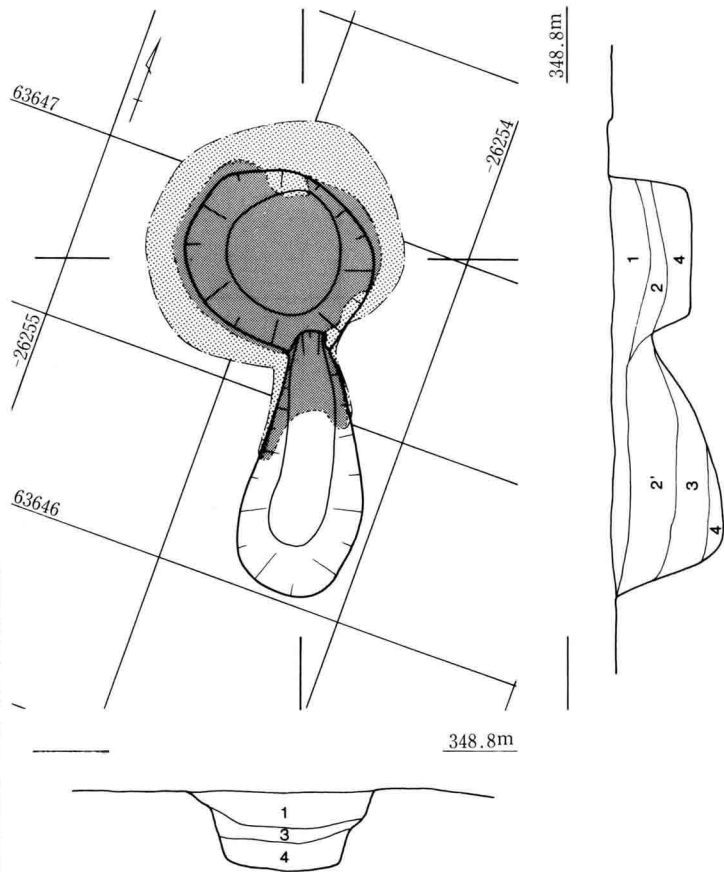
写真274 SQ 5・6・7

**SQ 8**

SQ 5の西側で検出され、燃烧炉と排滓溝からなる。燃烧炉は若干歪ではあるが直径50cmを測り、平底である。炉内は一面硬質焼土化しており、その周辺も酸化焼土化していることから、良好な燃烧状態を示している。排滓溝の対面の焼土が硬質化しておらず、フイゴ跡などの施設を想定できる。炉中心よりN161° Wの方向に排滓溝が設置されている。炉に接する部分は硬質焼土化していた。出土遺物は、燃烧炉内より炉内滓383g、流动滓



写真275 SQ 8



第264図 SQ 8実測図 (S = 1 : 20)

338gのほか、鉄塊系遺物、炉内壁、炭化材があり、排滓溝からは炉内滓1688g、流动滓1303g、鉄塊系遺物、炉壁、炉内壁、フイゴ羽口がある。

**SQ 9・10**

南側のSD121に近接して検出された。SQ 9は、SQ10を切っていることから時期的に新しいといえる。SQ 9は歪な平面形を呈しており、燃烧炉も正円形ではない。炉壁の上部が一部硬質部を含む焼土化しており、平底である。炉内滓1574g、流动滓2089gのほか、炉壁、フイゴ羽口、土師器杯底部破片が出土している。特に流动滓では意図的な切断が看取され



写真276 SQ 9・10